

に之を尊重す。何となれば、一國の軍は、一人の力ら相集りて成るを以てなり。若し夫れ、單に腕力を是れ事とし、智力を忘るゝか如きことあらば、是れ開明人の卑しむ所るとなると雖も、智あり勇あるものに至ては、決して輕んせらるゝことなし。否な、大に尊敬せらるゝものにして、苟も人として、其の一身を保護するの能なきものゝ如きは、却て人に賤しまるゝものなり。人其の身を護らんと欲せば、人を殺すの權を有し、國其の國を防かんと欲せば、戰爭をなすの權を有す、このモンテスキウ氏(萬法精理)の語、實に歐洲に實行せられつゝあるものゝ如し。歐洲に於ける社會と擊劍の關係、夫れ此の如し。文あるもの、豈に武なかるへけんや。(文武一途是れなり)擊劍は、精神を堅固確實にするの利あり。蓋し、人自信あれば、物に驚かさるゝことなし。劍道に達するの人は、心ろに恃む所深し、心ろに恃む所深ければ、萬事に驚ろかす。古今斯道に達せし、人の言行に徴して明かなり。(武道の尊き所以のものは武人特色の精神あるを以てなり不動不驚は特色の精神也)擊劍は、志氣を活潑にす。蓋し、人の性最も名譽を重んず。名譽を重んずるか故に、

勝負に熱心す。勝負に熱心なるは、人に勝ち、人に優らんとすればなり。然り而して擊劍の如きは、最も軍人の爲すに適す。軍人たるもの、之に熱心せば、志氣自ら勇壯とならん。擊劍は、身體を強壯にす。夫れ、身體強壯ならずんば、學藝發達せず。學藝發達せずんを、其の國進歩せず。故に身體の強壯は、實に富國強兵の基ひなりと云ふへし。吾人は、歐洲各國の富強開明を慕ふて止まず。然り而して其の基本たる身體強壯の如何に付ては、措て問ふなきものゝ如し。宜しく屬精擊劍に従事し、身體を強壯にすへきなり。(富國強兵の基ひたるを措て問はすは凡を抜く一等の高論なり)我が日本は、古來武を以て國を立て、二千五百有餘年、武道の一點に於ては、絶へて萬國に後れを取らず。就中劍道は武士たるものゝ、必らず心掛けざるへからざる道として、最も熱心に、之を勵み來りし(誠に然り)は、當時の記事書類を始とし、口碑に傳はりて、今日吾人の知れる所ろの事跡、并ひに、今日世界萬國の賞讚嘖驚して措かさる所ろの、我が刀劍の屬を見て、之を知るへきなり。(大和魂ひよ依て形ち遣られたる日本刀は武士の靈魂なれば)

敬

夫れ、大革命は、常に習慣を撲滅するを喜ぶ。維新の大改革も、此の例に洩れず。一切萬事を土崩瓦解せしめ、能く舊弊を一洗し得たりと雖ども、之れと同時に、舊善をも撲滅せり。是れ固より勢ひの然らしめし所にして、獨り之を改革者の罪に歸すへからずと雖ども、革新の事業も、漸く成らんとし、社會の秩序も、漸く整はんとするの今日に於ては、宜しく舊時を追想し、其の取るべきの善は、之を拾取すへきなり。其の軍隊を益すべきものに至ては、細大共之を収集すへきこと、豈に吾人の責任ならずや。(責任の語は實に何等の痛切を)

各聯隊に壯嚴なる擊劍道場ありて、此に入る毎に、將校の氣分を健淬し。腰間三尺の軍刀を重且つ大なりとして縮小するか如きことなきに至らしめ。古來武を以て、世界に轟ける日出の國をして、永く其の名を専らにせしめ、祖先をして地下に擲せしめざらんこと、豈に吾人の勤むべき所ならずや。云云以上は巡歐日誌の摘抄にして全文よあらず。(腰間三尺秋水云云双手劍法の大主眼なり。丁にすら刺身と骨切りの二種あり。刺身丁の如き軍刀は太き骨切刀に比其したきものなり。)

第二章 短柄竹刀

初版は、まんきかんけんままあいこころねの十五音を頭題にし、國風を賦して劍法を述へしか、今ま之を章に分つと雖ども、尙ほ大體の意義は、異なる所ろあるにあらざるなり

ま 撓ひをは長くせんより歩を進め延ひる鋒先きは限りなきなり

夫れ、試みに思へ、奈何に長劍を持するも、退縮居着する者は、長劍其の用をなさず。奈何に短劍を執るも、決然突進する者は、何處迄其の太刀の達するや、際限なかるへし。然らば、早や既に、太刀の長短に、利害あるにあらす。又た、初心に難易あるにあらす。常に攻勢を取ると、否とに依て、得失を生ずるものたるを知るへし。

彼のスバル軍士の言に、汝ち、汝が劍の短きを歎せば、汝の一步を加へて、之を長くせよと。善哉スバル軍士の言、以て、本題の註となすへし。世間に、長短を議する者、なきにしもあらずと雖ども、一に皆な、竹刀の總尺論に過ぎず。三八(三尺)又は立て己れの乳若しくは肩限りと云ふ類のみ。

當流は、特に、柄の寸法を論ずるものなり。

夫れ柳生流(真流)と云ひ、山岡流(一刀流)と云ひ、劔先きは短く、刀尖は太どく、一見すれば俗流に、異なる如くなるも、柄の寸法に至ては、蛇尾形なる細長柄にして俗流と擇ぶ所をなし。是に於て、當流は、當流の特色たる、柄の寸法を、極論せずんばあらざるなり。

凡そ、柄一寸長ければ、一寸丈け氣緩みあり。柄一寸短ければ、一寸丈け氣猛けし。此の故に、柄は、各自三滿握ミツミツに限り。刀身は、各自九滿握クニミツに限る。即ち、總尺四分の一の短柄是れなり。猶ほ、柄八寸とすれば、身貳尺四寸とし、柄七寸五分とすれば、身貳尺貳寸五分とするか如し。當流の竹刀總尺四分一短柄は、日本全國普通の眞劍に擬す、眞劍代用の竹刀是れなり。

眞劍代用の短柄竹刀は、撃つに強く、切り返すに易く、氣猛けて先を取り、先に先を取るに至る。所謂先々之先なるもの、即ち、是れより生ず。而して決心電入するに、利あるを自得するか故に、自ら間合ひを誤ることなく、付け込み、付け

込み、撃突し、且つ體當りし、最も活潑に、最も敏捷に、進歩するものなり。是れ、敢て、奇を好んで云ふにあらず。又た、一個の私説にあらず。弘化年迄は、何流派と雖ども、日本普通の眞劍代用なりしは、諸家木劍の遺存するを以ても、証すへし。乃ち、柄も身も帯用の太刀に、等しき、竹刀を用ひしを以て、弘化年迄は、長短の議論は、左迄に、必要なかりしものと知るへし。

然るに、嘉永の頃より、幕政澆季の惰風に伴ひ、彼の長捲きにもあらず、竹槍にもあらず、一種三分一許の長柄竹刀は、流行せしものなり。初め、柳川の人にて、大石勇となん呼へる者か、腰間の秋水に似もせざる、蛇尾形なる長柄竹刀を使ひ、始めしより「もの、いりめは太刀より下駄に見へど平ら撃ちおつき合ひ」と云ふ、俚語の如き、腐れ劍客を生せり。之れか備を作る者は、大石勇となん呼へる者に、歸せざるを得ずと雖ども、亦た顧みれば、當時士氣の腐敗、其の者が、之れをなさしめたるものなり。蓋し、舶來銃砲の銳利に驚き、忽ち、固有の劍法を無用視し、變して玩具具となし、而して精神氣膽を鍛鍊する、所以のものたる

を忘却し、加ふるに、悠々緩々たる、當時の氣風を移し、居着して、巧みに竹刀を弄せんとす、孟子の所謂爲機變之巧者無所用耻焉とは、實に、其れ之を謂ふなり。故に、華法至らざる所らなし、實に鐵劍以て死生を、一躍一擊の間に、争ふことを知らざるもの、如し、併し商賈無氣力の輩、之を翫弄するは、論するに足らず、士農其の人の剛毅朴直にして、尙ほ、實際眞劍に遠さかるを、悟らざるは歎すべきなり。況んや武職に在て、一定の佩刀(巡査の如きは柄七寸也)を、有する者に於るをや、日本固有の劍術とすれば、柄を日本普通の、眞劍の長さ、等しからしめずんば、日本固有の劍術とは、謂ふへからざるなり。猶ほ、軍人にして、銃劍術を演習するに、歩兵銃に似合はざる、三間槍を以てせば、誰れか之を銃劍術なりと云はん。是に於てか、今世の擊劍なる者は、日本固有の劍法にあらずして、寧ろ棒と槍とを、混成したる翫弄擊劍と謂ふへし。世人か往々此の翫弄擊劍を見て、日本固有の劍法の如く、誤認するは、斯道不通の罪として、恕すべきも、亦た以て片腹痛き次第なり。

殊に咎むべきは、吾れこそ古へより、傳はりたる何々流なりと、名乗るものにして、尙ほ試合ひには、長柄竹刀を用ひ、形には眞劍に擬したる、短柄木劍を用ひ、形と試合と、柄の長短相衝突するを、知らざるもの是れなり。要するに、日本固有の劍術は、日本普通の眞劍に代用したる、短柄竹刀にあらずれば、眞正の劍法とは、認むへからざるなり。日本普通の、眞劍の柄の、何寸許なるものなるやを、知らずんば、去て刀劍店に就くへし、彼の朱鞘白柄丈餘長とは、意氣の壯なるを、形容したるまでにして、實際は、秋水三尺是れ全國普通なり。

實物使用の一大要點に至ては、西洋劍術は、主義着實なりとす。即ち、正劍術軍刀術各種實物其の物の、使用を目的とし、實物に擬して演習せり。是れ、幕政の末路に起りたる、翫弄擊劍に比すれば、西洋劍術は主義着實なり。併し其の動作に至ては、見戲たるに過ぎず。

却説、常に長柄竹刀を執れば、巧みに曲藝を演ずる者あらん、若し之れに、短柄竹刀を執らしむれば、平生の鬪子は狂ひ、柏子は脱け、難澁失敗すへし。併し之

れに反して、敢て竹刀の長短に、擇ふ所をなしと云は、尙は何をか云はん。然れども、其の長短に擇ふ所をなしと云ふも、恐らくは、己れより遙かに下級の者に、試みて云ふに過ぎざるものなるへし。然るに之を難すれば、彼れは、一班初心の入り易きか爲めにすと、遁辭せり。是に於て暫らく、一步を譲り、果して一班初心の入り易きか、爲めにすとすれば、何級迄は、長柄竹刀を用ひ、何級以上は、真劍代用の短柄竹刀を用ゆと、定むべきに、彼れ等は、百年黄河の澄むを待つと、一般に、何級に達するも、真劍代用の短柄竹刀は、用ゆる能はずと見へ、身を終るまで、長柄竹刀を弄す、彼れ等か、祖先は地下に憤泣するならん。夫れ果して、真劍代用の短柄竹刀は、使用に難しとすれば、借問せん、曰く、何そ其の使用に難んする所の、真劍に擬して講習せざるや、事は來らざるを待ます、來るを待つは、警戒の至訣なり。唯今ま唯た、真劍を揮ひ、兇を撃つ、精神氣力及び、動作着實ならざるへからすと。彼れ等は、口實を初心の爲めに設けて、種々に、勝負利害を訴へん、一に皆な板間裡の輪廓を事とし、云爾するもの

にして、異日及場に臨む、如何を知らざる者なり。甚たしきは、真劍勝負は、人の膽力に在りと、囁語を唱ふる者あり。如斯なれば、平生の演習と、真劍の勝負と、二途に別れて、平生講習する所は、異日及場に臨む所以の、稽古にあらざるなり。

世間無數の劍客は、概ね、長柄竹刀の、使ひ易さに眩して、而して實戦に、背馳するを悟らざるなり。又た、世間無數の劍客に向て、如何に諄々として、説くに真劍を以てするも、多くは解せざるへし。何となれば、實際拔刀隊を以て屢々接戦せし者は、天下有數の人なればなり。夫れ、實際拔刀隊は、敵に衝突するや、恰も、騎兵の襲撃に於ける如くならざるへからず。彼の悠々緩々たる長柄竹刀の、使用法を見るに、長柄竹刀に熟すれば、熟する程に、真劍に遠さかるを認む。其の詳細は、後の第十三章、及び第十四章に至て、述ふへし。

要するに、劍を學ぶ者の目的、如何に依て、講習する所は、大差別あるは、自然の理なり。之を例せば、名は均しく乗馬術なるも、騎將軍と、曲馬師とに於け

る、精神氣力より動作に至るまで、判然として、區別あるか如きはれなり。夫れ、汗馬に鞭うち、砲煙彈雨を犯す者け、誰ぞ。騎將軍是れなり。彼の基盤上よ、馬蹄を捕へて、看客の喝采を貪はる者は、誰ぞ。妙齡女子是れなり。若し曲馬乗りなる者をして、一朝千軍万馬馳突の衝に立たしめば、氣沮み魂飛ひ、爲す所を知らざるへし。維新の役に、江戸劍客にも、似合はす、往々腰脱け武者の、笑を取りしは、全く平生の講習華法にして、曲馬乗り、同様に觀せ物的の、擊劍者たる目的に、過さざりしに、職由するものなり。

觀せ物の爲めにする、擊劍者の思想に問へば、果して、眞劍勝負は、人の膽力に在りど、答ふるの外なかるへし。噫語も亦た甚たしど、謂ふべきなり。

往年、向ヶ岡共同射的會(今大森に在る大日本小銃射的協會是れなり)に於て、一時誤迷を生し、軍用に背馳するをも忘れ、眼照門を附着し、引金を輕弱にし、以て頻りに、賞品を競ひしど一般に、誤迷の弊は、人の精神までも、腐敗せしむ、苟しくも精神腐敗すれば、精巧盡くさるる所もなく、長柄の上へにも、長柄を頼み、身は悠々緩々防禦小技

に構へて、手先き計りにて、チヨツチヨツと、敵の小手を、掠め撃ちする位ひに過ぎす。好んで長柄竹刀を弄し、中柄にて胴を防ぎ、拳を切られながら、鏢と胡魔化す如き、一々士君子の、耻つへき事にして、苟しくも眞劍に比し、以て講窮する者の、爲す所らあらざるなり。實に眞劍に比して、研窮する者は、一舉一動江戸ッ子流の如く、輕佻ならずして剛健なり、巧美ならずして壯快なり。國家の干城たる、騎將軍たらんと欲する者は、妙齡女子の、所爲を學はざるなり。

特に具眼の士は、長柄の弊觀賞の念に、出るにあらざれば、華法の極に成るを、看破せざるにあらざるも、之を矯正するの、果斷に乏しく、姑息に打過ぐるは、遺憾千萬なりとす。(其長柄竹刀が見るに優美なりと、立ち見遊中に均しき言を彈らざるものあり併し是れは將校にあらざるなり也)

一刀流々祖井藤仁右衛門一刀齋の傳書に、其代兵法者と題し、曰く、當一刀流は、竹刀太き短き物を用ゆ、其代兵法者は、治平に狙れ、無事に安んじて、教ゆるに、小技に、小手を打てよ、大技に、面などに、打込みては、怪我するそ、一寸一寸と、片端より、刻み付けよと、云ふを以てする者あり、以ての外なる事共なり。

當一刀流は、治亂相兼て教ゆ、故に帶用の太刀は、折れず曲らず、手軽き良刀を撰ひ、稽古には成るたけ、手重き竹刀を扱ひ、踏み込み踏込み、體に根さして、働らくへし。云云一刀齋の流旨如斯矣、然るに、長柄竹刀さへ見れば、一刀流なりと誤認する者、世間に多し、一刀齋は、嘸そ、泉下に憤懣するならん。

一刀流中興の祖小野次郎右衛門忠明は、壹尺六寸なる、小太刀(一説謂之)を以て、小幡勘兵衛、大久保彦左衛門の二人と、試合ひせしに、忠明は、悉く全勝を得たり。故に長短に難易あるにあらず、唯た一氣の作用なること、猶ほ第三篇總體柔術第五段に、至て説くへし。

新免武藏玄信が寛永十八年二月、兵法太刀筋心得と云ふ、三十五ヶ條の第一條に、此道二刀と名付事と、ありて、其の自註に、此道二刀とし、太刀を二ツ持備左の手にさする心な、太刀を左手にて、取ならばせん爲なり。尤も初は重くも、後元のみは軽く、自在に相成候。云云

右は明治九年、神風連の屍より、出たるもの、寫なり。是れに由て之を見れば、

武藏の真意は、兩刀を用ひて、左手を使ひ習らはすに在りとす。成程、武藏は二刀流の祖と云ふと雖ども、大事を取りたる試合、六七十度に涉るも、二刀にて勝負せしことなし。殊に佐々木巖柳に對し、糧を踏み折りて、手頃ろの木刀となし、以て戦ひし實録に、照應して確實なるを信す。世に兩刀使ひとて、左手に防ぎ、右手に撃つと、云ふ、調法便利なる如きものに、あらざりしを証すへし。因に云ふ、武藏の如く、二刀にて、左右各個に使ひ慣るれば、格別なれども、或る新式の如く、右片手のみ、使ひ慣るれば、左片手は遊手となりて、勢ひ右片手は太り、左片手は瘦せ、紅蟹となるへし。抑々、日本固有の双手劍法に反す、双手劍法は、左手を必要とするものなり、乃ち、流旨第二首に元手(即ち左手を云へり)には茶巾しほりにしほり懸け右手は卵子を握るとや知れどあり、是れ劍を學ぶ者の、片時も忘却すへからざる所なりとす。

第三章 先制

そ 向ひなは早や身は捨て、敵視しつ撃はうつへし突はつくへし

先づ席定るや、格闘の心得、專一なるを要す。敵其の柄に、手を掛けば、眞先きに、己れより切り付んする、氣勢攻々として、敵の動靜を監察すへし。立合ひの始めは、先を取るは、敵膽を取り拉くに、足るものたり。先んすれば人を制す、後れは人に制せらる、先後勝敗の決する所、誓て初本は取るべく、人に取られざるものと、覺悟すへし。若し、此の覺悟を等閑にすれば、實戰に反背す。

彼の俗流は、先制の意味を誤解して、敵、器械の時には、片膝相接するほどに迫て、而して立上るや、跡退りし、或は刀尖を地につき、又たは、袴を狩り繰りなどして、種々形容ぶるは弊なり。畢竟、立合ひの初めより、先を取ると云ふを、誤解して、相接近するものならん。直ちに撃てば、所謂先を取るの、意味は適すへきに、跡退りするに至ては、誤解も甚しと云ふへし。當流は、九尺以上の間隔を置き、眞向きに向き合ひ、兩膝を左右へ均しく披らき、氣當りしつゝ、目禮し、立上りつゝ、必らず二三小歩進み、瞬間猶豫せず、直に勝敗を決せずんはあらず。是れ

所謂先々之先なるものにして、進歩する所以なり。

老成の地位に至ては、氣と氣の張り合ひよりして、徐ろに位ひを取る、天自然の權際を生ず。畢竟、互に戒嚴周密にして、互に初本は取るべく、人に取られずと油斷なきが故に、敢て軽く打入るへからざるのみ。然るに進歩しつゝ、ある者にして、故意に之れに倣へば、早や進歩を停止するのみならず、防禦一偏に流れて、進取の氣力を失ふものとす。先々之先は、假令仕損するも、潔きよしと雖ども、後之先を巧みて、跡退りつゝ、仕損する者は、甚だ見苦しきものなり。此の故に立向は、早や既に我が身は捨て、相睨み、撃つへき機會あらば、撃つへし、突くへき機會あらば、突くへし、未だ機會を得ずんば、機會を造出するのみ。但た懸中に待あり、待中に懸あり、之を忘却すへからず。

總へて敵に因て轉化すへし、兵字構へも、一定不變なるは本意にあらず。敵に依り、器に依り、上中下斜段又は、八相に構へ、技倆を角するものとす。然れども、慣習外の施術は、必らず、果斷決行の銳氣に乏しくして、之れか爲めに、敗を招

くに至ることあり、故に敵の構へに拘はらず、吾れは吾が、平生に慣習したる構へに、取て技倆を角するも亦た得策なり。但し銃槍に對せむ、中段より寧ろ下段に構ゆへし。銃槍は、平生の如く構ゆれば、其の槍尖を押へて、付け込まるゝか故に、縁を離れて、槍尖を地に摺る如く、構ゆればなり。且つ吾れ兵字に構へしに、敵は他の構へを取て動かす、此の場合に、我れより一太刀も、打込ますして、構へを變するは、臆したる歟の、嫌ひなきを得ず、故に空撃たりども、打下して、更に適應の構へに轉化すへし。敵に突きの色あらば、其れ突けど、前進すへし、決して退却すへからず、而して精神を沈着し、基本演習第二十二敷を應用すへし。

昔し士岐丹後守、長沼庄兵衛と武談の末に、實驗せんと欲し、試合す、丹後守は、中段にて突き懸る、庄兵衛、前進す、丹後守の突きは、外つれて中らず、丹後守は、猪牛の如く、突き懸るに、庄兵衛は、前進しつゝ、之を賺し、披らくと、丹後守は、行き餘りて、人もなき所ろを探る、其の後ろより、庄兵衛は、爰に罷在

りど、申したるに、感歎せりと云ひ傳へ、古今共に突を避けるは、前進するに、利あるをを確認せむ。

第四章 切り返し

此の切りかへす太刀の早技目覺ましく當り傍ら敵なかりけり

此の切り返しは、第十七章に掲ぐ、實に太刀の早きことは、切り返しを見て知るへし。

此の切り返しは、太刀を上段(即ち兵字)に冠ぶり、十字形に切り結ふを云ふ、劍術の基本なり、以て四肢の凝硬を除去して、筋力を靱剛にし、以て身體の動作を練習して、舉止を敏捷にし、以て縦横の接戦に狎侵して、靈眼を聰活にし、以て技業の圓滿を馴致して、刀勢を快速にし、以て日本古來特有の白兵術に、練達せしむる階梯なり。

此の演習は、兵式號令を用ひ、規矩準繩に由らしめ、疾徐緩急を律するを以て、衆多の動作は一致し、身體の運動は周到し、轉々、勇壯活潑なるのみならず、自

ら軍紀の下に、膽力を鍛錬し、其の腦力を發育す。是を以て、殊に青年有爲の學生に、偉大なる効益を與ふるは、更に疑ふへからざる所なり。夫れ、當流は、大極にして、無極なり。技さは數に限りあれども、位ひは品に限りなし。太刀の生れは圓満にし、體勢は、雍如とし裕容とし、前後左右に片倚らず、構備は、兵字にして身を隠さず、其れ突けど、己か身を打呉れて、而して徐々前進し、機に應じて切り返へす等、全く基本に熟するに隨ひ、心手相應して、變化は熟練より生ず、復た測るへからざるなり。

然り、世間人情の浮薄なる、正則を履さず、直ちに變則に、縦弄放演せしめ、速成を得意とするもの多し。是れ不可なり、教練は速成を用ゆへからずとは、千古の格言なり。速成は、動作未だ自在ならずして、曖昧に倒行逆施す。其の初めは、止むを得ざるに出て、遂に無理ながら、因襲するに終れり。圓満自在ならずして、手先き計りにて、チヨツチヨツと、掠め打に過ぎざるも、無理ならずと聞ふへし。而して未熟者が、皮想の觀察に、或は云はん、試合ひは活機なり、基本を

活機の上に、應用するは迂なり、寧ろ、無法に打合ひするの、活用に如かずと。此の説も亦た迂なり、武夫の矢走りの路は早やけれど急がば廻はれ世田の長橋と云ふを、解せざるもの、觀念なり。教範の如く、基本を活用し得るまで、習熟せずして、應用する能はずと云ふは、誤迷なり。諺に先入爲主と云ふ、試みに習ひ得たるものを、更改せんとすれば、舊習固着して、容易に脱却する能はざるなり。是に於て、當初の習得肝要なりとす、凡そ、人既に知るものを忘れんと欲するは、未だ知らざるものを、覺ふより更に難し。故に、先入爲主の事實を確認すると、同時に當初習得の肝要なる、事實も亦た確認すへし。然るときは、之を己れの慣習となすまで、勉強すれば應用自在なるも、亦た確認すへし。

二十日熱心者(俄に熱心する者は俄に冷却す大抵三通開位にして變ず故に二十日熱心者名くと云ふ)の如き、淺慮の人は、何事も習ふと、直に出来る様に思ひ、而して己れの、未だ熟せざるを顧みず、是れは吾れ能はず、是れも吾れ及はずと、放棄せり。畢竟、愚にあらざれば、勇なきの致す所なり。冉求曰非不悦子之道力不足也と、孔子曰力不足者中途而廢すと、叱斥せ

しと云ふ。

論語にも、習ふとは時習云云、鳥の飛ひ上らんとするときば、羽色の白く見へるものにて、遠く北海を越ゆるも、始め一尺飛ひ、二尺飛ひ、漸く飛ひ習ひ、宙を飛ぶに至る、故に羽の下に、白を配すと註す。又た、中庸には、人一能之己百之、人十能之己千之、果能此道雖愚必明、雖柔必強と、云ふにあらすや、此の故に此の基本を、千返萬返、復習せば必らず上達すへし。

古來日本の劍術は、西洋劍術などの如く、初心の内は、要領を説き示すよ及ばず。唯た基本に法どり、稽古の數を積みさへすれば、自然に佳境に入るものとす。猶は佛にて念佛さへ唱ふれば、自ら極樂へ往かるゝと云ふと、一般なり。然るに、二十日熱心者の癖として、頻りに要領を聞きたがるものなり、蓋し是れ早や、逃げ仕度をなす徴候と、見て大過なし。

凡そ、速成は、外見上一時成業せし如くなるも、其の過誤は陰然胚胎して、一種の技癖痼疾となり。却て上達の期に至て、滯滞するのみならず、最高度に達せず

して、漸く、最下度に小成するに過ぎず。殊に此の基本に、熟せざる者は、事に臨んで究す、究するの極は、一轉して、虚構に流れ、再轉して、外飾に失し、遂に演劇に類する所作に陥り、人に媚る如き、觀を呈するに至る、即ち、其の究するは、劍法の養素なきに由る、其の媚るは、間脱けするを繕ふはんとするに由る。而して故意に、巧美ならんと欲するか故に、却て、破綻を顯はすものなり。總へて、究策に出る動作は、正大の氣なし、實に國家干城の重に、任せんと欲する、赴々たる武夫にして、假りにも、一時を彌縫し、人に媚る如き、卑劣手段をなすに至ては、寧ろ學はざるを可とす。武藝なる者は、大成して雲に聳へ、天然の雅致、人をして驚ろかしむべく、品位の卓越、人をして敬せしむべく、眞に剛毅果敢なる、精神氣力を養成するか、爲めのものなり。即ち、沃野に、寛鬆たる松樹の如し、其の寛鬆たるは、日進上達する機能の伏する所ろ、測り知るへからざるものあり。之れに反して、變則は、盆栽に枯衰せる偽老の如し、其の巧みなる如く見ゆるは、千歳の緑色を假裝せしめたる、盆栽樹の枯衰せるものなるを以

て、早や成長せざるものなりと、知るへし。
 具眼の士は、武を観る竝に在り、目前の勝敗は更に論せず、日進上達の機能如何、心氣力の鍊磨如何、特得の技倆如何、是れ等を鑑別するを主眼とす。苟しくも武に通ずるとなす者は、此の識量なくんはあらず、目前の勝ち負けを數へて、褒貶する如きは、俗眼たり、術語に目あつて、目なき者と云ふ、是れなり。
 猶ほ、風雅を愛し氣韻を解して、高尚なる趣味を知る者にして、始めて書之神品を論し、畫の精妙を評すへし。竝に少しく例を異にするも、卞和が楚王に寶石を捧けて、足を斬らるゝも屈せず、漸く三代の王に至て、名玉たることを明知せられたると、一般に、琢磨の功を積み、自得する所をあらわし、鑑識を有せざる者の爲めに、斥けらるゝも、屈するに足らざるなり。是を以て、再三言なからも基本を千返萬返し、心手自然の如く、慣熟せざるへからず。吾人が世に處するも、亦た然り。平生に養ふ所ありて、時變に應ずる者は、事を處して事理分明、綽々餘裕あり、決して究せず、且つ媚ひす、素養なくして、事變に應ずる者は、徒ら

に心事の淺薄を暴露するのみ。然らば劍術にしては、劍術の基本に習熟せんはあらず。之れに習熟すれば、應用自在にして、變化は熟練より生し、來て千變萬化し、應止する所なきなり。但し正則は、變則に比すれば、初心に於て、迂回する思ひもあらん、縦弄に比すれば、檢束を覺ふならん、其の迂回するに類するは、安全に進歩せしむる所以なり。其の檢束するに似たるは、無欲に玉成する所以なり。此の理由に疎きは、二十日熱心者の常情を、免れざる小人なりとす。至大至剛の精神を有する士君子は、積漸耐久し、以て正則を履み、次第々々に、熱心を増加す、故に克く熱心永續し、以て活達大成するなり。

第五章 後之先

る
 懸けて釣り挑みてや待て打しはは惑ひ居着と起り頭らぞ
 懸けて釣りとは、ナリナリと仕懸けて、氣當りすれば、敵は自ら止り得ず、釣り出されて、無理に打來る、之を待て、切り返へす、等の手段を云ふ。
 挑みてや待てとは、挑み挑み虚撃し、又は敵の心を塞ぎ、無理に打出さしめ、

其の隙きを實撃する、等の技倆と云ふ。
打しはとは、打つべき機會を云ふ。機會は、千差萬別にして、概言すへからず
修練の功を累ね、演習の數を積むに、隨ひ、自得するものとす。此の機打つへし、
彼の機打つへからずと、知るも、練磨の功至るにあらざれば、目に見て、手足應
せず、心に感して技倆出せず、心氣力動もすれば齟齬す。實に千返萬返數を積む
ばとに、功者なるものは、未だ曾て有らざるなり。武道通の定語として、練達の
人を歎美するに、數掛りしと云ふを以てす。又た初心の者を褒詞するに、癖なし
と云ふを以てす。一に皆な定語の意は、簡にして味ひ深し。何となれば、熟練活
達の素は、數掛るに在り。天真爛熳の素は、癖なきに在れをなり。
或ひいつき云云、或ひとは、敵が狐疑を生し、逡巡右驚左愕するに、乘して撃突
するを云ふ。居着とは、いつきと讀みて、敵が跨り過ぎなどして、動く能はさ
る場合に、撃突するを云ふ。概して、足をガクと踏み付けたる敵は、急に來らす。
體より面を出す敵は、虚多し。起り頭らとは、敵より將さに打來らんとする途端

に、撃突するを云ふ。

起り頭らは、其の打んと欲するに、一念なるか故に、守るに隙きあるものなり。
而して起り頭らには、多少の準備をなすを以て、其の間に髪を容れど、撃突すへ
し。是れ後之先也。尤も劍術の目付けは、必らず敵の眼とす、敵の拳又は太刀先さ
に、注目する位ひ迄は、未だ初心なり。須らく敵の眼に注目し、以て敵の眸子の
ナラリとする途端に、打入るへし。所謂起り頭らと云ふは、敵の眸子のナラリ
ど、動く頭らに打入れは、先之先となる、手足動作の起り頭らにては、既に遅く、
後之先なり。

敵の眸子のナラリとするや、否や、虚實を覺知す、打入るへし。併しなから、母
意母必母固母我、即ち、無念無想の作用に、一任せすんは、通常後之先多し。孟
子亦云ふ、存乎人者莫良於眸子眸子不能掩其惡と、瞳に意あれば、目も口ほどに、
物を言ふ、と云ふ是れなり。

日本の劍術には、眼中有靈と云ひ、西洋の劍術には機眼オシエメの適中と云ふ、我は靈

眼と云ひ、彼は機眼と云ふ、洋の東西を問はず、術語の意味に、符を合するか如くなるは、奇と謂ふへし。

問ふ、己れに惑ひを生したるときは如何、答ふ、決心叱撃すへし。是れ、或は、敵の謀る所ろに陥るゐるも、退縮するの怯に優れり。膽勇を鍛鍊するは、此等の場合に存すべなり。

抑々惑ひを生するは、敵の機先を狐疑し、防禦一片にのみ、意を配し、敵の志さす所ろは、而か、肩か、小手か、突かど、慮はかるか故なり。其れ突けど、打呉れて體當りすれば、好結果を得へし。丈夫たる者にして、猫の懸冠りを似ねる程に、見苦しきものはなし。

併し、上級に對すれば、峻坂に登る如く、早く呼吸迫り、輒ち惑を生す。下級に對すれば、平地に歩む如く、永く呼吸穩かよし、敢て惑を生することなし。畢竟武級上下の争ふへからざる所ろにして、腹から、膽力に關せざるなり。要するに、已れより下級に向ては、相接應して以て技を練り。上級に向ては、打込みの心持

ちにて、無二無三延ひ込み、打ち込み體當りし、以て、練達の程度を、上進せしむるものとす。

第六章 野試合

群がへる敵に向は、尙ほ更よ燕賺しにすかし切り脱け

此の野試合ひは、第二十一章に掲ぐ、野試合ひは、武技を野外へ演習し、短兵接戦術を講究する所以なり。平常の演習に比すれば、層一層實戦に逼切なるものなり。野試合は、燕鳥の舞ひ往く如く、突如として前に隠れ、忽焉として後ろに現はれ、閃然電然出沒するときは、敵は呆然として、前者先つ倒れ、後者倒れ重さなるものなり。

元來多勢に向は、片端より切り倒し、薙き倒し、突貫すへし。是れ先制の利を占るなり。又た多勢を引受けたらんには、先つ楯を取るも可なり、敵より刀を撥して迫るも、

衆を顧む者は、虚に成り易しとす。

八方一方の敵に、八方より取巻れたるときは、敵八方に在ると思ふへからず。一線の血路を開くまでにて、八方も一方に同じかるへし、隘路などに於ては、敵の氣を脱かざるへからず、先づ敵を腹背に受けたるときは、忽焉後方なる敵を、振り向き様に切て、前方なる敵の氣膽を奪ひ、直ちに、前方を切り開くへし。

第七章 藝文

る

稽古たゞ積らは塵も山とかや石もみかゝは玉となりぬる

此の上句は、薩摩隼人の矯捷勇敢なる遺風を、涵養せし、日新齊の伊呂波歌に、下手そとてこゝろゆるすな稽古たに積らは塵も山と言の葉と、云ふに取る、蓋し舊藩士は、一唱感激し、志氣之れか爲り、勃焉として起り、精神之れか爲り、熾乎として發し、道場に入る毎に、氣分を健淬し、耐忍躬行を淬礪せしものなり。凡そ、成業練達の素は、倍他の度数に、加ふるに、勝他の慾望を以てし、試業に交へるに、思念工夫を以てせざるへからず。雖に復讎千返、其の意に通すと云ひ。

積雷は石を穿ち、積羽は舟を沈むと云ふ。奈何に不器量と雖ども、切瑳琢磨の功を積りは、玲瓏たる名玉となるへし、李白が詩は、不器量を以て得たると、李攀龍は評せり。是れ吾れは不器量なりと、猛省するは、妙所の伏するを、發する所になればなり。

古歌に、爲せは成る爲さねは成らぬ成るものを成らぬと云ふは爲さぬなりけりと云ふ、人として爲さぬと云ふ程に、耻ぢなるものはなかるへし。孟子も云ふ、人に若かざるを耻ぢすんは、何そ人に若くことあらんと、其の不能を耻ぢて、之を爲すへきを云ふなり。然るに、其の不能を耻ぢて、之を掩蔽する者、往々世間の情弱なる書生に、見る所なり、是れ耻ぢつへき所を、誤了せしものと謂ふへし。何となれば吾れは下手なり、不器量なりと、自棄すれば、何事も成らざればなり。洋の東西は風習を異にすと雖ども、爲不爲の點に於て大差あるか如し、之を例せば、柔術の形の如きも、同じく忘るゝとせんに、彼れは耻ぢて學ひ、我れは耻ぢて習はず、劍術の試合の如きも、同じく負るとせんに、彼れは耻ぢて奮ひ、我れ

は耻ちて復たせず、是に於て萬事に、優劣を生ずるもの、如し。

英國人ヘンリーコックス氏亦、本館雋秀の一人たり、(同國人にてマンハッタン及びヘンリーの二名亦點稱す)日々新聞に云ふ氷川社頭、矢當々々の聲、喧し、有時、碧眼赤髯の人、竹刀を携て出入す、噫、士人、刀を脱してより、豪氣、烟散霧消、亦一人の鐵骨男子を見ず、却て、外人に嘲けらる、可慨哉と、痛切々々

第八章 體當り

マ 胸倉に肩もて葉津美突き飛はし崩れ立つ身を追ひ打にせよ

凡そ體當りは、我が體を以て、敵の體に當り、以て敵を突き倒し、手向ひ、若しくは、跡打ちせしめざるの法なり。所謂體に根さすして、手先計りにて、マ ヨツチヨツトと、掠め打ちする者は、相打ち多し、打て、打たるれば、打たざるに若かさるなり。

是に於て當流は、打入ると同時に、突き倒し、追ひ打ちするなり。其の突き倒すには、先づ、我が肩を低く下げ、其の肩を敵の胸倉に向け、肩と共に兩拳を、敵

の腰の邊へ拗ひ上げて、敵の面の脱ける程に、拗ひ上げつゝ、突き倒すへし。好しや突き當りて倒れざるも、敵は倒されざらんとするに、一念なるが故に、多くは胸に隙きあり、胸を防ぐ者には、面に隙きある如く、執へか隙きあり、其の隙きを打つを、追ひ打と云ふ。又は離れ際に大きく、面を打つまねして、胸を薙き拂ふなど工夫すへし。

短柄竹刀は、付け込み、付け込み、踏み込ひへしと雖ども、亦た至極の程合ひあり、付け込み過くれは、太刀先きつかへて、働らき難き場合なしとせず、此の場合合は、我が兩拳を我が目通りまで上げて、其の兩拳を眞直く伸はしつゝ、敵の面金を押すへし。然るときは、慣れざる敵は、頸骨を折らるゝ心地して仰倒すへし。相互に衝突したるときは、兩拳の低くなり居るものに、勢力あるへし。是れ即ち彼の瀾が、向ふへ打ち勝らんとする際には、少しく退く勢ひにて、さぶと拗上げ押す所の心ろ持ちなり。此の心ろ持ちを自得すれば、概ね浮きたる敵は、宙に飛ばされて仰倒すへし。

元和九年徳川家光將軍、親ら諸臣と試合ひし、勝ち残りて意氣甚た驕り、眼中に人なきが如し、時に硬直なる阿部豊後守忠秋、乃ち徐かに進み出て、立合ふや一聲直ちに體當りし、將軍を道場に逆さまに倒す、大久保彦左衛門、之を見て謂て、曰く、主君たりども、遠慮せざるは、武道の本領なりと、古來、體當りの猛烈なりしを知るへし。

體當りの有効なるは、敵の兩踵を踏み付けたる時、又は浮き上りたる時、或は跨がり過ぎたる時、等は、遁すへからざる最上の機會とす。

又た柔術の應用として、相接したる時に、土際を摺り揃ひ倒すも可なり。足搦は我が體と敵の體と、突き合ふたる場合に、施すの術なり。我が太刀は、敵の左側首へ摺り込み、我が左足は、敵の右足後に踏込みて、我が右肩を利せて倒すへし。吾れ足搦を掛けられたるときは、跡へ退くへからず。其のまゝ、敵を押せば、足搦を掛け返へす道理にて、利益あるものとす。又は己れの拳腕を鎌柄とし、竹刀を鎌刃の如くし、以て敵の則首に引き掛け、敵を引き傾けさせ、中心點の片足のみに、

移りたる時、其の中心點を拂ひ倒す、等工夫すへし。

慶長の頃ろ、大内に於て、吉岡建法(一説鎌房又三郎也)朝吏を斫る、太田忠兵衛、進みて紫震殿の階下に建法に遇ふ、建法、遇々顛して倒る、時に忠兵衛呼て、曰く、人の蹉跌に乗するは、武夫の耻つる所ろ、汝、疾く起て轡贏を決せよと、建法、乃ち身を翻して起らんとす、忠兵衛、閃然刀を揮ひ、一撃して之を殛す。後ち忠兵衛に問ふ者あり、曰く、吾れ聞く、建法は劍を善くする者なりと、彼れか其の倒れしは、天與なり、汝ち盍之れに乗せずして、而して、其の起つを待つ耶、忠兵衛、睡て對て、曰く、是れ、劍法虚實の秘訣ある所ろなり、請ふ一言せん、夫れ、其の倒るゝや、倒るゝは虚にして、而して、以て身を捍く所以のものは、實なり。我れ其の實に臨めば、往々反て、爲めに斫らるゝ恐れあり。其の起つや、起つは實にして、而して、以て敵を防く所以のものは虚なり。我れ其の虚に乗せば、彼れに先たゝるものなしと。太田忠兵衛の所謂虚實の辨は、須らく銘肝すへし。又た佐々木巖柳、既に倒る、宮本武藏、之れに迫る、巖柳身を翻して、武藏の兩

脚を薙ぎ拂ふ、武藏は之を飛び躡すと雖ども、尙は袴の裾を切られたり。田原坂血戦場に於て、之れに類似せし實例は、往々之れありき。當時負傷者あれば、呼び起して、而後に近づき、死屍あるも、身構へして近づきしなり。是れ死傷者なりと、油断して近づき、切られたる者、往々之れありて、自ら此の戒心を與へたるなり。故に虚實の辨は、其の跡に泥ますして、利用する所なくんはあらざるなり。

第九章 大技習練

志 しのぎをは削りて細くなるものを平素の習ひ大技にせよ

凡そ、實戦は、平生の精巧を減殺し。刀尖は、最も遮縮するものたるを、知らずんはあらず。

夫れ、短兵奇襲は、縦横奮闘せずんはあらず。然るに、劍霜彈雨の間に、研て入れば、平素に三尺振り上げ、一刀兩断に切り込む、天性となす者にして、漸く、刀尖は三寸動き得へし。若し、平素に手先き計りにて、慣習したらんには、刀尖減

縮し、寸分も動き得ざるへし。是れ、平素の習ひ、大技にせよと、云ふ所以なり。

假りに板間裡に於て、勝を貪はらんと欲せば、防禦小技に構へ、手先き計りにて、支へチヨツチヨツと掠撃するに、利なきにあらず。然れども此の利は、板間裡の利にして、實戦上の利にあらず。苟しくも、精眼に構へたる敵の小手を、掠め撃ち慣れるれば、早や、面に打込むことは、容易ならず、次第々々に、小手のみ掠めるの、技癖を長するものなり。此の故に、打ち易き小手は打たず、打ちにくき、面を打ち慣れざるへからざるなり。併しなから是れ等は、板間裡の勝負を、目的とするに過ぎざる者と、異日一大需用に應し、偉勳を奏せんと欲する目的を有する者と、に依て、大差別あり。吾人は、一旦緩急あれば、義勇奉公の用に、俟つものなり。是に於てか、此の主旨を普及せしめて、統一する所ららんことを、企望せざるにあらずるも、亦た劍客其の人々や、各々志さす所らあるへし。然らば、曲馬師は、曲藝に巧美ならざるへからず。騎將軍は、襲撃に勇敢ならざるへからず。騎將軍は襲撃に勇敢なり、曲馬師は曲藝に巧美なり、然れども、互に地

を替へしめは、互に志を成す能はざるへし。是に於て、各自執る所の流義あり、遂に混合すへからず。古語に、志さし同しからざれば、爲めに相謀らすと、是れ之を謂はん。

第十章 組打

ふ
しなひをは落さは直くは打りて外さは無手と組みてかためよ
撓ひとは、竹刀の事なり。其の撓ひをは、落さはとは、彼我二様に解し。うちお
りてと云ふも、撃搏二義に解すへし。撃は得物を以て、ウツを云ひ。搏は肢體を
以て、ウツを云ふ。即ち劍術を撃劍と云ひ、柔術を搏法と云ふ、是れなり。

先つ敵が竹刀を落したるときは、其の機を失はず、直ちに打入るへし。若し、其の機に後れたらんには、徐かに迫つて、輒く打たず、氣當りすへし。

若し之れに反して、自分の竹刀を落したるときは、直ちに飛び込み、柔術を應用すへし。或は一時飛び退さり、隙きを見て飛び込みへし。

俗流の組打を見るに、闘士は、小手を脱き棄て、傍人は、竹刀を拾ひ上げなどして、

面を脱くを以て、勝負を決するか如し。當流は、小手や面を脱げば、引き分けにす、尤も小手や面を脱き去らすして、柔術を應用せらるればなり。而して一旦組打ちするも、隙きさへあらば、直ちに竹刀を取り、後れて起らんとする處を打て、勝を取る掟なり。

外史に牛若晝讀書夜學劍搏と云ふ、劍は即ち劍術なり、搏は即ち柔術なり、大軍亂れ入て相搏するは、和漢の史に多し、殊に源平を最となす。今や兵制革新す如何、曰く、現に西南の役に、我か抜刀隊士折田實房は、刀折れ賊と組打ちし、勇名を顯はせり。且つ、無煙無聲の逕發銃は、發明せられて、恰も、中古弓矢の戦ひに於ける感あり、聞くか如くんは、銃丸不洞兵装は、試験せられて、是れ亦た、中古甲冑の軍に於ける思ひあらんとす。從來準備射撃其の効を奏して、敵に衝突するを、決勝となせしものは、尙ほ、準備衝突とも謂ふべくして、眞正の決勝は、最後の組打ちにあるを、信せずんはあらざるなり。是に於て、柔術の軍隊に、必要を感じ來るへし。故に未來將校生徒たらんと欲する者は、搏闘も亦た稽古すへ

し。(或る將軍閣下が江戸にて隨心せられし初日多衆に望まれ七人目には組付きて)
(急所をつかされしかば薩州州マヘツタと叫びし云云當年の壯烈を想ふべし)

第十一章 有耶無耶

あ有りて無し無て有るとは至妙哉無念無想の試合ひなかはに

無念無想なるものを、速了すれば、偶然の出来事に類似す。而して無念無想なるものは、決して、偶然の出来事にあらざるなり。若し其れ、偶然の出来事なるときは、心氣力一致せざるか故に、活音快叫する能はざる如き、氣脱き間脱けするものなり。

無念無想や、意に究めざるにあらず、而して、言に述へ難き所なり。猶ほ孟子が、所謂浩然之氣も、言ひ難き所ろ、却て、無限無量の味ひを存す。而して、浩然の氣なるものは、胸中別に盛大の物あるにあらず。苟しくも、行の心に、懐からざるものあれば、浩然之氣餒ゆ、安んそ浩然たるを得ん。猶ほ且つ、意我れに在らざるときは、辨舌爽快なるも、意我れに在るときは、吃々として、流暢ならざる如き、是れなり。

却説其の至妙なるもの、何處に在るかど問へば、何處にもなし。何處にもなきかど問へば、何處にか在り。左すれば、吾れにして吾れ知らずと、云はすんはあらず。故らに其の妙用を、顯はさんどすれば、念慮に涉りて、無念無想ならず、強ひて、無念無想ならんとすれば、木石同様、無心無意に陥りて、至妙ならず。是れ劍道妙悞の、微に有耶無耶に存し、至妙なる所以なり。妙の字や少き女の亂れ髪ゆふにゆわれす解くにどかれず、是れ字體よりよみ來て、言ふに言はれぬ、意味を説けり。之を油臭き事の様に、誤解すへからず。見ぬ人になんど語らん浪華江の見てさへ更らに言の葉もなしと云ふ、兩首の深味は、修業の進歩するに、隨て、心ろに肯んする所ろあるへし。

第十二章 健淬

ん命ちかけ君よ捧けん劍き太刀仇よ移るな花のしようぶよ

凡そ道場に入る毎に、氣分を健淬する所以のものは、畢竟、命ちかけ君に捧けん劍き太刀云々の觀念、切實あるに由來す。夫れ、世々吾々の祖先が、身を以て國

に奉するに、斯の武を以てしたる遺風を思ひ、且つ、一旦緩急あれば、已れも亦た斯の武を以て、義勇奉公の用に、俟たんとす。豈に道場に入る毎に、氣分の健淬ならざらんことを、欲するも得へけんや。然り而して、淬は、鐵を燒き鍛ひて、而して水に入れ、鋼となすを云ふ。即ち、健淬は、其の燒き鍛ひたる火鐵を、水に入れる如く、精神の凜烈なるを意味す。

尤も、智識の裕達するに隨て、道場に入る毎に、氣分を健淬するの度を高むるものとす。是れ即ち、有識の士は、有識の士はとに、道場を神聖視し。無識の者は、無識の者だけに、道場を遊戯視する所以なり。

古來道場は、有識の士の、相會する所なるを以て、殊に禮讓を重んじ、特に秩序を正ふし、奮勇剛氣専ら公正の手段に依りて、以て戰ひ、徳義上、實に優美なる争鬪なりしなり。然るに世間には、講武の主眼を失ひ、徒らに角技者流を以て、思想卑劣を甘んじ、狡計詐謀を逞ふす。都會輕佻劍客、多く是れなり。是れ、仇に移るな花の勝負にと、訓練せる所以なり。

第十三章 以鏑擊敵

こ 拳ももて打込む程そよかりける體に根さ、ぬ技は危うし

本題は、短兵接戦上の實驗を、擧げて極論せずんばあらざるなり

第一 眞劍は間合ひ、(即ち)距離を誤り易き事

第二 眞劍は、板間裡のみの目的にて、修業したる者は、寧ろ劍道未學者より、劣りて人後に、曠然自失したる事。

第三 劍道未學者は、一に心氣急迫し、二に刀尖届かず、頻りに土を斫り、三に迂り倒れし者、往々之れある事。

第四 刺撃は、立向ひ來る敵に施し得ず。但し、一に切り結び居る傍らより刺したる者、二に傷つき痿みたるを刺したる者、三に逃るを追ふて刺したる者あるを見る、未だ眞正に立向ひ來る、敵を刺したる者あるを聞かず。適々銃に劍を装ひながら、却て之を振り歸し、打ちたるを聞く、未だ刀尖にて、突きたるを見さりしなり。(脈兵は公法上の所謂抵抗力は正に有せしも亦双向ふにあらす故に新たなる經驗を我れに與へさりし本項は内國戰の經驗也)

第五 板間裡に於て、諸爪を上へ向け、摺り込み打ちに、熟したる者は、敵の

骨を切り得さりし事(毛皮輸入の敵は根双を立てされは斬断し易からず古の武士は出陣に名刀を携ひ詭ゆるに小柄を以てす用意在茲)

右の如く、誠に真劍は、第一に間合ひを、誤り易きに依り、鐃拳を以て、敵の頭
まを打割る意氣込みにて、打込み、漸く刀尖適當なり。但し平生の試合ひと唯ど
も、少しく勁敵に逢へば、間合ひを誤り、竹刀は届かすして、土を研る、況んや
短兵接戦に於てをや。此の故に、こぶしもて打込む程をよかりける、とは云ふな
り。

夫れ、慣れたる場所は、仕安く、慣れざる場所は、仕にくく、高きは近く見へ、低
きは遠く見へる如きは、習慣の替はる爲めに、觸神の錯誤を生するに、由るもの
とす。是に於て、屢々場所を替へ、對手を替へ、以て研究せずんばあらざるなり。
西洋劍術にも、屋外は室内に比すれば、近きに誤る、二十乃至三十珊知米突なり
と云ふ。

我が、鶴翼魚鱗の構へは、遠近を反對にす。鶴翼は、真向きにし、丈高く、幅廣

くすれば、間合ひ、遠くして近く見ゆ。是れ長大の人の徳にして、脱け面などを
撃ち易き所以なり。魚鱗は、左向きし、丈低く、幅狭くすれば、近くして遠く見
ゆ。是れ、矮小の人の、付け込み易き所以なり。

第二は、悠々待つ癖ありて、健腕健歩ならざるに由る。

第三は、劍道未學者か、氣のみ造り狂けて、頻々土を研り、往々迂り倒れるは、
逆上に近し、怪むにも足らざるなり。抜刀隊の歌に、息も絶へなん計りとは、穿
ち得たる積りなり。

第四は、立向ひ來る敵に、刺撃を施し得すと云ふ、然るに、素人理論に、精神を
沈着して、構へて待ちさへすれば、敵より觸れて、貫ると云へる者あり。是れ空
論のみ、實際真劍は驚慌するを以て、平生の精巧を滅殺するのみならず、突けを
斬らるゝ、相打の恐れあり。故に態々、銃に劍を装ひ居ながら、却て、之を振り
翳して、打つに至れり。拿破崙も云はすや、忽然驚慌する事の起りなを、敗らる
る時なりと。其れ然り、然るか故に、素人理論は、應用すへからざるなり。然る

を況んや、互ひに三尺の秋水を、以て相見る、突けを斬らるゝ、危急の場も處するをや。是れ、平日の竹刀試合ひに、仕易くして、異日の真劍勝負に、仕難き所以なり。

第五は、板間裡のみの、目的に随伴する弊習にして、實戦上須要の應用にあらざるなり。故に、体と太刀一致に連れて、右方より打つときは、右足を踏込み、左方より打つときは、左足を踏込み、踏込み過ぐる程にし、錫拳を以て、敵の頭を打割る、意氣込みあるを要す。

前記の外に、真劍は掠撃に流れ、防禦小技に陥り、掠め切りするを免れず。猶ほ恰も、猫の躰れて、玉取る如くになりがちなり。是れ、敵膽を奪ふ所以にあらすして、却て、敵を激發せしむる所以(虎之巻切り結ぶ云々の註果合ひを見るべし)なり。是を以て、踏込み踏込み、体に根さして、働らかざるへからず。若し之れに反せば、極めて危し。故に体に根さぬ技は危しと、は云ふなり。

夫れ、短兵は、寡を以て、衆を撃ち、奇を以て、正を衝くに在り。彼の板間裡に

ては、悠々緩々構へて待つに、利ありと雖ども、畢竟、曲藝上の利のみ。短兵接戦は、第一に、氣の上の勝負あり。氣若し後るれば、受太刀となる、受太刀となれば、忽ち、其の首は飛んで、地に落つ。實に生死を、一刀一撃の下に分ち、成敗を、一目一瞬の間に決す。平生の板間裡に於ける、巧美は滅殺す。故に敵の太刀は、我か專制の下に屈せしめ、敵の動作は、我か命令の下に従はしめ、以て、我は陽に立ち、敵は陰に置き、踏込み踏込み、先制せずんばあらざるなり。

吉田松陰居士の、武教講録に云へるあり、曰く、武士は武藝を習ひ、武義を論し、武器を閲するの、三事を以て常職とす。其の武藝を習ふは、技藝を巧みにし、名譽を求むるにあらず、唯た、手足を自由にし、骨節を便利にし、身軽く、體剛れて、只今にても、戦場に臨み、接戦に差支ゆることなき如く、應用を修練することなり。今世の武藝は、一種遊戯の花法となるもの多し。身を以て戦場に置き、眼目工夫するにあらずんば、何そ其の遊戯たるを知らんやと。嗚呼活眼なる哉、天下活眼の士見る所、必らず茲に出つ。而して世の劍客は、技にふふ能はざるな

り。蓋し澆季の今日、劍道を講ずる者、概ね劍客的の、奥中に座するを以て、奥悪を知らざる者のみ、是亦た怪しむに足らざるなり。要するに、血戦場に利ある所、必らずしも板間裡に便ならず。板間裡に便なる所、必らずしも血戦場に利ならず。松陰の所謂身を以て、戦場に置き、瞑目工夫するにあらざれば、拳もて打込むはとそよかりける体に根さぬ技は危しと云ふ、深味は解し得ざるへし。

第十四章 拔刀隊

木の葉散る田原か坂の太刀風は無念無想の試合ひなりけり

本題は、何たる感情より、起れるかを略解せざるへからず。之を略解せんには、西南役戦歴上の一斑を、自叙せざるへからず。之を自叙せんには、先づ田原坂に於ける、先登血戦は、偶然の僥倖にはあらざりしか、否やを儘かめざるへからず。之を儘かむるに、薩地朝日岳等に於ける、數度の斫り込みを以てせば、偶然の僥倖にあらざりしを、証明するに足るへし。是に於て、確信する所ろの、實驗を舉

て述へんとす。教範全篇此の經驗を以て、伏線となす、故に、板間裡の曲藝を痛罵す。教範全篇此の經驗を以て、骨子となす、故に、劍客的の華法を排斥す。好んで狂簡を學ぶにあらざるなり、求めて奇矯を言ふにあらざるなり、實驗に依て、實驗を述ふるのみ、讀者請ふ之を諒すへし。

夫れ田原坂の地たるや、極めて險要たり。左は岡田連亘し、右は吉次嶺にして、前は懸崖崎嶇羊腸俗に云ふ段々畑なり。賊は、此の段々畑を利用し、巧みに壘を築き、所謂慄悍決死の士、堅く死守す。官軍晝夜肉薄力攻すと雖ども、動もすれば、賊は、拔刀進し、來て猖獗を極む。故に、官軍も亦た、拔刀隊を編成せざるへからざる必要を生ぜり。

曾て聞く、私學校黨は、常に謂らく、我か徒一擧せば、蝦夷松前迄も、一踢して擧ぐへきのみ、但た我れに敵たる者は、獨り東京警官六千あるに過ぎずと。當時官軍を易ふし、徵兵を侮とる、斯の如し、然り而して、獨り六千人を畏るゝ、所以のものは、川路大警視が、歐洲備警兵ジャンガームの、制を視て建言し、曰く、天下の精英

たる、武士を募て、以て釐下を警備せん。と乃ち、武道に達し、劍搏に長する者を任用す。是れ即ち、私學校黨の、常に深く畏るゝ所なり。我が六千員も亦た、尠々たる武夫を以て、自ら居る。畢竟、武士固有の長技に、特顧する所、大に敵愾の氣を振へり。(今日の劍客など、云ふ者) 是を以て、健腕一百餘人を精撰して、抜刀隊を編制す。其の戦ふや、獅子奮迅偉功赫々、全隊決死の結果、如彼矣。

三月十四日、拂曉、田原坂、段々畑の一大胸壁を、三面より合撃せんと欲し、各部署を分ちて進み、實道は短兵十名を率ひ、其の側面に向ふ。即ち二俣より水車場を過ぎ、字ヒトナイ谷の上に出つ、今ま薩人三百零四名の墳墓ある所、是れなり、時に東天漸く白し、匍匐して壘側に潜行す。賊之れを悟らず、一意に正面へ亂射す。實道乃ち衆を麾まねき、曰く、好機會天與なり、失ふへからずと。即ち、吶喊して壘中に折り込み、賊大に狼狽す、瞬間其の八九賊を斫て殲す。此の時胸部を命射せらる、恰も試合中に、肩を打たれたる心地に過ぎず、却て憤發死力を盡し、縦横健闘せしを覺ふ。上田園田士等は、正面に在り、此の聲を聞き、

直に壘中に躍入す。川畑永谷士亦、旋つて柱に出つ。是に於て、總短兵相合し、共に銳氣を増し、以て奮闘血戦し、血を踏み、屍を越へ、北るを追ひ、直ちに第二線の賊を斫る、賊も亦た刀を揮ひ邀撃し、官賊共に抜刀衝突す。而して、銃丸四方より蟬集す、殺傷無算實道復た被傷す、尙は屈せず、且つ戦ひ、且つ進み、内村士に、擁止せらるゝも、聽かさりし由にて、益満士、曰く、先登第一たるは、確認する所なり。何を加療して、更らに復た出て、戦はさる乎と。士に戒められ、且つ伴なはれて、去りし迄は記臆せり。

園田安賢士は今ま警視總監にて坂口流なり。川畑種長士は消防隊司令官にて柴田流なり。故上田良貞士は方面監督にて野村流なり。永谷常修士は警視本署長にて先代の高弟なり。又た當時參謀の益満邦介士は今ま聯隊長にて鈴木流なり。鮫島重雄士は近衛參謀長にて深見流なり。一に皆な、流義の系統を同ふし、古郷を共にす、一個私人の資格を以て云へば、昔しは昔な劍道の友なり。劍道の友に、抜刀を掲げて相會す。實に道場に入る如く、氣分を健渾し、健渾極つて

今昔の感、意氣の壯、殆んど言ふへからざりき。

此の役賊を斫る數級、而して再戦再傷し、尙は戦ふて止まざる等、當日の健闘、概ね斯の如し。然も亦た一朝の二大血戦にして、詳況は髮髯として夢の如く、絶へて談すへからず。

再たひ、創の未だ癒へざるも、強て請ひ、水俣口に出て、新徴募隊六番小隊長を以て、各地進戦す、凡そ十四餘合(小戦は除く)敵、苟しくも鬪けば、斫り込み。少しく亂るれば、突き込み。接戦を試みるに、一も目的を遂げざるはなし。就中六月十三日の役、朝日岳(肥後國の界にて鬼ヶ嶽の前面)に疾驅して、壘下に薄る、賊壘上に出て、全身を顯はし、瞰下し、急射す、廣野一目蔽障なく、僅に草根を掩護とし、青木東作(松尾上原の役に先登し賊を斫る勇名を顯はす)を右し、本山全三を左し、實道正面に當り、乃ち斫り込を令す。本山全三、先發し跳て壘に入る、迂り倒れて斫らる。兵の田村初五郎、之れに繼ぐ、賊之れに背す、初五郎、之を刺す、賊刺し貫かれなから、振返つて、初五郎の右頬を斫る。(田村初五郎は今も生存せり)此の時遅し、彼の時早し、青木を始めとし、左右

正面一齊に壘中に躍入し、奮闘血戦賊數十人を斫り、殘賊を擠す。

川路長官は、親しく此の接戦を目撃し、實道を召して、曰く、只今の斫り込みは、子が平日に於ける、劍術の試合ひを、見るか如くなりしと。因に記す、後ち十五年目に、舊隊青木來る、適々演習中なり。青木は、實道か兵字構へにて、驅け込む所ろを見て、聲を放ち、曰く、噫彼の時此の如くなりしが、今昔の感至るなり云々。

却説、當時此の戦捷を布達す、其の文に、隈元圓之進の隊と書す。(此書は鹿兒島分遣隊の武山攻戰戰記六月二十二日出つ)圓之進とは實道か幼名なり、幼名劍術を以て聞ゆ、故に云爾すと云へり。實道に取ては、武門の名譽、何にか之れに加へん。中川大山川路參謀等亦、陣頭に立ち、相語て、曰く、其れ今に、斫り込むを、待て其の試合ひ(兵闘を用ひず術闘を用ひず)を見よと、謂ひしこと、屢々之れありしと云ふ。隨て、軍友等、本隊を隈元圓之進の隊と、綽號し、本隊員も、綽號を以て、名譽となす、而して非常なる、劍客の如く思はれしは笑止なれ。併しなから、修業最中の頃る、人に巧美なり、上手な

りと、云はるゝを耻ち、違者なり、元氣なりと、云はるゝを歎ひしなり、之れか爲めに、氣狂け過ぎて、負くると、戒められし事亦、屢々之れありき。然亦、平生の試合には、頓着なく、一に真劍に比し、健腕健歩ならんことを期せり。是れを、圖らずも、奮心を以て、軍中に綽號とせらるゝ素因とはなれり。

最後、負傷は、七月二十四日都之城攻撃に先鋒とし、進んで斫り込んどす、壘前に堀割り路あり、渡るへからず。是に於て、白刃を提けたるまゝ、其の壘前を横きるとき、左足内踝部を狙撃せらる、賊は熊本共同隊にて、バツタンバツタンと云ふ、聲さへ聞ゆるに進む能はず、遺憾極まるに、青木原田等慷慨して買道に暫らくと請ひつゝ、刀を揮て壘を斫る、快哉賊忽ち潰走す。此の新徴募隊は、舊各藩士族より成立せし者にて、無慮千五百人なりしが、其の内の余か隊(二百二)は、到る所ろ切り込みを行ひ、切り込みを以て始終すること、斯の如し。而して他の新徴募各小隊は、如何と顧みるに、一人として切り込みを行ひしことなし。左れば、綽號も亦た事由なしとせず、蓋し兵は率ゆる者に依れをなり。

嗚呼此の前役田原の坂に於ては、先登血戦者と稱せられ、此の後役肥薩の野に於ては、圓之進の隊と稱せらる。畢竟、劍搏其の者が、遂に此の名實を、全ふし得せしめたるのみ。是れ深く、先師先輩に、謝する所ろなり。而して實戦には、試合ひを想はれ、試合ひには、實戦を思はる、蓋し、偶然にもあらざるへき乎。

惟ふに、擔任は膽力を生し、負持は勇敢を生ず。是れ、自明の數なり、自信の力なり、猶ほ、泳術に熟練したる者は、渦まく急流を意ともせざるか如し。然るに、前後十六合の、接戦に於て、刀刃に鮮血淋漓たるも、尙ほ詳況は談すへからず。是に於て、唯た一言、以て之を蔽ふ、曰く、無念無想是れなり。嗚呼、愈々詳況の談すへからざる所ろは、益々無念無想の味ふへき所ろなるを信す。故に曰く木の葉散る田原か坂の太刀風は無念無想の試合ひなりけり

拔刀隊軍歌

(一片の逸興は經歷する所の地名を事實に交へるに在り) 繼つて、けさ驚きの句は琵琶の崩れに和する爲にす)

碎と散らぬ人の和に——
 抜けと陥いぬ地の利を得
 吉次山鹿(割地)に跨りて
 天險無比の田原坂
 數萬の精兵死を極め——
 堅く守りて動かねば
 切て

落せど太刀を取る——六千人の其中に 剣さの技の達人を——撰ひに撰ひ百餘人 慷慨悲壯死を誓ひ——南の關(舊關所也)に血を歌り 聽て身軽く打立て——玉名(地名)の春の鶯に 高瀬(地名)の浪に鼓みうち——死出の山路も分け入れは木の葉(地名)散り果秋の夜の——霜は凍りて骨に浸み 黑白も分かぬ暗らの闇夜——辿り辿りて二俣(田原坂に對し砲戦せし村也)に 腰打ち懸けて見渡せむ——彈丸雨注絶へ間なく 數限りなき胸壁は——漁どる船に左も似たり 嗚呼三尺の劍さもて——之れに當るはなかなか 容易の業になき命ち——君に捧けて潔きよく思ひ切てそ堅唾呑み——枚を銜んで横合ひに 旋り出れば好機會——天の奥へと喜ひつ 忽ち鞘を打拂ひ——玉散る劍さ抜き連れて 煙りの中に切て入る——矢叫火の聲聞の聲 天地も崩す計りなり——園田安賢之れを見て大音聲に呼はりつ——實に斯くせよと期せし圖に 當る必死の限(ソレガシ自身の名を出依り事の實を述ぶ讀者之を諒へし)は——早や斬り込みしそ(ついでに)物共と 指揮も烈しく塵まねき——真霧進地に壘を斫る 二か手の短兵相合し——銳氣日傾る

に百倍し 血を蹀み屍ね踏み越へつ——追ひつ返へしつ火を散らし 卍字薙りに斬り旋る——太刀の早技目覺ましく太刀打つ聲の烈しさに——流石の敵も(おと)舌を卷き 崩れ立ちたる機に乗りて——諸ろ手の味方一ツ時に咄々(トク)と攻めいる砲聲は——四方に轟き(戦地村名)春霞み 植木(敵の牙)の花も何のその——今ま一揉みど短兵を 願れば無慘や斃れ盡き——無疵は僅か二三名 是れさへ我衣に玉疵や——しのみ削りて鋸の刃を 刻み立たる如くにて——息も絶へなん計りなり 左は去りなから幼けなき——頃ろより學び習ひ得し 劍さの技や柔ら手に——恃む武勇の甲斐ありて 先登血戦殊死しつ——血汐に染みし紅葉山 しかも二度さへ手負ひつ——血狂ひ猛けたる猪の 牙の刃先さの鋭どさは——摩利支天の加護ならん 吾れど吾か身の怪し程——願へは無念無想哉 劍さの技も柔ら手も——至れば無念無想なり 劍さの技も柔ら手も——至れば無念無想なり 近時、抜刀隊を設備せんと欲する、議の要領を聞くに、實設の有無は、暫らく論

せず、一體尙武の元氣を、振作するに足るものあり。曰く、本邦は、往古より武國なる上へ、殊に、短兵接戦を長所とす。維新の際、一度外國と交通せしより、本邦固有の兵式を、一變して、一も二もなく洋式に模倣したるは、彼の戦術器械其の者が、我より精巧なる故なれば、素より至當の事なれども、本邦固有の短兵接戦に至ては、歐米各國にも比類なく、我か帝國獨得の戦術なるに、之を廢して用ひざるは、千載の遺憾なり。之を明治十年、西南の役の實例に徴するも、抜刀隊なかりせば、一擊賊の鋭鋒を挫くに至らざるへし。畢竟、洋式を用るは、彼の長を取り、我か短を補ふに、過ぎざる者なれば、我に固有の長技ありなから、之を棄て、用ひざるは、得策ならず、加之短兵接戦は、彼れ等の短所なれば、異日我か長所を以て、彼れに當らば、必勝の策なるへし。云々嗚呼、吾人は、此の精神あれはこそ、朝な夕なに修業するなれ、亦た一身上の戦歴を述ふるも、日本刀の威力あるを證明し、以て異日に俟たんと、欲する精神の默止すへからざるに出るのみ。讀者亦幸ひに、樹下の風なきを咎むる勿れ。

第十五章 入死地

ろ 論よりは死地に入る身と覺悟せよお面小手とか叫ぶ違なし

夫れ、霜刀閃電相撃つに當てや、危機千萬、唯だ踏込み踏込み、先制するの外なし、

然るに、世の劍客なる者は、板間裡の虚用を知るも、種々の口實を設け、以て喋喋す。畢竟、死地に入る身と覺悟し、眞劍に比して、研究せざるが故なり。苟しくも、死地に入ると、覺悟したらんには、口實も附會もなき筈なり。唯一死地に入る、覺悟の終始一徹する者、必らず善く、眞正の劍法を啓發すへし。

彼の巧美を板間裡に銜ひ、少々觸れ當れば、輕くも、太刀筋も、顧みず。軋ち、引揚げ。雨に山羊の鳴く如く、おめんーと、假聲を作て、逞ましく長くし、且つ、種種形容ぶるは、自他を欺きて、瞞着せんとする者なり、好しや、瞞着せんとするに、在らすとするも、斯の如きは、華法を馴致する弊端なりとす、豈に大に戒めざるへけんや。

人々、至誠に到るの要訣は、他人を欺むかざるよりも、自己を欺むかざるを先務とす。歌に人間は、あるをなしとも云ふへきが心ろに間は、如何答んと云へり、即ち自己の良心は、明かに、其の所爲の真劍に、戻るを知るも、板間裡の虚用なるを知るも、因襲又は技辨等に蔽はれて、本意ならずも、巧美を板間裡に衒らひ、自他を瞞着せんとするに、至るものなり。畢竟、死地に入る身と覺悟し、真劍に比して、研窮せざるか故なり。真劍は如何なるものぞ、理想を推すも、分明ならん。故に論よりは、死地に入る身と、覺悟せよ、お面小手とか、叫ふひまなし、とは云ふなり。

併しなから、奈何に真劍に、比すと雖ども、亦た荒唐無稽に涉るへからず、法は法とし、以て、其の弊に流れざるを要するのみ。敵掛け聲を放ち、引揚げたるときは、好しや軽くも、跡打ちすへからず。其の軽重、及び勝敗は、審判官に一任し、去て吾れは其の次の、勝負に勝つことを、心ろ懸くへきなり。決して負け惜みがましく、口上にて、喧争すへからず。敵の太刀は、軽くも重く受け、己れのみがましく、口上にて、喧争すへからず。

太刀は、重くも軽く卑下するは、武夫淳厚の風習なり。

凡そ、掛け聲を要する所以は、往古に在ては、素面素小手なるか故に、面を打そ、小手を打そ、と注意を惹き、打ち込みしと云ふ。中世道具を着用するに至ては、一に氣勢を助け、二に偶然無意の所爲にあらざるを證し、三に一勝一敗を分ち、亂撃を防制するか爲めなりとす。又た、掛け聲は、敵に氣を焦燥たせ、又は、周章打損せしめ、或は、誘出して返撃し、以て勝を制するにも、亦た一手段なりとす。

第十六章 會得

會得して忘れまじさう敷島の大和劍きの道や葉りて

凡そ、武道は、演習さへすれば、足れりとするものにあらず。技藝は、演習さへすれば、進歩せざるにあらざるも、武道の蘊奥を極めんには、道理に暗らくして、獨り演習のみにて、立ち待へきものにあらず。故に先づ、工夫を凝らし、思慮を彈し、篤と尋思考窮すへし。西語に、散讀するほど、情なる者はなしと云ひ。

一讀未だ要領を得ざるに、他々思ふ者は、讀まざるに同しと云へり。故に讀み來り、讀み去る、毎に、一々善く其の要領を咀嚼し、自家の腦底に融化するを、會得と云へなり。

敷島の大和劍きの道たるや、

伊弉諾尊

伊弉册尊、瓊矛を執りて、八洲を

畫し玉ひ、尙武の象顯はる。

天祖

皇孫に命じて、下土に君臨せしめ玉ふ

時、寶劍を傳へて、天位の信となし玉ふ、尙武の道明かなり。

神武天皇、中

州を平定し、靈命を受けて、人皇の始となり、尙武の訓定まる。天降の諸神に於て、健甕齋主の烈は、云ふに及ばず、

素盞鳴尊の蛇を斬り、

大己貴尊の

國を平け玉ふ如き、三千年來武を以て本となす、外寇畏れて以て蹤を遠さけ、邦家頼て以て堵を安んし、其間或は、敵國外患なきに狂れて、文華を尙ぶ餘り、奢靡風流に陥り、弓馬刀槍は、一の儀式の如く視て、風流嫺雅に、衽席に、沈溺して、以て劍道は、武門武士の業のみと、なせし、跡ありと云ふと雖ども、尙武の訓は、萬古一徹にし、

天子躬ら寶劍を佩ひ玉ふ、御制之れあり。隨て、上下

好武の稟性は、國體に基づきて、以て國光を發揮しつゝ來れり。是に於て、國史を繙どけば、我か大和劍きの道、發しては、大和魂となり、又は武士道となり、世界無類の、光華を培養したる所以を、觀るへし。乃ち、之を自家の腦髓に、葉りせずんばならず、故に大和劍きの道や棄りて、と云ふになん。

此の章の終に臨み、眞影流の歌を告げん、其の歌に、我か流は行術も知れず果もなし命ちを限り勤めなりけりと云ふ、即ち是れなり。夫れ、文武の道は、廣大にして、上達すれば、上達するほど、高遠なり、終身之を講習するも、猶ほ、蘊奥を極め難きに困しむ。左れば、古人も、學藝に終期なし、死を以て、之れが終りとなすと云へり。今や一校舎を出て、一業務に服するときは、忽ち小成に安んし、優遊の弊に陥るは、滔々たる天下一般の風潮なり。然るに適れなる哉、嗚呼、道かに、將校は、軍事執筆、夜を以て、日に繼ぐにも拘はらず、寸暇あれば、必らず、峨帽銀鞘旭日に相映して、輝やき弊館に來らる。是れ弊館の歴史に、光輝を添ゆと謂はんより、寧ろ、天下一般の風潮に、矯正を與ふと謂はすんばならず。

是を以て、國家の爲めに、其の徳を頌せざるを得ざるなり。而して、當流の系統に係はる、此の歌の意も、亦た茲に至て、益々味ひ深きを觀るへし。

第十七章 劍術基本

夫れ、古人は、本を務む、本立て道生す。乃ち基本に熟練せよ、變化應用は、一よ皆な熟練より生す。本を務めずして、末を求むる如きは、焉んを善く、豁達自在なるを得ん。

擊劍神通録事理問答に、曰く、事とは何ぞや、答て曰く、大と強と速と輕との、四を以て、根本とす。然れども、大なるものは、遅く。強なるものは、固く。速なるものは、小く。輕なるものは、弱し。此の四弊なくして、大強速輕なるを、四訣とす。又た曰く、未熟者へは、大と輕とを、教へて、強と速とを禁す。即ち太刀筋を正ふる爲めに、太刀捌きを大きくし。太刀捌きを、大きく導く爲めに、遅く振り廻はし。手心輕快打ならしむる爲めに、弱く(大も弱も亦た程合ひあり)打たしむへし。問ふ曰く、理とは何ぞや、事の上にて、表裏あり。正を以て合せ、奇に勝つ。奇を以て戦ひ、正に勝つ。正を奇とし、奇を正と

す。之を上達の地位に、進んで、事理一致と云ふ。問ふ曰く、間際、權際、氣際とは如何や。答て曰く、彼れよりも來るへく、我れよりも往くへき、之を間合ひと云ふ、間際は是れなり。彼れも位ひを取る、我れも位ひを取る、之を釣合ひと云ふ、權際は是れなり。彼れに氣あり、我れに氣あり、機をなさんとす、之を氣合ひと云ふ、氣際は是れなり。又た曰く、妙は熟するに在り、熟すれば、心ろ善く手を忘れ、手善く心に隨ふ。動は靜なみに在り、靜なれば、神善く智を使ひ、智善く機に應ず。と字々句々、痛切極意の問答なり。

基本演習第一教 打込

總へて、整頓法は、歩兵操典を適用す。猶ほ柔軟演習に於けるが如し、（此の演習は）太刀の操法は、抜き納めすることなく。肩へ劍、及び捧げ劍、改め劍等とす。

肩へ劍は、刀の柄を右手の拇指と食指中指との間に保持し、他の二指を柄の外に附し、其の手を右腕骨の稍下方に接着し、刀身を垂直に立て、刀背を肩の凹部へ托し、微しく臂を屈し、肘を後方へ出す。捧げ劍は、刀を垂直に上げ、其の刀面を顔の中

中央に對せしめ、鎧を肩の高さに齊しくし、肘は自然に體に近接す。其の第二節は右臂を全く伸ばして刀を斜に下げ、爪を上にして拳を右股より少しく離し、受禮者に注目す。受禮者答禮し、劍を肩へ取れば、下級者も亦た再び刀を擧げて、之を肩にす。此の捧け劍は、號令を用ゆへからず。

改め—劍は、此の劍の令にて、捧け劍の第一節の動作をなす。検査官、己れの面前に来る時、拳を外方に轉回し、刀身反對の面を顯はす。検査官通過する後ち、肩刀の姿勢に復す。

右八相に構へ—劍 (初心は右のみ小手を用ひ熟すれば全道具を用ゆ)

各左足を前方へ踏出すと同時に太刀を右肩の上に取り左拳の甲を己れの右耳の邊へ接する如くし左手の人指を伸ばし小指を締め右手は稍々之れに反し軽く掌握鶏卵の心ろ持ちにし刀尖高く後方へ四十五度に捧持し氣當りす

打込め—一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 武士は一の令にて右足を充分前方へ踏込むと同時に右肩より敵手の左

側面へ矢筈に打込み幾分か跡の足を右足へ引き寄せる

敵手は左足を引くと同時に我か右肩より兩拳を左脇へ卸ろし太刀を我か左脇へ堅立して武士の打込み來るを受留む但し間合ひを見計り歩度を加減す以下準之

注意 總へて敵手は之字形に跡退りて武士前進の習慣を誘致す初心の武士には豫行として第一舉動より第七舉動まで素振りせしむへし

第二舉動 武士は右足を踏込みたるまゝ、よし太刀を己れの右側後方へ轉旋しつゝ、兩拳を頭上へ冠ふり兵字に構へ二の令にて左足を踏込むと同時に敵手の右側面へ矢筈に打込み幾分か跡の足を左足へ引き寄せる

敵手は右足を引きつゝ、太刀を左脇へ堅立したるまゝ、右脇へ移して武士の打込を受留む
第三舉動 武士は左足を踏込みたるまゝ、よし太刀を左側後方へ轉旋しつゝ、兩拳を頭上へ冠ふり兵字に構へ三の令にて右足を踏込むと同時に敵手の左側面へ矢筈に打込む敵手 右足を右外へ移しつゝ、刀尖を左側へ垂下し深く兩拳を頭上に冠ふり左の臂を伸 び腰を割りて刀尖は峯を左腕に沿ひ勾形に垂れ左足を右足へ引寄せつゝ、武士の

矢筈より打込み來るを左腕の上に勾形に受留む之を垂柳と云ふ垂れ柳の体なればなり

注意 初心の武士には第一第二舉動の如くするを導ひ易しとす何となれば敵手に

於て垂柳の體になれば初心は忽ち破いて太刀筋を狂はせ逆撃せんとすれをなり

第四舉動 武士は第二舉動の如くす

敵手も第二舉動になせし如く左足を左外へ移して右足を左足の後方へ引きつゝ、兩拳を

右脇へ卸ろして太刀を豎立し武士の打込を受留む

第五舉動 武士は第三舉動の如くす

敵手は右足を右外へ移して左足を右足の後方へ引きつゝ、太刀を右脇へ豎立したるまゝ、

左脇へ移して武士の打込を受留む

第六舉動 武士は第二舉動の如くす

敵手は左足を左外へ移し右足を左足の後方へ引き寄せつゝ、刀尖を右側へ垂下し深く兩

拳を頭上に冠ぶり刀尖は右腕に沿ひ勾形に垂れ右手は小指より次第に緩め稍々左拳を

覆ふ如く左拳へ接しつゝ、稍々腰を割りて武士の打込む太刀を右腕の上に受留む

第七舉動 武士は第三舉動の如く打込み直ちに其の打ちたる反動を利用して爲し

得る丈け遠く後方へ飛び退り左足を後へ引き通常の如く兵字に構へ氣當りす

注意 初心へは前進する習慣を誘致すべきものとす然るに武士をして後方へ飛び退

るを教ゆるは場所の廣狹あるに依れり尤も終には元の地位に引き退くへし(以下準之)

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ、刀尖は峯を右腕に沿ひ勾形に垂れ居

るまゝ、後方へ轉旋し稍々刀尖を頭上に一直線に立て、其の刀尖を稍々前方へ垂れ左側

へ振り廻はして太刀の峯を左腕に沿ひ左臂を伸へ稍々腰を割りて武士の打込む太刀を

左腕の上に受留む此の太刀筋を天上より見れば恰も羅馬數字の8を頭上に横に書く如

く刀尖にて右左へ輪形を書く心持ちにす而して稍々一節を保ち兵字に構へつゝ、幾分か

左足を踏出し直に深く右足を踏込むと同時に茶巾しはりに刀尖は武士の眉間へ兩拳は

我が乳通りへまで下ける心持ちにて切り込み氣當りす終には元の地位に引き退く

基本演習第二教 打込

左り八相に構へ——劍

總へて第一教に同じくして左右の違ひあるのみ尤も各右足を踏出し居りて劍の令にて右手の内側は柄に稍々沿ふ如くし左拳は右肘に並ふ如くし左肩の上に太刀を取る

打込め——一、二、三、四、五、六、七

全く第一教にして左右の違ひあるのみ終て互に太刀を精眼に構ゆ

基本演習第三教 繼打込

兵字に構へ——劍

各右足を踏出し太刀を頭上に冠ふる所謂兵の字體の如く構ゆ以下準之

繼き打込め——一、二、三、四、五、六、七、一、二、三、四、五、六、七、一、二、三、四、五、六、七、一、二、三、四、五、六、七

第一教の右八相に構へ打込めの第一舉動より始め第七舉動に至り第二教の左八相に構へ打込めの第一舉動に移り其の第七舉動より復た第一教の第一舉動に移るか如くす尤も敵手は武士に前進の習慣を誘致する爲めに之字形に跡退りしつゝ、道場を廻はるものとす唯た打込稽古に異なる所らは體當りせざるのみ

基本演習第四教 互打込

兵字に構へ——劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ且つ各片足を軸にす

互ひ打込め——一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二

第一舉動 武士は右足を軸にし左足を踏込むと同時に真直く切り込む

敵手は左足を軸にし右足を引くと同時に×字形に切り結ぶ

第二舉動 敵手は刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込むと同時に切り込む

武士は刀尖を左側後方へ轉旋し左足を引くと同時に真直く×字形に切り結ぶ

幾度も繰り返へすへし是れ武士に取ては左足の働らきを自在にす終て引分れ精眼にす

基本演習第五教 延ひ打ち

兵字構へ——劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ以下昔な奇數の教は右足偶數の教は左足を踏出すものとす

右小手に延ひ打ち込め——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 武士は左足を踏込むと同時に眞直く敵手の右腕へ延ひ込み打つ
 敵手は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ、刀尖を一字形に右方へ横たへ武士の
 打込む太刀を右腕の上に受留む

第二舉動 敵手は刀尖を右側へ垂れ後方へ轉旋し上段より武士の頭上へ打込む
 武士は刀尖を引上げつゝ、右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ、太刀を一字形に左
 方へ横たへ敵手の我か頭上へ打ち来る太刀を賺して受留む

注意 武士は右小手へ打込む太刀を我か左の方へ横たへて受留む敵手は右小手を
 防ぎ受留むれば其の太刀を武士の左の方へ切り返へす稍々反對なりとす

第三舉動 武士は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ、上段より眞直く打込む
 敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ、左手を伸べ太刀を一字形に左方へ横
 たへ武士の我か頭上へ打込み来る太刀を賺して受留む

第四舉動 敵手は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ、上段より眞直く打込む
 武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ、太刀を一字形に右方へ横たへ敵手の

我か頭上へ打込み来る太刀を賺して受留む

第五舉動 武士は太刀を右側後方へ轉旋しつゝ、上段より眞直く打込む
 敵手は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ、太刀を一字形に右方へ横たへ武士の
 我か頭上へ打込み来る太刀を賺して受留む

第六舉動 敵手は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ、上段より眞直く打込む
 武士 右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ、太刀を一字形に左方へ横たへ敵手の
 我 頭上へ打込み来る太刀を賺して受留む

第七舉動 武士は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ、上段より眞直く打込み直ちに其の
 反動を利用し爲し得る丈け後方へ飛び退りつゝ、兵字に構へ左足を後へ引き精眼に卸る
 ず敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ、左手を伸へ太刀を一字形に左方へ
 横たへ武士の我か頭上へ打込み来る太刀を賺して受留め直ちに多少左足を踏出しつゝ、
 太刀を左側後方へ轉旋し兵字に構へて稍々一節を保ち深く右足を踏込むと同時に茶巾
 しほりに刀尖高く手元低く切り込み互に氣當りし精眼に取る

基本演習第六教 延ひ打ち

兵字に構へ——劍

各左足を踏出し兵字に構ゆ

左小手に延ひ打ち込め——一、二、三、四、五、六、七

總へて右小手に延ひ打ち込めは同じ但た左右の違ひあるのみ

基本演習第七教 押へ打ち

兵字に構へ——劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

右小手を押へ打て——一、二、三、四、五、六、七

總へて第五教に同じ但た此の押へ打ては互に衝突する途端に應用する技なるを以て敵手より乗り懸る心ろ持ちにて兵字に構へたるまゝ多少進み出つ武士は幾分か手元を下けて利々刀尖を立て押へ付け打つ心ろ持ちにす以下第五教の通りす

基本演習第八教 押へ打ち

兵字に構へ——劍

各左足を踏出し兵字に構ゆ

左小手を押へ打て——一、二、三、四、五、六、七

總へて第七教に同じ但た左右の違ひあるのみ

基本演習第九教 引き打ち

兵字に構へ——劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

右小手を引き打て——一、二、三、四、五、六、七

總へて第七教に同じ但た此の引き打ては敵の起り頭らを待て引き打つ技なるを以て武士は多少跡退りつ、矢筈懸けに敵手の右小手を鋸斷す

基本演習第十教 引き打ち

兵字に構へ——劍

各左足を踏出し兵字に構ゆ

左小手を引き打て——一、二、三、四、五、六、七
總へて第九教に同じ但た左右の違ひあるのみ

基本演習第十一教 面を打ち胴を留む

兵字に構へ——劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

面を打て——右胴を留め——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 武士は多少左足を踏込みと同時に眞直く敵手の額上へ打込む

敵手は左足を左外へ移し右足を左足に引寄せつゝ太刀を一字形に横たへて武士の我が頭上に打込み来る太刀を賺して受留む

第二舉動 敵手は兩足を踏み切て武士の右側へ飛び込みつゝ、跣躑を地につき踵は臀部を支へ膝は左右へ開き左手の爪を上にし兩臂を伸べし武士の右胴を斫る

武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ、腰を割りて其の腰を左側へ捻り寄せ兩拳は頭上へ冠ふりたるまゝ、右肘を右乳の邊へ卸ろし寄せ太刀の峯は頭上より右肩を

經て右臍骨に垂直に接し敵手の我が右胴へ打込み太刀を受留む

注意 此の教以下は昔な第四舉動迄は同一の片方へ切り返へず感ふ勿れ

第三舉動 武士は右胴を受留めたる太刀を右側後方へ轉旋し上段より眞向へ打込み敵手は武士の右胴へ飛び込み研りたるまゝにて起ちつゝ、右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ、兩拳を頭上へ冠より太刀を一字形に左方へ横たへて武士の太刀を受留む

第四舉動 敵手は太刀を左側後方へ轉旋しつゝ、上段より武士の眞向へ打込み武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ、太刀を一字形に右方へ横たへて敵手の我が頭上へ打込み来る太刀を賺して受留む

第五舉動 以下は第五教の第五舉動以下に同じ

基本演習第十二教 面を打ち胴を留む

兵字に構へ——劍

各左足を踏出し兵字に構ゆ

面を打て——左胴を留め——一、二、三、四、五、六、七

總へて第十一教に同じ但た左右の違ひあるのみ

基本演習第十三教 脱け面

兵字に構へ——劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

脱け面打て——右肩を留め——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 武士は眞直く敵手の額前へ打込む

敵手は兵字に構へたるまゝ、飛ひ退き武士の打込む太刀を外つす

注意 此の技は平日の試合ひよりは寧ろ眞劍に多し何となれば實戦は刀尖届かす土を研るものなれり

第二舉動 敵手は武士の稍々右肩の上へ眞直く打込む

注意 此の舉動は理想の上にては易きか如しと雖ども熟練するにあらざれば瞬速に施し難き技なり所謂目に見て手足應せす心に感して技備出すと云ふ場なりとす

武士は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ、太刀を一字形に右方へ横たへ敵手の

我が頭上へ打込み來る太刀を賺して受留む

第二舉動 以下は第十一教の第三舉動以下に同じ

基本演習第十四教 脱け面

兵字に構へ——劍

各左足を踏出し兵字に構ゆ

脱け面打て——左肩を留め——一、二、三、四、五、六、七

總へて第十三教に同じ但た左右の違ひあるのみ

基本演習第十五教 押し返へし

精眼に構へ——劍

各右足を踏出し柄頭は己れの小腹より少しく離して兩腕は寛かに張り刀尖は交叉して眼に注ぎ氣當りす

押し返へし右側面打て——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 互ひに太刀を順に交叉す即ち敵劍の左側に於てす敵手は武士の太刀を

武士の右方へ打ち落す心ろ持ちて押へ遣る

武士は其の押し遣らるゝを利用して其の太刀を右側後方へ轉旋し兩拳にて頭上へ冠より左片手にて柄頭を握り將さに打込まんとす右手にて押し遣るときは刀勢快速なり

第一舉動 武士は左片手にて敵手の右側面へ矢筈に打込むと同時に左足は左外側へ踏み込み右足は左足の後方へ引き披らさ全く側身となる

敵手は右足を後方へ引くと同時に右拳は太刀を握りたるまゝ己れの右肩の高さに上げ其の太刀を立て、武士の左片手にて我か右側面へ打込み來る太刀を受留む

第三舉動 武士は右手を添へて兩拳に太刀を左側後方へ轉旋し頭上に冠より右足を踏込むと同時に敵手の左側面へ矢筈に打込む

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ刀尖は兩拳を上げながら左方へ一字形に横たへ左腕へ沿へ武士の我か左側面へ打込み來る太刀を受留む

第四舉動 以下は第五教右小手に延び打ち込みの第四舉動以下に同じ
基本演習第十六教 押し返へし

精眼に構へ——劍

各右足を踏出したるまゝにて摺り出て、刀尖を交叉す

押し返へし左側面打て——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 敵手は武士の太刀を組み換へたる（初心へは組み換へと令す）とき、武士の太刀を武士の左方へ打ち落す心ろ持ちにて押へ遣る

武士は其の押し遣らるゝを利用して其の太刀を左側後方へ轉旋し兩拳を頭上へ冠よりつゝ右片手は添ゆる迄にし左八相の如く構へる

第二舉動 武士は全く左片手のみにて右足を踏込むと同時に敵手の左側面へ打込む以下敵手武士共に第十五教第二舉動以下に同じ但た左右の違ひ

基本演習第十七教 押し返へし半ば轉旋打ち
精眼に構へ——劍

各右足を踏出し太刀を交叉す總へて精眼の構へは第十五教に示す如し
半ば轉旋左側面打て——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動

敵手は武士の太刀を武士の右方へ打ち落す心ろ持ちにて押へ遣る
武士は其の押し遣らるゝを利用して半バ其の太刀を右側後方へ轉旋し兩拳共に頭上へ
太刀を冠ぶりて右八相の構への如くす

第二舉動

武士は右八相の高く構へたる如く構へたるまゝ、全く左片手のみにて太
刀を握り右片手にて押し遣る心ろ持ちにし敵手の左側面へ矢筈に打込むと同時に我か
右足は敵手の左側の左外へ踏み込み左足は右足の後方へ引き披らく
敵手は左足を引きつゝ、兩手にて太刀を立て右拳を左肩の高さに左方へ上げ受留む
第三舉動 以下は第二教左八相の第三舉動以下に同じ

基本演習第十八教 押し返へし半は轉旋打ち

精眼に構へ——劍

各右 踏出したるまゝ、太刀を交叉す

半は轉旋右側面打て——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 敵手は武士の太刀を組み換へたるるとき武士の太刀を武士の左方へ打落

す心ろ持ちにて押へ遣る

武士は其の押し遣らるゝを利用して半を其の太刀を左側後方へ轉旋し兩拳共に頭上へ
太刀を冠ぶり左八相の構への如くす

第二舉動

武士は左八相の高く構へたる如く構へたるまゝ、全く左片手のみにて太
刀を握り右片手にて押し遣る心ろ持ちにし敵手の右側面へ矢筈に打込むと同時に我か
左足は右外へ移して左足は敵手の左側の左外へ踏み込み右足は左足の後方へ引き披ら
く敵手は右足を引きつゝ、兩手にて太刀を立て右拳を右肩の高さに右方へ上げ受留む

第三舉動

以下は第一教右八相の第三舉動以下に同じ

基本演習第十九教 巻き小手

精眼に構へ——劍

各右足を踏出し太刀を交叉す

右小手を巻き打て——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 武士は敵手より押し返へし如く押し觸れたるとき兩拳共に劍尖を下

げ敵手の太刀の下を經過せしめ反對の刀側へ振り上げ刀尖にて輪形を畫く心る持ちにて巻き込み敵手の右小手を打つと同時に左足を踏込み右足を左足の後方へ引き披らく敵手は充分に臂を伸べ右拳の第二節を外へ出す心る持ちにて右手の拇指を捻り締め込みて武士の打込み來る太刀を傍際にて受留めつゝ幾分か右足を引く

第二舉動 武士は太刀を左側後方へ轉旋し頭上より敵手の左側面へ矢筈に打込むと同時に右足を踏込み込む

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ太刀を左方へ垂れ左腕へ沿へ受留む

第三舉動 武士は太刀を右側後方へ轉旋し此の第二舉動の反對に打込む
敵手は第二敵左八相の第六舉動より第七舉動に涉る如く刀尖にて8字を畫き太刀を右腕へ沿へ武士の我が右側面へ矢筈に打込む太刀を受留む

第四舉動 以下は第六敵左延ひ打込みの第四舉動以下に同じ
基本演習第二十教 巻き小手

精眼に構へ—劍

各右足を踏出したるまゝ常法の如く順に太刀を交又す

巻き小手を賺せ—一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 敵手より先づ第十九教に於て武士のなせし如く武士の右小手を巻き打つ武士は太刀を握り居る右手を放ちて空を打たしむると同時に多少兩足を引きつゝ左片手にて左八相の構への如く高く太刀を捧持す

第二舉動 武士は左足を踏込むと同時に右拳を後方へ振り出し釣り合ひを取りつゝ左片手にて敵手の真向へ打込む

敵手は左足を左外へ移し右足を左足へ引寄せつゝ太刀を一字形に右方へ横たへ武士の真直く打込み來る太刀を賺して受留む

第三舉動 武士は太刀を左側後方へ轉旋し頭上より敵手の左側面へ矢筈に打込むと同時に右足を踏込み右手を添ゆ

敵手は第一敵右八相の第六舉動より第七舉動へ移る如くす

第四舉動 以下は第五敵右延ひ打ち込みの第四舉動以下に同じ

基本演習第二十一教 前進賺せ

武士兵字に構へ——劍

武士は兵字に構へ敵手は精眼に構ゆ

突きを右へ前進賺せ——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 敵手は先つテヨツと刀尖を振り上げ投り込む心ろ持ちにて諸爪を上へ向け兩肘をしほり寄せ兩拳を上げ刀尖を頸窩へ落とし込む心ろ持ちにす

注意 試合に臨めば竹刀尖の切斷せし鋭角を打ち付る心ろ持にすへし

武士は右足を右外の前方へ飛び移し左足は右足の後方へ引き披らくと同時に右手の掌にて敵手の太刀の平らを我か左腋の外へ拂ひ除ける

注意 突きは後方へ避れば敵に繼げ突きを入れる餘地を與ふる不利益あり

第二舉動 武士は左足を踏込むと同時に左片手にて眞直く打込む

敵手は右足を右外へ移し左足を右足へ引寄せつゝ太刀を左方へ一字形に横たへ受留む

第三舉動 武士は太刀を左側後方へ轉旋し頭上より眞直く打込むと同時に右足を

踏込み右手を添ゆ

敵手は第二教左八相の第六舉動より第七舉動に移る如くす

第四舉動 以下は第六教左延び打ち込めの第四舉動以下に同じ

基本演習第二十二教 前進賺せ

武士兵字に構へ——劍

總へて第二十一教に異なることなし

突きを左へ前進賺せ——一、二、三、四、五、六、七

第一舉動 敵手より先つ刀尖を振り上げ投り込む心ろ持ちにて突く擬勢をなす

武士は左足を左外前方へ飛び移すと同時に右手は拳を固めて敵の太刀を我か左腋より我か右腰の外方へ拂ひ除ける

第二舉動 武士は左片手にて左八相の如く構へたるまゝ左足を踏込むと同時に打

つ敵手は第二十一教の第二舉動の反對にす

第三舉動 以下は第二十一教の第三舉動以下に同じ但た左右の違ひ

基本演習第二十三教 隨意切り返し

兵字に構へ—劍

各右足を踏出し兵字に構ゆ

隨意切り返し—一、二、三、四、一、二、三、四、一、二、三、四、一、二

第一舉動

隨意切り返しは第五教の第一舉動より第四舉動迄を幾回も繰り返し行ふ敵手は武士の氣息疲れ若しくは刀尖鈍れたるとき爲し得る丈け後方へ飛び退き兵字に構へ稍々一節を保ち徐かに第七舉動の終りの如く曳と切り込む

武士は敵手の飛び退きたるを相圖に第七舉動の終りの如く後方へ飛び退き兵字に構ゆ而して肩へ劍の令ぬる迄は兵字構へにし繼て隨意切り返しの令あれば之を行ふへし

第十八章 打込稽古

夫れ、打込稽古は、氣息を永續し、歩法を自在にし、以て、健腕健歩ならしむるものなり。

武士は、基本演習第三教の如く、左右より矢筈に烈しく、打込みつゝ、間合ひの離れた

るときは、體當りし、其の體當りを外つされたるときは、小速歩にて、板壁に迄も、突き破る勢ひにし、又た延び込み、又た體當りす。體當りの要領は、第八章に就て見るへし。但し一道場、一組み限りにて演習すへし衝突の恐れあればなり。

敵手は、武士に前進の慣習を誘致する爲めに、之字形に跡退りつゝ、ホイ、ホイ、ヤホイ、ヤホイ、と相相應し、一人の武士、體力疲れて引き込みは、他の一人を引受け、復た、氣息盡きて引込めは、復た他に及ぶ。武士は、順次に並列し、控へ居りて間斷なく、直に續くへし。尤も前者、未だ引き込まざるも、鈍ふしと見れば、後者直ちに打掛りて、前者に替はるべし。要するに、一人の敵手と、數人の武士と、體力氣息の競争なりとす。斯の如く間斷なくして、幾十人も引受けるは、先道の先進たる所以にして、斯道の名譽たり。是れ一面を一本とする所以なり。

打込稽古は、敵手武士共に、體に根さして、體より大きく働らくへし。先づ敵手は、刀尖を垂直に立て、兩肘を張り、肩の根より押し廻はし、押し廻はし、兩肩の端より端へ、拳にて8字を横に畫く、心ろ持ちにす。武士は四十五度に、頭上より矢筈に、打込

ひへし。尤も頭上より四十五度に、打込みたる太刀を、頭上へ引き戻して、復た頭上より、矢筈に打込み、一々臂を充分に伸ばすへし。彼の額前にて、兩手首を轉回する者は、及を上へ向け、平らにて敵手の肩の邊へ、打込技癖を生ず。元來初心は、速小の技癖を生し、易きものなれば、先進に於て、之を戒め、以て成るべく丈け、遅大に勝致せん爲めに、時々、大きく大きくと、注意を惹き、尙ほ悟らすんば、遅く打てど、教ゆる等、其の人に依て、其の法を説くへし。

打込稽古の終りには、基本演習の各教を活用せしむへし。即ち、世間普通に云ふ、三本勝負の下た稽古なるものは是れなり。是れ併しなから、必ずしも行ふには及ばず。

問ふ、曰く、術の期す所は、勝を制するに在り、敵に勝を制せんと欲せむ、常に三本勝負を、専務とせずんばあらざるか如し、請ふ之れか利害を聽かん。

答ふ、曰く、常に三本勝負を専務とすれば、害ありて利なし。是れ、彼の俗流劍客が、コセツイテ分を、掠めるに長する所以なり。彼の相撲を見よ、相撲は何にか爲りに、勇壯活潑なるか、相撲取りは、生涯土俵の上のみの、勝負専門者にして、一勝一敗給金に

關す。定めし地取りにては、勝負の研窮のみなるへしと、思ひの外に、絶へて勝負をなさず、唯た唯一の打當りてふ稽古のみなり。相撲の日進新歩せる所以は、茲に在り、以て我か打込稽古の、必要なるを知るへし。適々勝負を試みるは、進歩の程度、及び技倆の優劣を、比較するに過ぎず。吾人の勝負は、一旦緩急に、臨みたる真劍の上^ニに在り。故に平生は、打込稽古のみにて、烈しく矢筈に打込み、左右兩足交互前後し、敵に体當りし、以て、体力を練り、膽力を鍛ひ、置けを足れり。

問ふ、曰く、或る流にては、左右より矢筈に、打込みつゝ、左足を踏込み打ては、敵に體當りせられたるとき、危弱なりと云へり、果して然るものか、否や。

答ふ、曰く、其れは未熟の人の教へど、竹刀の柄の長さ^とに、依るに過ぎず。先つ初心に左方より、矢筈に打込みときは、左足を踏込み打てど、教ゆるも、左足を踏込み打つことは、容易に爲し能はざるなり。己れ之を因襲して、人に迄も、右片足のみを踏出し居て、打込のど云ふは、未熟の人の教へたるや、知るべきなり、維新以後の、劍術使ひと呼はるゝ、連中に、此の類最も多し。且つ竹刀の柄の長さが故に、左足は踏込み打ち

にくく、而して左足を踏込み、慣れざるを以て、體當りせられたるとき、危弱なる如く思ふならん。若し夫れ、左足を踏込、打ちたる爲めに、體當りを防止するに、危弱なりとせば、敢て問ふ、銃槍薙刀の如きは、如何、皆左足を踏出し居ながら、却て、善く防止し、善く衝突するにわらずや。故に、所謂體と太刀一致に連れて、左右兩足を交互に前後すへし。當に縦横自在の技倆は、之れより生すへきなり。

問ふ、曰く、平生に押れ合ひの、人に對して勢ひ善く強撃し、晴れなる試合ひに臨めば、存外にも跡退りて、未練の舉動ある者あり、斯の如きは、心膽未練なるに出る乎。

答ふ、曰く、然り。心膽未練者は、忍容の量なき故に、平生は初心者爲めに、肩肘など打たるれば、忽ち、憤怒して強撃するも、晴れなる試合ひに臨めば、未練の舉動あり、斯の如きは、堂々たる武人の、耻つへき事にして、劍道の背徳者となす。尙ほ、第一篇氣位ひの要領に参照すへし。

元來初心は、無我無心に、知らず道具外に、打込む者なり。之を防ぎ得ざるは、先進者の油断なり、己れの、油断を反省せしめて、初心者に咎むるは、劍道の背徳と謂はすし

て、何にぞか云はん。

併しなから、奈何に初心と雖ども、道具外に打込みて、可なりと云ふにわらず。故に其の道具外なるを知らず、速かに謝すへし。復た之れに心ろづかさるときは、先進は温言に、曰く、眞劍なら降参たど、諷諭する位ひよ止め、撃つも、撃たるも、愉快の心ろを以てすへし。

第十九章 太刀生死之辨

凡そ、太刀に生死あり。兵字構へは、生の太刀なり。互ひに精眼にて、刀尖を合せたるときも、亦た少しにても、上へなるは生の太刀なり。打て打ち棄てにし、刀尖の地下に落ちるは、死の太刀なり。左右へ散り離れるは、死の太刀なり。要するに、打ち棄て打ち放ちにするは、死の太刀として、嫌ふ所なり。一たひ打ては、繼て、打出し易き様にするは、生の太刀なり。竹刀尖を堅立し、胴を防ぐ如き類は、受限りになり易く、無理にも打出んとすれば、小技に過ぎず、是れ皆な、死の太刀として嫌へり。我が劍術基本を應用するは、卍字の本領にして、打繼き打繼き、底止する所なく、所謂放ても、尙ほ

放ても尙ほ、生氣、最も盛んなるへし。真劍は、次第々々、重くなりて小技になり易し。故に、平日大技に習慣せば、真劍に臨み、大ならず、小ならず、中を得んとす。参照に、回天五輪の巻を抄す、曰く、敵を斬るときも、手の内に替りなく、手の癢まざる様に持つへし。若し、敵の刀をハル事、受る事、當る事、押ゆる事、あるども、斬ると思ひて、太刀を取るへし。試めし物など、斬るときの手の内も、兵法にして斬るときの手の内も、人を斬ると云ふ手の内に、替ることなし。總て、太刀にても、何にても、居着くと云ふことを嫌ふ。いつかさるは、活る手なり。いつくは、死ぬる手なり。常用の我が差す刀を、指二本にて振るときも、道筋を能く知りては、自在に振るものなり。太刀を早く振らんとするに依て、太刀の道筋に逆らひ、振り難し。太刀は振り能き程に、静かに振る心ろなり。或る扇子や、或る小刀など、使ふ様に、早く振らんと思ふに依て、太刀筋狂ひ振り難し。太刀は打下けては、振り上げ善き道へ上げ、横に振りては、戻り善き道へ戻し、如何にも、大きく臂を伸べ、強く振る事、是れ太刀の道なり。我れ若年より、兵法の道に心懸けて、劍術一通りの事に、手を枯らし、身を枯らし、色々様々の心

ろに成り、他の流々をも、尋ね見るに、或は口にて云ひカコツケ、或は手にてコマカなる技をなし、人目に能き様に、見ると云ても、一つも實の心にあるへからず。勿論、カヤウの事を仕習らひても、身を利せ、心を利せ、附る事と、思へども、皆な是れ、劍道の病ひとなりて、後々迄も失せ難くして、兵法の直道は、世に朽ちて、道のすたる基ひなり。劍術の實の道になつて、敵と戦ひ、勝つこと、此れ聊かも替る事あるへからず。我が兵法の智力を得て、直なる所を行ふに於ては、勝事に疑ひあるへからざる者也。新免武藏、正保二年五月十二日、寺尾驗亟殿參、とあり、以て太刀の生死を鑑むへし。

第二十章 劍術試合審判

審判定義は、第一篇第十五章に掲ぐ、就て見るへし。得勝點數表は左の如し

面	十點	九點
(真向又は左右側面若しくは切り返し打込みの類)	(稍々軽く又は反り仰く者の面金に深く打ち込みたる類)	
兵字	八點	七點
(延ひ押へ引き又は切り返へし打の類)	(稍々輕きもの類)	
小手		

胴	(左右飛び込み又は離れ際引き) (胸若しくは切り返へし胴の類)	六點	(稍々軽く又幾分か胴) の垂れに觸れる類)	五點
面の垂れ	(双手又は片手にて) 撃突するもの類)	四點	(稍々軽く又は面金) に觸れる者の類)	三點
精眼 小手	(巻き込み又は) (掠め撃の類)	二點	(稍々軽く又は中柄若しく) は拳を撃らたる者の類)	一點

一 相打ち、各自へ各點數を附與すへし。又た打消して、共に點數を附與せざることもあるへし。術語に、劍木用捨と云ふことあり、是れ、木刀にては、勝ちても、眞劍にて思ひの外なる事あり。又た木刀にて、不出來なるも、眞劍にては存の外なる事あり。例せば、敵は兵字に構へ、我は精眼に構へ、先を懸けて敵を突くに、敵の胸は突き貫くも、敵の太刀は我か眞向へ來るへし。面と胸との相打は、面を打たれたる者の負けなり。又た、敵の片手を打つも、敵は他の片手にて、我か左側面へ、打込み來るへし。縦どひ、前後あるにもせよ、突くと、撃つと、手ど、頭まとは、孰れか急所なるを、必らずや後れたりども、頭まを撃つに如かず、之を點數表に照らすも亦た然

り。故に面を取る事に心懸くへし。

二 面は、面金に觸るゝも、刀尖布圍の上に、達すれば充分なりとす。竹刀越しに打込みたるるときも、亦た可なりとす。但し、確實に受け留められたるときは、勿論無効たるへし。

術語に、茶巾搾りと云ふ、是れ手元低く、刀尖高く、眉間に打込むものとす。然るに、面の布圍の上に迄も、打込むへしと云ふ理由は、眞劍に臨んで、爲し難き所を、平生に於て爲し慣るれば、眞劍に臨み、爲し易きを以てなり。即ち眞劍は、額を割けは充分なるも、平生は深く打込めと云ひ、眞劍は胸を突くへきも、平生は胸より高くして、突きにくき面の垂れを突くと云ひ、眞劍は研り易き、精眼構への腕を斬るへきも、平生は兵字構への腕を、嘉みする等、總へて打ちは、眞劍に比して、打ち易き所を打たす。突きも、突き易き所を突かす。修業するものなり。之を知らずして、長柄竹刀者は、強て面布圍の上へ、打込まんとするか故に、華法にも諸爪を上へ向け、恰も三寶を神棚に捧げる如く、吹矢を口邊へ擡げる如く、柄頭を額上へ上げて、敵の

面金に觸るゝを避け、摺り込み、決して做ふへからず。但た、熟練に依て、眞直く延ひ打込むは、格別なりとす。基本演習に熟すれば、自然に茲に至るへし。

三、掛け聲を放ち、引き上げたる場合ひは、假令ひ軽くも、跡打ちすへからず。

四、平ら打ち、峯打ちは、居着して臂を伸ばさる者と、右拳より左拳を高く上げ、拳の逆回転する技辯者に多し、一々眞剣に比して審判すへし。

五、劍術の試合ひは、決勝點數を貳十點と規定す。即ち二十點に先登するを、以て優勝とす。但し平日普通の勝負法に依り、三本若しくは五本勝負を行ふとも、點數の中に、此の點數を記入するものとす。蓋し、面なり、胴なり、數字を見て、了然たれどなり。

第二十一章 野試合規典

夫れ、野試合ひは、武技を野外へ演習し、短兵接戰術を講究する所以にして、平常の演習に比すれば、層、一層、實戰に適切なりとは、第六章に於て述べたり。今茲に其の規典を掲ぐ。

凡ろ、野試合ひの綱領は、軍令に基準すへし。夫れ、軍の主とする所ろは、戰闘なり。術の要とする所ろは、制勝なり、故に、百般の事は須らく實戰に擬すへし。但し實戰は、危急に處して、談笑平生の如くなるは、却て、大に餘勇を示して、以て、部下の特願心を惹くに、足るものなりと雖ども、平日の演習に於て、苟しくも談笑すれば、忽ち嚴戰に流れ、眞に迫らす、頗る軍紀に害あり故に務めて、紀律を嚴守し、失容難談すへからず。

因に實例を擧げんに、眞剣は、平日の反對に出る事、往々之れあり。未だ太刀を合はせざるに、赫怒し來る敵は、左迄に意とせざるも、微笑を含みたる敵は、凄まじく爲めに氣を呑まれ、自ら危うく思ひしに、他の助太刀を得て、漸く敵を斬り倒したりと、云ふ實話は、層々成辰の役に聞く所ろなり。又た、士君子は人を以て、言を廢せすとすれば、俠客の言も、採るべきは採て、以て、參考となすに妨げざるへし。左れば、近頃ろ、死して各新聞に傳ふる、清水の次郎長とあん、呼へる者は、壯年より、眞剣闘争、幾回なるを知るへからず、刀痕滿身一辨あるは、一目判然たる者なりしが、老後に人へ語て、

曰く、敵の強弱を試むるには、立合ひたる初めに、我か切先きにて、相手の切先きを動かし見よ、其の切先きの、固くして動かさるは、氣の上すりて、全身の力を腕に集めたる、臆病者なれば、之を切るは、苦もなければ、我か切先きの爛るゝに随ふて、動くは氣の落ち着きたる、強膽の者なれば、要心すへしと、戒しめたりと云ふ。前者の赫怒し來るは、氣の逆上したる者なり。後者の微笑し來るは、氣の沈着したる者なり。茲に剛愎自ら判然たりと雖ども、尙は俠客か、語に参照せと、益々、分明ならんとす。然り、平生は、殊に紀律を嚴守すへし。

編制

劍士は二軍に分つ之を源氏平家と號す但し其の親友を双方へ分配し朋黨の弊なきを要す而して一伍に伍長を置き二伍に什長を置き四什長の上に小隊長を置き四小隊長の上に中隊長を置く大隊聯隊準之

徽章

源氏は白旗とし平家は赤旗とす各一旅の軍旗を建て中軍たるを標示す統監及び審判官は紅白布を左上腕に纏ひ各部隊長は其の味方とする色布を片襟さに右肩に懸け戦兵は源氏白毬平家赤毬各面の上部に約す

始終試合

試合ひの始終は統監號笛を以て告知す各指揮官普く之を傳呼すへし戰開準備は一聲長く一聲短く戰開開始は二聲長く一聲短く戰開終決又は中止は三聲長く一聲短く號笛す若し砲を用ゆる場合ひは臨時に其の符號を定むへし

勝敗判決例

勝敗は各個脱毬者の多寡に依り且つ軍旗斬將等の數項に照らして判決す一に脱毬者の各個點數〇二に軍旗を倒される者は其軍の二分一の脱毬者に均しき敗となす〇三に首將を脱毬せしめられたる者は其の軍の三分一の脱毬者に均しき敗となす〇四に部隊長脱毬胸壁陥落は各々其の軍の四分一の脱毬者に均しき敗となす〇五に急射撃(記號を高等すべし)を被りたるを見認められ場合ひは其の軍の五分一の脱毬者に均しき敗となす〇六に斥候を擒とられたる者は其の軍の六分一の脱毬者に均しき敗となす〇七に竹刀及び道具を破損し戦ふへからざる者あれば其の幾人なるに拘はらず其の軍の七分一の脱毬者に均しき敗となす以上七項に當る者を初項より遞減し兩軍の勝敗を決す

有階者心得

統監は一般方畧及び特別方畧を與へ試合ひの始終を指揮す〇審判

官は各部隊に跟随し判決の記號をなす理務官之を筆記す○各部隊長は權限及び演習の目的を體認し以て其の任務を盡すへし○理務官は試合上の經過を筆記し統監講評の材料に供ふものとす○終りには各整列し敗將は旗を捲き悉く勝將へ捧呈すへし

第二十一章 當流劍法之形

(中古の陣太刀にて擬したる今の軍刀を用ゆるを可とす)

敵手武士各太刀を左手へ懸け登場口に並立し首座へ對し敬禮す(此時一同起立すへし)敵手は首座の左方へ武士は首座の右方へ就く敵手武士九尺以上を隔て、相對し各太刀を帯へ差しつゝ、蹲踞し左手は脛口へ右手は右膝へ置き體勢を整ひ氣當りつゝ、目體す

注意 我か眼は敵の眼に注ぐへし○二に氣は充滿し擊は稍々輕くすへし○三に太刀筋正しく茶巾搾りにし打込むと同時に曳又は矢曳と掛け聲をなすへし○四に太刀を上段に冠ふるには踏出し居る足の方へ太刀を轉旋すへし即ち右足を踏出し居れば太刀を右側後方へ轉旋すへし○五に歩法は體ど太刀と一致し跨り過ぎざる様にすへし

敵手武士互ひに右手拇食兩指の股を柄の下より矢筈に當る様に右肩を下げ右肘を寄せて

ストラリと抜き懸け刀尖四五寸位ひ鞘の内へ残りたるとき際疾く腰を捻引くと同時に左膝を後方へ引披らき右手を後へ廻はし鞘の釣り草の外より入れて鞘を右肩より脊に負ふ左手を添へ柄頭を握り立上りつゝ、右足を踏出し太刀を精眼に取り刀尖を右側後方へ轉旋して兩拳を上段に冠ふり兵字構へにす但し距離の遠近を見計らひ歩法を伸縮すへし

一本目 矢筈切合

互ひに兵字構へのまゝ、武士は左足を踏込みと同時に敵手の

右側面へ矢筈に切り込み○敵手は上段より矢筈に打下げて武士の太刀を打ち受留めつゝ、右足を引く○武士は刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込みと同時に敵手の左側面へ矢筈に切り込み○敵手は刀尖を左側後方へ轉旋し上段より矢筈に打下げて武士の太刀を打ち受留めつゝ、左足を引く○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し稍々一節を保ち左足を踏込みと同時に敵手の眞向へ眞直く切り込み稍々氣當りし餘ろに左足を引きつゝ、太刀を左八相に引揚る○敵手は刀尖を右側後方へ轉旋し兵字に構へたるまゝ、にし武士より眞直く切り込み來る途端に爲し得るだけ後方へ飛び退く乃ち基本演習の脱け面是れなり○互ひに徐々太刀を中段より卸ろして退却し元の位地を轉へて止まり彼我九尺許を見計らひ進止す終は

皆準之

二本目 垂柳打込

敵手武士同時に刀尖を右側後方へ轉旋して多少前進し兵字に構ゆ○武士は左足を踏込むと同時に敵手の右腕へ矢筈に打込む○敵手は基本演習第一教の第六舉動の如くし右足を引く○武士は刀尖を左側後方へ轉旋して右足を踏込むと同時に敵手の左腕へ矢筈に打込む○敵手は基本演習第一教の第七舉動の如くし左足を引く○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し眞直く延ひ打込み壁に觸れんとするとき右へ回はれし向きを變して兩手首を交叉し刀柄を腹下へ攤し刀尖を地に垂れ氣當りす○敵手は體當りを賺し避ける如く左足を左外へ遠く飛び移し右足を左足へ引寄せつゝ太刀を右腕へ沿へ武士の太刀を受留め復た前方へ左足を踏出し其の左足を軸にし右へ回はれしつゝ右足は左足の後方へ移し全く反對の地に入り替はる○互ひに太刀を下段へ卸ろし氣當りし元に復す

三本目 常山之蛇

敵手は中段より前方へ太刀を振出し懸けて刀尖を上げ兩拳は右肩の上を經過せしめ右足を引披らき半右向きをなし頭は正面にし太刀を後方へ斜傾

にしてト字形に構ゆ○武士は刀尖を低く地に垂れ左足をナヨツと進め右足を踏出すとき刀尖を敵手の胸部の高さに擡げ左足を踏出すとき尖を下げ右足を踏出すとき刀尖を敵手の胸部の高さに擡げる即ち長蛇の波上をウツリ往く心ろ持ちなり○敵手は武士の二三度目に刀尖を擡げるとき我か左足をナヨツと進めて右足を踏込むと同時に武士の擡げる刀尖を我か左方へ打拂ひつゝ體は左半向きし頭は正面にしなから上體を傾け刀尖を地に垂れ眼を武士の眼に注ぎ居る○武士は敵手に我か太刀を打拂はれたる業津美に刀尖を右側後方へ轉旋し深く左足を敵手の右側外へ飛び移し敵手の首へ切り懸ける擬勢をなす○敵手は武士に切られたるまゝ兩拳を轉回し左八相に構へ左足を踏込むと同時に武士の左足の内脛を強り拂ふ○武士は刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ飛び進みに飛び揚つて敵手の強り来る太刀の上へを飛び賺しつゝ右足を前にし敵手の左首へ切り懸ける擬勢をなす○敵手は武士の内脛を強り拂ひたるまゝ跡へ退きつゝ太刀を右八相へ取り稍々踵を上げて輕身浮體にす○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し左足を踏出し兵字に構ゆ○敵手は左足をナヨツと踏出し深く右足を踏込みつゝ稍々屈みて武士の左腕へ切り込む○武士は右足を

右外へ移し稍々左膝を屈の上へ刀尖は頭上より左肩を経て左腰へ垂下し我か左腕を防ぐ
 ○敵手は武士の左腕へ打込みたるまゝ爲し得る丈け後方へ飛び退き刀尖を地に垂れ引く
 ○武士は左腕を防ぎたる太刀を後方へ轉旋し左足を踏出し敵手の真向へ切り懸ると同時に
 右足にて蹴り懸ける○此の理由は率然應變を象とるものとす其の首を撃ては尾至る其
 の尾を撃ては首至る其の中を撃ては首尾俱に至る是れなり
 四本目 真劍相打 敵手は精眼に構へ左足をナヨッと踏出し右足を踏込むと同時
 時に武士の心窩に對し空に突き出す○武士は兵字に構へ左足を踏込むと同時に真下たへ
 敵手の太刀の峯を打ち落す○互ひに前方へ踏出し居る方の片側後方へ刀尖を轉旋し兵字
 に構ゆ○敵手は右足を踏込むと同時に武士の左腕へ切り付けける勢ひにて引き小手の如く
 其の太刀を引き落ちつゝ兩足を摺り引く○武士は右足を踏込むと同時に右片手にて敵手
 の真向へ切り付け左腕は切られたるまゝ左肩と共に引き披らきて右片手に釣り合ひを取
 り左半向きをなす○敵手は刀尖を右側後方へ轉旋し右足を引きつゝ右膝を地につき武士
 の右腕を薙る○武士は刀尖を右側後方へ轉旋し右足を引きなから敵手の真向へ切り付ける

心ろ持ちにて切り懸る○此の理由は真劍は間合ひを引き離れ易きものなるを以て踏込み
 踏込み偶拳を以て撃つへき所以を示すに在り○武士は刀尖を左側後方へ轉旋し稍々一節
 を保ち右足を踏込むと同時に真直く切り結ふ○敵手は刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ立ち
 上りて左足を引くと同時に切り結ふ

五本目 手心之鎧

敵手武士互ひに兵字に構へ各右足を踏出し武士は右足を軸

にし敵手は左足を軸にし切り結ひ一離一合を瞬速にす猶は基本演習第四教互打込の如し
 故に手續きを畧す○終りに敵手は多少退却し而して武士と互ひに太刀を中段に取り太刀
 先きを合せ武士は徐ろに寛かに兩手を高く額上へ上げて刀刃を上へ向け刀尖を左方へ横
 たへ左手は拇指と中指を輪形にし人指を伸ばし兩手は稍々交叉し左足を右足へ揃へ泰陽
 の體にて兩手を大輪形に右左りへ開く○敵手は兩手を交叉し胸部へ寄せ刀刃を下へ向け
 る様にし地下へ開く○此の理由は天地清濁陰陽を象とる少しくも意味に通せずんは解せ
 ざるへし○復た互ひに太刀を中段に取り徐々退却し元の位地にて太刀を血ぶりし太刀を
 室に納め初め如く躊躇し互ひに目離し右手にて鞘を脱ぎ左手へ移し徐ろに立ち上り初め

登場せし如くす○此の血ぶりとは両手の掌裡にて太刀を轉回せしむるを云ふ而して太刀を室に納むるには右手を逆にし柄を握り刀尖を垂れ左手は鯉口を握り其の拇食の指頭に太刀の峯を受け鯉口へ導きつゝ鯉口へ注目せず納め右掌にて柄頭を押ゆ

古流十之形(太き後ろの
機ひを用ゆ)

一本目 龍尾

敵手武士共に當流劍法之形の如く目禮し徐ろに立上りつゝ武士は右足を踏出し敵手は左足を引き各左半向きをなし兩拳は腹下へ擁し刀尖は前方へ垂れ氣當す各太刀を右側後方へ轉旋し武士は左足を踏込み敵手は右足を引き互ひに×字形に切り結び續て各左側後方へ轉旋し武士は右足を踏込み敵手は左足を引き互ひに×字形に切り結び武士は太刀を右側後方へ轉旋し左足を右足の一線上に進め稍々敵手を眼下に見る敵手は右足を左足の一線上に引き刀尖を右方へ垂れ左拳の小指の方を半上へ向け稍々膝を披らき屈めて低くなり機を見て刀尖を己れの左方へ振上げつゝ兩手首の内側と内側を合はせる様に交叉したるまゝ太刀を横たゆ武士は真直ぐ之を打つ是れ基本演習第四教なり是れより基本演習第四教の第一舉動より第七舉動までを行ふ以下皆準之

一本目 鐵破

敵手は真向きに衝精眼に構ゆ武士は兵字に構ゆ敵手は刀尖を武士の眉間の高さへ上げ進み往く武士は敵手の進み來るを待て上段より稍々左方へ斜めに敵手の太刀先きを打拂ひつゝ拳を轉回し刃を敵手に向けて柄を左腰へ寄せ刀尖は後方へ伸べ左足を踏込むと同時に敵手の右腕へ切り付る敵手は兩拳を頭上へ冠ぶりながら刀尖を垂れて右腕を防ぎ徐ろに一本目の終りの如く敵手武士共に終りは一本目の通りすへし

二本目 風

敵手は體を右き半バ向きにし兩手は兩膝の如く左右へ披らき右手にて太刀を握り之を大きく頭まの上を経て其の切先きの峯を左手へ受け右拳を高くす即ち吹き卸ろしの形容なり武士は兵字に構へたるまゝ進みて稍々右方より左下へ空に薙き拂ひつゝ拳を轉回し刃を敵手に向けて柄を左腰へ寄せ刀尖は後方へ垂れる此の時に敵手は刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込むと同時に左手を添へ兩手にて切り込む武士は敵手の切込み來る切先きを己れの右方へ打拂ひ兵字に構ゆ敵手は打拂ひ落されたるまゝ一本目の如く太刀を横たへ直に前記の如く切り返へしを行ふ

四本目 早船

敵手は右き半は向きにし太刀をト字形に構へ多少輪形に刀尖を滑

き回はし居る武士は兵字に構へ太刀先きを地に垂れ下段に構へんとす敵手は右足を踏込みと同時に真向へ打込み武士は基本演習第三教の如くし直ちに切り返へしを行ふ

五本目 氣當 敵手は左半向きにし柄を目の上通りに擡げ刀尖を武士の眼に注ぎ霞みの構へにて左踵を右趾へ進めて右足を伸はず歩法に取り進み往く武士は兵字に構へ待て敵手の突き込み来る太刀先きの平らを拍て己れの右方へ拂ひ除けつゝ左足を左側前方へ飛び移し右足を引く敵手も武士に拍ち拂はれたるまゝ刀尖を垂れて入り替り右半向きし左掌は峯に沿ひ伸はし柄を右腰へ取り攢く體をなし右足を引披らく武士は兵字に構へたるまゝ左膝を上げて稍々上體を反り一節を保ち右足を踏込みと同時に真向へ打込み敵手は攢く體のまゝ捧けて受留む敵手は左手を柄頭へ戻して精眼に構へ武士は太刀右側後方へ轉旋し兵字に構へ互ひに突け打てと云ふ氣位ひを取て相迫る敵手次第々々に跡退りつゝ元の地位に復し左膝を地につき刀尖を地に垂れる武士は切り聲掛けて右足を上げて其の右足を敵手の柄の邊へ踏込み切り落さんとす敵手降参りと叫ぶ武士少しく寛ろく敵手立上り一本目の如く太刀を横たゆ武士之を打つ是れより隨意切り返へしとなる終り

には當流劍法之形の終の如くすへし

附 劍 舞

惟ふに諸流の形なる者は、概ね美觀的に組織せられ、華法の譚りを免れず。寧ろ之を劍法と稱せず、劍舞となさば、却て、眞正の劍法、往々其の劍舞中に存在するを見て、重きを之れに置かんとす。蓋し、劍舞は、遊戯に屬すと雖ども亦た、武夫の餘興なり。特に精神を込めて、一舉一動、苟しくも規矩を離れず、枯霜烈日、假りにも媚ひを買はず、泰陽として之を動ひれば、我が氣位ひを練り、體勢を整ひ、歩法を爛らひ、太刀筋を正ふし、所謂體と太刀と一致に連れる、本領を習得するに、補益あるのみならず、人をして覺へす、肅として襟を正さしむるに足るへし。亦た以て、尙武の一端たらずんばあらず。元來、劍術は素振りせざるへからざること、猶は槍術の素振り、射術の素矯めよ於けるか如し。未だ素振りせずして、劍術に達し、素捷させずして槍術に熟し、素矯めせずして、射術に長したる者なかるへし。然り而して、素振りの必要を知ると雖ども、倦飽し易き恐れあり。劍舞の如きは、人々樂んで而して倦飽すること

どなく、知らず識らず熟練し、熟練するに従ひ、得々快樂を増加して、以て、素振り
を善くするは、自然の勢ひなり。是に於て或時に擬するに、劍法之形を以てし、以て
劍法の初歩に供すと云ふ。

文能治内武威外

文はと云ふとき徐かに左足を踏出すと同時に右手を襟の内へ摺
り入れる○能くと云ふとき右足を踏出し左手にて左襟を摺りて帯に至る○内をと云ふ
とき稍々兩膝を披らさつゝ、兩手を兩乳の邊へ摺り上げる○治しと云ふとき腰を割り兩
手にて腰を矢筈に押へる○武はと云ふとき右手にて左肩衣を捲き上げつゝ、左手は鯉口
を握る○外をと云ふとき左肩より右手の掌を外へ向け右腰の方へ引き回はしつゝ、腰を
割り右足を上げ右掌を順に戻し摺り居る○威すと云ふとき力足を踏む

兩道相持四海泰

兩と云ふとき兩肘を張りて腰を押へ右肩と共に右足を引く○道
と云ふとき左肩と共に左足を引く○相と云ふとき兩手を兩脇へ摺り上げ踵を浮へ○持
しと云ふとき腰を割り据へて兩手を兩腰へ押し下ける○四海と云ふとき右手の甲を上
にし左肩より右肩の後方へ波狀を形容しつゝ、右足を引く○泰しと云ふとき左手の甲を

上にし右肩より左肩の後方へ靜かに水平に引回はしつゝ、右手は腰へ付け其の肘を張り
釣り合ひを取て左足を引く

吾邦尚武冠萬國

吾が邦のど云ふとき左手は鯉口を握り拊指を錫に懸けて左足
を踏込ひと同時に右手の人指を伸ばし高く上げ天を指さし眼を之れに注ぐ○尙武と云
ふとき右足を踏込ひと同時に右拳を固めて活潑に吾か胸を打つ○萬國にと云ふ時吾か
胸通りの前方へ右手を伸出し五大洲を數へ摺折る○冠たりと云ふとき右足を引き右手
は右腰へ托して其の肘を張り左手は鯉口を握りたるまゝ、天涯を仰視す

日本刀利天下最

日本刀の利と云ふとき柄に眼を注ぐ○天下の最と云ふとき復
た天涯を仰視し稍々後ろへ反る

誰道劍是一人敵

誰れか道と云ふとき意外なる形容にて右足を踏込ひと同時
に右手を柄に懸けつゝ、上體を傾け左手にて刀刃を下へ捻ち向る○劍は是れと云ふとき
半分位ひ抜き出す尤も逆抜きの法に依る○一人の敵と云ふとき刀を室に納め右手にて
柄頭を押ゆ

畢竟此語屬冥頑

畢竟此の語と云ふとき右足は左踵を経て後方へ踏移し其の膝をつく○冥頑に屬すと云ふとき腕組みし上體を欹傾し愚鈍の狀を示す

請看高祖提三尺

請看よと云ふとき立上りつゝ右足を踏込み右手を打伸をし指さしつゝ左手は鞘を順に戻し鯉口を握る○高祖と云ふとき左手は鯉口を握りたるまゝ其の拳の第二節を鳩尾の左邊へあつる様に抱込みと同時に右手を柄に懸く即ち及ばぬの耳を横に研る方向に向ける○三尺と云ふとき徐々拔出しつゝ切先を半分許鞘の内へ残りたるとき左手にて鞘を拂ひ真直く左足を踏込み鞘の振り出さる様に右臂を打伸をしつゝ左手は憂と音する様に柄頭を拍ち握る續て太刀を左側後方へ轉旋し右足を踏込みつゝ手元低く刀尖高く切り落す○提げと云ふとき精眼に構へ從容たるへし

哉定區夏及夷蠻

區夏を哉定しと云ふとき太刀を右側後方へ轉旋し兵字を構へ稍々一節を保つ○夷蠻に及ふと云ふとき左足を踏込みと同時に手元低く刀尖高く切込み泰陽として武徳を表示す(軍刀ならば此の間に鞘を右肩より脊に負ふ)

劍乎々々君須學

劍乎々々と云ふとき右手の兩指にて再度柄を叩きて且つ其の

叩きたるまゝに他の二指も添へて柄を握り左手は放ちて其の右拳を轉回し更に左手の掌上に拳を受けて左足を右足へ引き太刀は帶通りへ横たへる○君須らく學ふへしと云ふとき新田義貞か海神に祈る如く恭しく太刀を額前へ捧げ瞑目す

護身鎮國比華嶽

護身と云ふとき捧げ居る柄を右手の小指より締り握りて左手は拳を放ち右拳を轉回しつゝ右腋へ拳を捲き込み刀の峯を脊に接し柄頭を下け右足を引き右半向きす○鎮國と云ふとき自若として多少天涯を仰視す○華嶽にと云ふとき柄頭と左手の人指とを額上へ高く伸べし突き合せて富士山を形ち造る○比すと云ふとき富士山を形容したるまゝ右足を左足の後方へ移し趾蹠のみ地につき右膝をつきつゝ富士山の裙を形ち造り稍々仰視す

潜龍躍生掌

潜龍と云ふとき左手にて柄頭を握り右手を順に握り替へる○躍ると云ふとき右膝を踏み立て出すと同時に刀刃を下に向けたるまゝ揃ひ上げに切る劍法にて切り出す○掌より生すと云ふとき太刀を右側後方へ轉旋しつゝ左足を踏込み立つと同時に頭上より切り込み稍々腰を削り据へる

流星閃發握

流星と云ふとき右片手のみはて太刀を握り高く頭上を經過せしめ右股より離して後方へ横たゆ○閃きてと云ふとき少しく刀尖を動かす○握より發すと云ふとき右足を踏込むと同時に兩手にて切り込み稍々腰を割り据へる

魑魅魍魎皆逃避

魑魅魍魎と云ふとき右片手にて柄を右腰の邊へ引付け左手にて左袴を取り鐘馗か赤鬼を壓倒する勢ひに擬しつゝ兩足の趾踵を軸にし左へ回はれし全く向きを變す○皆な逃避すと云ふとき右足を踏込むと同時に突く

爽氣拂空清如濯

爽氣と云ふとき右拳を左肩へ寄せ刀尖を垂直に立つ○空をと云ふとき右足を軸にし左足を踏込むと同時に及を右へ向け目通りに切り伸をす○拂ひと云ふとき左足を軸にし右へ回はれし全く向きを正面へ復し右手の四指の爪を上に向ける○清きこと濯ふ如しと云ふとき左足を引き左片手に柄を持ち右兩指にて刀を拭ふ

君不聞劍之動靜有陰陽

君聞かすやと云ふとき右手を左乳の邊へ引寄せて直に打伸はし眼を其の人指に注ぐ○劍之動靜と云ふとき右手の人指にて刀側を叩く○陰と云ふとき兩手にて柄を高く額上へ擡げ及を上へ向け刀尖を左へ傾け左手は拇指と中

指を輪形に人指を伸はし兩手を交叉し左足を右足へ揃へる陰は結ふ形ぢなればなり○陽ありと云ふとき頭上より左右へ大輪形に開き兩拳は腰より離して帶通り迄垂下し氣當りす陽は開く形ぢなればなり

陰陽各々提二綱

陰と云ふとき圓相に開き居る兩拳を心窩の邊へ寄せ刀尖は左肩の方へ左手は人指を伸はしたるまゝ柄の内面へ接し交叉す陽の反對を示す○陽と云ふとき兩手を地下の方へ向け左右均しく開き前の陽の如く帶通り迄上げ氣當りす是れは武の蘊奥にして禪の深意も亦た加味す○各々三綱をと云ふとき左足を踏出し右片手にて太刀を半輪形に高く頭上へ上げ横たへて右足を左足へ揃へ左手は人指を伸はし腰より離して帶通り迄垂下し氣當りす○提ぐと云ふとき小早く左足を踏出すと同時に頭上よ、右腰の邊へ卸ろし右拳の甲を右股へ接する位ひにし左手を柄頭へ添へ體は右向きし頭は正面にしト字形に構ゆ

陰曰背擊掠與刺

陰に曰くと云ふときト字形よりチヨツと細く振り出し精眼に構へつゝ左足を引く○背擊と云ふとき右拳を左肩の邊へ引上げ稍々刀尖を立てゝ右拳

の甲を外へ向ける様にし刀の峯にて敵の面を打つ形容をなし打つと同時に右足を前にしたるまゝ摺り込むは是れ刀の背にて撃つへからざるは辨を待たず然るに之を爲すは陰の陰たる所以にして擯斥する所以なり○掠と云ふとき背撃し居る太刀を引卸ろしつゝ拳を戻しつゝ敵の精眼に構へたる小手をナヨツと掠め打ちし兩足を跡へ摺り引く○刺と云ふとき兩手にて敵の咽喉を突く心持ちにて突くと同時に右足を前にしたるまゝ摺り込むは是れ掠と云ひ刺と云ひ共に陰たることは本篇を一通讀せば明了ならん

陽曰左右又中央

陽に曰くと云ふとき泰陽として勝の象を顯はし徐かに刀尖を右側後方へ轉旋し兵字に構ゆ○左と云ふとき左足を踏込むと同時に敵の右側面へ矢筈に打込む心持ちにて切り込む○右と云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ右足を踏込むと同時に敵の左側面へ矢筈に打込む心持ちにて切り込む○又た中央と云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し稍々一節を保ち左足を踏込むと同時に兵字構へより眞直く敵の眞向へ打込む心持ちにて切り込む而して左足を引きつゝ太刀を左八相へ引上げ構ゆ

六綱錯綜遽變化

六綱と云ふとき左八相より刀尖を右側後方へ轉旋して右足を

引き稍々刀尖を頭上へ立つ○錯綜と云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋して左足を引き稍々刀尖を頭上へ立つ○遽かに變化すと云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋しつゝ左足を前方に飛び移し其の左足を軸にし右へ回られし右足を左踵の後方へ移し全く背面へ向き兩手首を交叉し柄を腹下へ擁し刀尖を垂れ續て左足を引きつゝ左向きし頭は正面にし兩拳を轉回し柄を腹下へ擁し刀尖を垂れる

千闘萬格不可量

千闘と云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し左足を踏込むと同時に敵の右側面へ矢筈に打込む心持ちにて切り込む○萬格と云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋し右足を踏込むと同時に敵の左側面へ矢筈に打込む心持ちにて切り込む○量るへからすと云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し左足を踏込むと同時に敵の右側面へ矢筈に打込む心持ちにて切り込み其の左足を軸にし右へ回られしつゝ右足を左足の後方へ移し正面へ向きを復しつゝ兩手首を交叉し柄を腹下へ擁し刀尖を垂れ氣當りす

一刀疾電再刀急霰

一刀電より疾しと云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋し眞直く切り込むと同時に右足を踏込む○再刀霰より急と云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋し左

足を踏込みと同時に真直く切り込む

三刀復四刀

三刀と云ふとき一刀疾電に同じ○復た四刀と云ふとき再刀に同じ

刀々應機變

刀と云ふとき右足を右外へ移して左足を引くと同時に刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ敵の左側面へ矢筈に打込む心持ちにて切り伸をす○刀と云ふとき左足を左外へ移して右足を引くと同時に刀尖と右側後方へ轉旋しつゝ敵の右側面へ矢筈に打込む心持ちにて切り伸をす○機に應してと云ふとき頭は正面にし體は右向きにし其の右向きしたるまゝ右足を右の方へ移して左足を右足へ引寄せつゝ兩手を交叉する様に柄を吾か自通りへ擡げ刀尖を敵の眼に注ぐ心持ちにて霞む○變すと云ふとき刀尖を右側後方へ轉旋しつゝ兩踵を浮へ軀幹を左へ回られに捻られは左足の後脚と右足の前脛と交叉し兩足の外踝を向き合せると同時に刀尖は頭上より前方へ打込む勢ひにて左拳は左乳の下邊へ右拳は右乳の上邊に接する様に柄を胸へ抱き込む是れ扇要の體と云ひ八寸の延曲と云ひ由來ある形なり(眞影流小笠原金左衛門時源長治唐に入り張其が戈之巻を得て歸朝し元和年に待持流大藏人に之を以て勝らしと云ひ傳ふ)

格長縮斫腋

格してと云ふとき扇要の體のまゝにて刀尖を前方へ突き出す格は間

合ひを云ふ○長くは縮んで腋を斫れと云ふとき突き出し居る刀尖を右側後方へ轉旋しつゝ扇要の體を捻り戻しつゝ屈みて敵の右胸を斫る

讓短伸割額

讓つてと云ふとき屈みたるまゝ爲し得る丈け鳥の横飛ひに飛退く○短くばと云ふとき刀尖を左側後方へ轉旋しつゝ立上り兵字に構ゆ○伸びて額を割けと云ふとき左足をチャット進め右足を深く踏込みと同時に敵の眞向へ切り込む

不問刀利鈍

刀の利鈍を問はずと云ふとき兩腕を寛かにし刀尖を垂れ柄を腹下へ引き寄せつゝ刀身に注目す

唯審刀順逆

唯た刀のと云ふとき右足を引き復た左足を引き太刀扱法の通り血振りす○順逆をと云ふとき右手を逆にし柄を握り刀尖を垂れ左方へ回はしつゝ左手は拇食兩指頭にて太刀の峯を鯉口へ導きつゝ徐ろに注目せず室に納む○審ひらかにすと云ふとき右掌にて柄頭を拍ち押ゆ

嗚呼勝負機在此不在彼

嗚呼と云ふとき左足を踏込み右手にて左肩衣を捲きつゝ左手は拇指を鐙に懸けて握る○勝負の機と云ふとき右手を右方へ打伸をし指さす

○此に在りと云ふとき右拳にて活撥に胸を打つ○彼れに在らすと云ふとき復た右手を伸す

彼此須見非乎是

彼れ此れ須らく見るへしと云ふとき右足を踏出しつゝ右手を額上に上げ透かし見る形容をなす○非か是かと云ふとき兩腕を組み左足を右足へ揃へる

一團浩氣能不餒

一團の浩氣と云ふとき兩手を徐ろに高く頭上へ伸はして左右へ開き大輪形を畫く○能く餒へすと云ふとき兩手にて兩腰を強く揉み押ゆ

雖千萬人吾往矣

千萬人と雖どもと云ふとき左手は拇指を髻に懸けて握り右手は右肩衣を捲き更に右の袴を捲き上げ○吾れと云ふとき左足を高く踏込み腰を割る○往くと云ふとき右足を高く踏込み腰を割る○矣と云ふとき左足を高く踏込み腰を割る而して左足より跡退り徐に去る曾子か襄に謂て曰く子は勇を好むか吾れ嘗て大勇を夫子に聞く自反して而して縮チヂムならずんは禍寛博と雖ども吾れ懼れさらんや自反して而して縮チヂムは千萬人と雖ども吾れ往くと縮は直なり往は往て敵するの謂ひなり



顯理古楠氏劔搏兩道修練之圖

第三篇 振氣流練體柔術

第一章 やわらの體意

夫れ、大極動ひて而して陽を生し。靜にして而して陰を生す。陰陽源是れ一氣なり。全く其の一氣を得る者は人なり、故に知覺運動至らざる所ろなし。然りと雖ども人生、學はずんば知らず、習はずんば至らず、知らず至らずを、勇ありと雖ども、亦た成功甚た難し。是れ、武教の由て起る所以なり。凡そ、やわらは虚弱を轉して而して強靱と爲し、強靱を轉して而して剛毅と爲し、剛毅を轉して而して始めてやわらと稱す。やわらは、毅然として而して萬化に應ずるものなり。初め、形を以て技を教へ、技を以て體を練り、體を以て氣を修め、氣を以て勇を養ふ、氣充つれば剛ふ、氣奪はるれば柔る、故に斯の勇を待みて、以て敵に當る者は、勝權を機先に握れり。夫れ善く戦ふ者は、利を見て失はず、時に遇ふて疑はず、英雄神速の機、深く思はずんばあらざるなり。所謂形なるものは、制勝の氣、懸待の度、奇正の變、應用の術、壹是皆な、収めて形の中に在り。是れ

即ち當流は、形を以て主とする所以なり。

凡そ、心氣力一致すれば、隨機應變自在なり。而して理氣自然の妙合を要す。水能く大木を浮ぶと雖ども、細石を浮ぶる能はず。風能く堅木を折ると雖ども、柳枝を損する能はず。是れ、柔克く剛を制する所以なり。天下の至柔は、天下の至堅を馳騁すと云へるも、味ひ來れば、萬物の精理、悉く我かやわらの體意に外ならざるなり。

第二章 練體柔術の辨

古來、漢文に認めたる傳書には、劍道柔道並ひに之を稱す。而して兼て道義を意味する場合は、柔道と云ひ、單に技藝を指稱する場合は、柔術と云へり。故に諸流を通して、柔道と云ふへし。且つ最古の卷物には、やわらど書きたるを以て、復たやわらども稱すへきなり。然るに當流は、特に練體柔術と稱す。是れ當流は、教範第一篇に於て武道を叙し、其の第二篇に於て短柄劍術を編し、其の第三篇に於て練體柔術を緝す、以て道術を區分せしのみならず、他に混するの、屑きよしとせざるもの存す。或者業已に柔道を以て、流名の如く唱へるあり、又は、漢の光武は、吾れ柔道を以て、天下を治ひて開

へるあり。若し此れ等の語意を取て、柔術の應用に据へ、以て治國平天下を談せんか、是れ牽強附會のみ。物の極致を云へは、戲技遊藝の末と雖ども、尤らしき理窟なきはあらず。然れども其の實は戲謔なり、偶々之を寓言す、知識の度よ於て、之を妄信する程の幼稚に向ては、或は壯語とせざるにあらざるも、牽強附會の結果は、必らず陰陽五行など、云ふ、模型的の動作に陥るにあらざれば、能狂言に類する所作に流るゝものとす。彼のミユース(古代十二人の處女)が、奏樂洋々の中に舞踏し、或は合し、或は離れ、或は進み、或は退き、其の輕跳なる調子に依て、巧みに衝突を避ける所を、觀物として興なしとせず、運動として益なしとせず、然れども斯の如きは、堂々たる武藝として、苟しくも爲すへき業にあらざるなり。

夫れ世には似て、而して非なるものあり、鄭聲の雅樂に於ける、輕佻の輕快に於ける、是れなり。教範第二篇に、劍客の弊を擧げて、騎將軍と曲馬師を比較せしが、奈何に騎將軍と雖も亦た、頑然武骨のみなるにあらす、御法の輕快なりと云ふは、馬術上の稱譽に用ゆる定語たり。我か練體柔術に於ても、動作の輕快なるは、素より稱譽する所らな

り。其の輕快なる調子の内に、誠あれば、外に顯はるゝものなくんはあらず。而して當に其の顯はるへきものは、如何なるものなるへき歟、今ま口に辨明すへからず、筆に形容すへからず、左れば彼の琵琶は、何よか爲めに、士人の好尚する所となるか、彼の鄭聲は、何にか爲めに男子の擯斥する所となるか、茲に考、一考し來れば、均しく調子と云ふ、調子の内に、判然區別する所あるを知るへし。乃ち動作の輕快なると、輕佻なるとの、彼我を嚴界して、紛亂すへからざる所以を諒せん。

抑々武藝は、吾人の精神を鍛鍊する所以のものなるを以て、道場に入る毎に、氣分を健淬し、剛氣奮發、以て技倆を開はすに、眞の敵に打克つと云ふ、觀念を終始一貫して、而して道藝相兼ね、徳才相備へ、以て武道の蘊奥を究めば、縦合ひ疊の上には、左迄の喝采を得ざるも、庶幾くを一旦緩急に應むに及びて、必勝の得あらん。然るに世間は、往々ミュージスに類するにあらざれば、角技者流のみ、皆な以て本領を得ざるなり。是に於て當流は、特に練體柔術と稱す。蓋し彼れ輩とは、其の嚮ふ所を異にす、隨て其の名分を正さずんはあらずるなり。

元來やわらは、賢良なる爲政家とし、勇強なる保護官とし、治者顯達の間に行はれ、高尚特立の目的を有せしものなりと雖ども、幕政の末路に當りては、被治者の手に墜ち、遂に社會に地位ある者は、稍々之を學ぶを耻るゝ至らしめたりき。其の因は、澆季の世に伴ふと雖ども、第一に價値もなき活法を行ふと云ひ、賤業がましき折骨挫傷を治すと云ひ、次第々々に勿体を付けて、裁醫者の假面を装ふより、來ると謂はざるを得ず。慶長十年に陣元賛と云へる漢醫が、亂を遁れて、福野七郎右衛門磯貝次郎左衛門三浦與次右衛門等の浪人へ、拳法殺法活法整法の圖解を傳へて、江戸町道場(今其の圖解あり)之を行ひしより、次第々々に、之をやはらの本來に於ける、極意秘訣の如く、誤認せられしこそ柔術の不幸なれ。其の不幸に乗して、以て一は自慢の種となり、一は恐怖の端となり、斯道、未學の者は、畏れて之れに遠さかり、半熟の者は、誇りて殺活を擅まゝにする如く唱へ、遂に抱豚忘臭今日の有様とはなれり。然れども尙は幸ひに、遠國諸藩の間には、武士道に於ける練體柔術と稱するもの、短柄劍術に附屬して、行はれ來れり。即ち是れ當流の淵源也矣。

此の故に當流は、活法も知らず、整骨も知らず、捕繩も知らず、純粹なる武士道に於ける練體柔術の外は、絶へて何にも知らざるなり。顧ふに知らざるを明言するは、知らざるを以て榮譽とする、理由あつて存す。乃ち我か武士道に於ける練體柔術は、俗を離れて高尚簡潔にし、彼れ輩の臭味以外に、超然卓立するものたるを知るへし。尤も効もなき活法を空頼みに、咽喉を絞め合ひなどするは、生理學の發達せざる以前の舊夢なり。假死の境界に在る者は、背中二つ三つ叩くか、引起して氣を儘かにせよと、呼ぶ位ひにて蘇生すへし。何ぞ業々敷く活法など、云ふを要せん。又た咽喉に棒を横たへ、兩端に人を乗せるなどは、力持ち興行の類にして、我か堂々たる武士道に於ける、練體柔術の爲すへき業にあらざるなり。(こぶらかへりの如きも其の五指を捻れば極るものなるに勿體つけるこそおかしからずや)

東京に行はれる所の、天神眞揚流なるものは、多く接骨兼業にて、概ね人に是れ見よがしに、腰窓にし。安政年間に江戸於玉ヶ池に住せし、磯又右衛門と云へる者の末流なるへし。東京は火事の多くして、四肢を挫く者も隨て多く、其の挫きたる局部を引き伸はすに、柔術の體勢を以てすれば、便利なるに依り、此の社會に行はるゝものならん。

我輩は、柔術教授場挫骨治療所の標札を見る毎に、竦として以爲らく、此れと世人に、同一視せられて堪ざるものにあらずと。實に我か武士道に於ける、練體柔術は、彼れ等の臭味以外に、超然卓立せずんばあらずなり。

嘗て之を聞く、詩は、無形の書なり、書は、無言の詩なり、而して詩家と書家とは、相疎遠ならずと雖ども詩家と詩家とは、相親睦せず、書家と書家とは、相懇和せずと、是れ職敵の嫉惡にあらず、寧ろ見識の衝突と云ふへし。然らば、劍家と劍家の相下らず、柔家と柔家の相容れざるも、亦た明かなり。我は眞摯を主とすと云ひ、彼は輕佻を事とすと云ひ、彼我相排するは、止むを得ざるへし。蓋し虚心平懐に、之れが得失を比較するに違まわらず、否な虚心平懐に、比較すれば、比較するほど、我か先師の教を是認するは、當然の事理なりとす。故に他流の事は、冷淡に見聞するも、口論すへからず。他流の者は、瞰下に睥睨するも、試合ひすへからず。若し強ひて試合ひを望まば、眞劍勝負するのみ。是れ、當流古來の掟なり。斯く云は、頑固に流義立てすと云はん、流義立てして武夫立つへし。維新以後、流義立てする氣力を失ひしより、諸流混淆蕪雜の弊を蒙

り、規矩なく、機軸なく、勝負是れ事とするに至れり。故に當流は、他流仕合ひを嚴禁す。幕政の頃ろ關口澁川諸流が他流試合ひを禁せしは深かき旨ある哉矣。問ふやわらは、治者顯達の間に行はれしと云ふ、諸侯中、誰れか善く之れか温奥を究めしそ。

答ふ世に公刊せられ、人の普ねく知れる白川侯(樂善公)が、柔術を學ひしを抄して、貴問を満足せしめん。其れ公が、柔術の稽古日には、鈴木某必らず藩邸に來り、其の業を授くるを常とせり。然るに、一日鈴木は病と稱して來らず、門弟中、此の術に長したる某々二名をして、己れに代はらしめたり。當日の稽古には、二人替はる替はる、立合ひて遠慮會釋なく、公を投げ付け、起きも立たさしりければ、公は種々工夫を凝らし、再三立合ひたるも、毎回烈しく投げ付けられたり。元來、鈴木は立合ひ中に、彼れは悪しく、此れは無理なりと、一々教示しければ、公は、例に依り、二人に向ひ、質問を試みたるも、一言の答たも爲さず、唯た己れか技倆を逞ふするのみなれば、公は、日頃の業も氣合施し難く、頗る不興氣にて、其日の稽古は休みけり。二人は、さてこそ

師の言に的中したりと、心ろ窃かに笑を含みて退きたるか。公は、即時水野左内を召し、稽古場の顛末を落ちもなく語り、予か術の未熟なるか爲めとは云へ、餘りの事と思はるれば、此より鈴木の宅に赴き、同人に就て、親しく事の次第を尋問せんと欲すと云ひけるに、左内は大に驚ろき、君にして駕を枉げられなむ、鈴木に於ても迷惑すへし、臣先づ面會して、此事を問ひ質さんと、直ちに座を起ちたり。然るに公は、日頃の沈着なるにも似はず、左内の歸るを待たず、近臣數名を從へて、鈴木を訪はれたるに、門弟出て來り、折悪しく不在なるを告ぐ、公曰く予は先生に、而談せんか爲めに來れり、故に暫らく待合はさんと、座敷に通ひ待つこと、一時間許ならんかと思へる頃ろ、鈴木出て、恭しく座に着き、先づ茅屋に駕を枉げられたるを謝し、次に本日稽古に、門弟二人に代はらしめたるは、心中に思ふ仔細の在りてなり。其の理由を云へば、門弟中に理と法とに長して技に拙き者と、技に長けて理と法に短なる者どあり。然るに後者は、多く其の業を卒へるも、前者は概ね中途にして廢す。公の如きは即ち其の前者の一人にして、卒業の程も覺束なければ、故らに門弟二人に命して、手

強く懲らしめたるなり。公にして、此の業を卒へんと欲せば、今より一層術に長せんことに勉めざるへからずと、憚る所なく述べたるに、公の迷雲忽ちに散したるにや満面笑みを含まれ、先生の厚志に報ひんには、只た此の業を卒へるの、一あるのみと、深く謝して、歸邸し、夫れより専ら意を技術の研窮に用ひられたれば、其の業大ひに進み、遂に其の蘊奥を極むるに至れり。公も亦た、柔術は劍術に附屬せしめ、新たに傳授書をも、編輯したりと云ふ。之を以て柔術は劍術に附屬して、武國藩士の間に行はれし、事實明確なるへし。

其の他、大名小名諸侯伯も亦た躬行せざるにあらざるも、執持者流の事は、論するに足らざるのみならず、柔術は劍術に附屬せしものなるを以て、劍術に練達すと云へば、柔術は其の裡面に立て、表面には顯はれざるも、其の實は劍擲に兩達したるものと見て可なり。

柳生は劍術を以て稱すと雖ども、將軍に初謁するとき、伏兵不意に飛び付く、之を右へ抛け左へ倒して、矢叫火も荒ら巻く浪も何のその柔ら取る身は心ろ泰かにと口吟せし

と云ふ

却説、鈴木の所謂理と法とに長して技に拙き者と、技に長けて理と法に短なる者ありて、後者は多く其の業を卒へるも、前者は概ね中途にして廢すとば、我か教範第二篇に述へし、二十日熱心者の意義を詳悉すと謂ふへし。

元來、柔術は、理科にあらず、化學にあらず、要するに、理を後にし、業を先きにするへし、業に熟すれば理、自ら通す。若し之れに反せば、鈴木の所謂前者にして、概ね中途に廢せん。左れば術歌に、業藝は業を忘るそのひまに理のみ長して下手となりぬると云ひ、理は業の中にあるこそ實の理よ理業二つの物にてはなしと云ふ、玩味すへし。

第三章 體勢

夫れ、やわらの體勢は、小兒を模範とすへし。小兒は、思ひ無邪なり、常に小兒は、人の眼に對して物を云ふ、其の語氣も豪なり。而して常に腹力を充實せしめて、以て正しく立ち、以て鋭とく歩み、以て少しく踵を浮へ、以て大きく胸を開き、以て天然にやわ

らの體勢を保持す。此の故に小兒は、日々幾度となく、或は墜落し、或は轉倒し、而して打撲擦傷することなし。是れ小兒は、體勢善く整ひ、銳氣善く充ち、決心勇往眞に善く無念無想なるの致す所なり。

體勢、既に小兒を摸範す。中心も小兒の如く、無念無想ならざるへからず。中心の無念無想なるへきは、寧ろ體勢より必要なりとす。其の例を擧げ來れば、思ひ半ばに過ぎなん。夫れ、彼の醉漢を見よ、容體は崩れて、歩々蹣跚たりと雖も、絶へて心に怯怖する所なく、敢て物に抵抗する所なく、唯た自然の成り行きに、打ち任せるか故に、平常の人の誤ちて墜ちたり、之り倒れたりなどする者に比すれば、案外に挫傷せざるなり。

要するに終始腹力の、脱けざる様に注意すへし。演習中に往々氣絶する者あるは、失笑放言する際に於ける、虚に多し。是を以て、笑を洩らし、物を云ひ、或は外を見し、又は油断する等は、一切嚴禁す。是れ生理上の過失を驚防すると、武道上の尊嚴を保持するに、基つくものなり。

第四章 融和

夫れ、やわらは、必らず、やわらならざるへからず。故にやわらは、凝硬を融和し、有無相通して、以てやわらの本體を得るを專一とす。

苟しくも、肢體に、凝硬なる所あれば、夫れ丈け脆くして、枯木の如く、挫折し易し。術歌にやわらとは毅ふにしのふたへなり力身強きは弱くなりぬると、云へり。

乃ち柔らと稱す、剛は其の中に在り、猶は天と云へば、地は自ら其の下に在るか如し。然り柔剛強弱の別あるを知て、之を融和せずんばあらざるなり。

夫れ、強は枯木の如く、弱は軟草の如し、共に利用するに足らざるなり。剛も柔を以て和せされは、強に近し。柔も剛を以て翼けされは、弱に似たり。體意に所謂剛毅を轉して、始めて柔らと稱する所以是れなり。之を例せば、彼の垂幕は、投磔を包み流して、破損せざるも、蒲帆車を孕むものは、小礫の爲めに、裂破せらるゝか如し。是れ正に力身強きは弱くなりぬると、云へる例たり。猶は名刀も剛一片にては、缺る憂ひあり、柔一片にては、曲る憂ひあり、柔剛兼ねて全し。

概して年長けてより、始めたる者は、剛一片にして、勝負にこそ、左迄の大差なくも、年少の時より、修練せし者の如く、圓滿自在なる能はさるなり。又た演習するにも、幼少の如く、虚心平氣なる能はず、種々の妄想を惹き、様々の癖目を起し、斯くせば臆したりと、笑はれん、斯くせば力なしと、譏られん、吾が體勢は正しきか、吾か姿勢は見苦しくはあらざる歟、など、顧慮して、以て益々力身張る、幾分か逆上の氣味あり。而して世の人々は、之れか罪を骨の堅きに歸す、骨は堅からざるへからず、唯た關節筋を柔軟ならしむる迄なり。然るに筋張つて、圓滑ならざるは逆上の致す所ろなり。故に年長けたる初心に對しては、取組まざる前に於て、懇ろに説明するにあらざれば、取組みたる上は、逆上して、襟なり、袖なり、擺めを擺みたるまゝ、握れば握りたるまゝ、容易に放さるるなり。之れに反して、年少の時より修業せし者は、其の圓滿自在なること、其の虚心平氣なること、逆も年長けてより、始めたる者の、稜骨不圓滑なるの、比にあらざるなり。然り人として、血性男子たる者、多少の神經なきを得ず、多少の凝硬なきを得ず、是に於て猫回へりするを要す。猫は、低きより投るも、高きより落すも、地線

上に接せんとする途端に、軟々回へり起るに依て、猫回へりど名つくど云ふ。又た一説には、猫疊と云へる疊の上に、回へるを以て名つけしとも云ふ。要するに、前へ回へり。後へ回へり、身體を地に打付けさる様に、回へり起るを云へり。此の猫回へりに、習熟するに隨ひ、體勢は必らず整ひ、凝硬は必らず融れ、身體は自ら圓滑に取扱ひ、仰倒するも、反動を取て後頂を打付ることなし。

反動は、仰倒するに幾分か片肩を下たにし、其の手臂を撓々に伸ばして、疊を打拍するを云ふ。反動の音響、返へて高きは、熟達せし証とす。

總へてやわらは、やわらにして、須らく吾が精神を沈着し、以て臆せず迫らす、寧ろ悠悠として、而して活氣を失はず、講習すへし、之を泰陽の體と稱せり。

第五章 中心

凡そ中心は、重力を有する物體を停立せしむるには、必らず鼎足三點以上地線上に支持する所ろなかるへからざると、同一の理にして、人の軀體を支持するは、兩足と兩手との働らきに依て、直立し、且つ歩行するものなるは、辨を待たずして、何人も知了する

所るなるへし。是れ兩足と兩手の働らきに依て、中心を取れとなり。故に、兩足と兩手の働らきに注意すへし。

惟ふに、流水の急流激湍の間に、停滯して、其の存在を保つは、渦紋の作用に由らざるはなし。獨樂の一足點を以て、直立するに、疾轉急廻の均衡に由らざるはなし。故に渦紋は、荷し、も範圍外に出れば、忽ち押し流され、獨樂は假りに一瞬間も停むれば、忽ち倒るへし。彼の圖らすも、石に蹶つて倒れんとする場合に於て、鳥に翼ある如き心を持ちて、ナヨンナヨンと釣り合ひを取るは、急流に於ける渦紋の如く、獨樂に於ける急廻の如き、働らきにして、其の働らきの或る範圍外に出て、又は一瞬間も停むれば、忽ち轉倒す。是に於て、ナヨンナヨンと釣り合ひを取らんと欲すれば、何處迄も、ナヨンナヨンと釣り合ひを取らざるへからざるなり。若し其のナヨンナヨンを停止すれば、氷上に迄へる如く、敵に倒るるへし、即ち其の中心を取り失へとなり。術歌に引は付け來らば送れ柔らとは波にた、よふうつろ舟哉と、訓して以て、敵より我を引かせ、我れは其の引がるゝに争はず、付き従ひ往くへし。敵より押し來らば、我れは之れに逆はず、

之を避け賺して、送り遣るへし。敵に引かるゝも、押さるゝも、倒さるゝも、投げらるゝも、紫廻轉起す、是れうつろ舟哉の意味なり。然れども亦た、此の應用は、輕身浮體に失して、泛虛に過ぎ、敵に釣り出されて、調子に乗せられ易し。調子に乗せられるも其の調子を何處迄も、取繼げは格別なれども、苟しくも調子を停止すれば、獨樂の如く倒され、假りにも跨がり過ぎる等、或る範圍外に出れば、渦紋の如く押し流さるへし。故に始めより、自衛沈體なるには若かず。自衛沈體は、輕身浮體の反にして、先づ角力構への如くし、其の構への固きことは、城郭の如く、其の腰を据へることは、盤石の如くす、是れ自衛沈體の體勢なり。

殊に自衛沈體と云ひ、輕身浮體と云ひ、極端に固執すへからず。之を要するに、當流は、自衛沈體を常體とし、輕身浮體を胸心とし、以て時機の宜きに應用す。

他流の事は、云ふに及はずと雖ども、他流は形を初心へ教へず、亂取りより始むるが故に、一種の約束對抗法ども、名づくへき仕向けにて、亂取りを習はしめ易き様に、乙に調子を取て、泛虛に導くは、止むを得ざるに出るものなり。然るに熟達して、尙ほ乙に

調子を取る、癖を存して動作輕佻にし、恰も彼のニユースが、踏舞の如く、踏あし、調あし、巧みに泛虚波状し、柔らの本領を得たるもの、如く思へる者あり、是れ柔らの本領を、誤解するにあらざれば、柔らの本領を、外形に衒ふと謂はすんはあらず。抑も亦た、敵は、釣り出して調子に乗せ、其の調子に乗るを待て、掬ひ倒し、掬ひ投げ、せんと欲するものなり。其の調子に乗せられ、氷上に這る如く倒れて、尙ほ柔らの本領を得たりと謂ふべき歟。

嗚呼我か流旨五首に、風に柳の訓あり、輕身浮體は、柔らの妙所なりとは雖ども、柔らの妙所は、胸中に収めて、時に圖らす應用するも、好んで常に之を外形に、衒ふべきものにあらず。蘇洵子も曰く、吾か短所は、吾れ抗して、之を暴はし、之をして疑はしめ。而して却て、吾が長所は、吾れ隠くして、之を養ひ、之をして其の中に墜いらしむ。是れ、長短を用ゆるの體なりと、善哉言乎。

第六章 懸待

凡そ、守るに攻勢を取り、攻むるに守勢を固くして、以て全勝を期すへし。敵の守る所

ろを攻るは、愚なり。敵の守らざる所ろに出るは、智なり。智善く右方を假摺して、左方を實摺すへく、虚實表裏の智畧なかるへからず。術歌に右ど見せ左を攻めよ虚々の實の虚々知れ虚々の實知れと云ふ、是れ意右側に在れば、眼は左側に注ぎ、我れ強なれば、弱を示し、若し我れにして弱ならんには、務めて強を張り、以て勝を制す。即ち時機に處するの韜畧に、富まざるへからず。

敵より懸り來らんとする萌しあれば、我は知らぬ似ねして、態ど其の狙ふ場所を明けて見せ、而して心ろにて、其の場所を閉塞すへし。是れ我知て知らぬふりなれば、敵も既に悟られたりと、悟つて、懸り來るを止むるものなり。若し強ひて懸り來らば、得たりと其の裏の手に出て、應し返へすのみ。然るに敵より懸り來らんとする、萌しあれば、慌て、我か明き場を閉ちんとし、驚ひて隙き間を、塞んとする調子に付け込んで、其の弱點を搏んど欲すものなれをなり。故に敵の狙ふ所ろは、明けて我か心ろにて閉塞し、敵の謀る所ろは、其の謀る所ろに就て謀りことを施さすんはあらざるなり。我れ今此の手を施せば、敵は必らず彼の手に涉るへし、彼の手に涉れば、我れは復た何

の手にて、勝を制せんと胸算し得るは、上達の地位に進みたるものなり。

胸算、既に立つ、務めて精神を沈着して、以て機會の到るを待ち、又は挑みて機會を誘ひ出すのみ。更に換言すれば、優勢の地位を占めて、心手一致し、夫れから夫れど、行き渉るに在り、然るに胸算、既に立つも、精神の沈着せざる者は、心迫り、氣過り、却て已れ自ら惑ひを生じ、懸るかど見れば、待つ色あり、待つかど見れば、懸る色あり、遂に疑惑の爲めは、調子に乗せらるゝを知らなから、調子に乗つて敗す、故に氣を練り、靡を据へ、調子に乗せられざるの、修行を專一とす。

却説、敵の虚は、多く取組む始めと、離れ際とに在り。彼我共に施術適當と思料する頃ろには、互ひに油断なくして間隙なし。故に取組む途端に、敵の足の未だ定まらざるを搏つへし。術歌に心ろをは廣く大きく強く持ち鋭氣みちみち先取るそよしと云ふ所る、即ち是れなり。

亂取りは、成るへく敵をして、我が襟袖を取らしめざるを要す。既に之を取らるれば、之を操き離し、突き離し、直ちに施術すへし。若し確實に襟袖を取られたるときは、何

處迄も、待て敵の足の動く途端を搏つへし。又た之れに反して、我れより懸るにも、我か兩足に注意して、後ちに懸るへし。而して敵の心ろ倦みて、他に移らんとする、心ろの動く途端を見て、仕懸くへし。總べて何等の機會なきに、仕懸るは無理なりとす。

但し仕懸るにも、眞實決心して仕懸るものと、挑み誘ふか爲めに、仕懸るとあり。一概には定むへからすと雖ども、左まで見定めたる理由もなきに、屢々手出するは、失敗の基ひなりとす。

特に逸すへからざる好機會は、敵が兩足の狭縮なる面積上に乗りたるるとき。又は兩足の跨がり過ぎたるるとき。或は押し來るとき。等是れなり。

要するに懸待は、其の待を三分の二とし、其の懸を三分の一とす。若し此の比例を失ひ、待に過くれば、猶豫に陥り。懸に過くれば、無謀に陥るへし。而して待を三分の二に、懸を三分の一に、比例すと雖ども、亦た懸待は、終始心裡に離るへからず。術歌に懸るにも待を忘れし待間にも懸る心ろを忘れまじきと訓す、以て懸待の要領を知れ。

第七章 順彼制勝

凡そ順彼と云へるは、彼れにしたかひて、彼れの力を借り、以て勝を制するの謂ひなり。夫れ立合ひの始めや、敵の意向は、懸るか、待つか、未だ輒く知るへからず。故に吾か身は、敵に打吳れて、思ひなく、巧みもあらですらすらと、吾が身を扱ひ居る内に、敵の意向は、自然に顯はれ来るへし。其の顯はるゝに、順ひて轉化し。先に先を懸け、裏に裏を施す、是れ順彼制勝の術なり。然るに敵の意向は、未だ顯はれざるに、我れより生中に手出するが故に、順彼制勝の術に戻て敗す。術歌に敵こそは獅子奮迅^ナ怒るとも吾か身やわらに心ろ鐵壁と云ふ、要領を履行して、精神を沈着すへし。尤も鍊磨の功を積むにあらざれば、敵に釣り出され易きものなり。然れども、双方共に鍊磨の功を、積みたる者に至ては、唯だ精神を沈着し、舉動も落ち付きたる者の、勝と見て大早計ならず。故に上達する丈けに、抄どり遅し。但た故意に、抄どりを遅くすへからず、故意に、抄どりを遅からしめんと欲する者は、間脱けするを繕ろはんとし、種々様々の難を交へて、聞き苦しきものなれば、遅速は自然の成り行きに打任せ。何等の言語をも交ゆへからず、尙ほ一時間に平均したる、遅速を知らんと欲せば、教範第一篇第十六章を見るへし。

第八章 決心

夫れ、金翅鳥王と云ひ、焉而不容疑と云ふ、是れ皆な、決心克きの謂ひなり。

金翅は、當初に精察し、事を苟しくもせず、一旦其の意を了すれば、決斷流るゝが如くなるを云ひ。焉は眼ましろかす、一面ふらす、一心亂さず、決心最も克きを云ふ。

人は決心悪しきが故に、離れたる技をなす能はず、偶々決心の克き者あれば、技の熟せぬか、數の掛らぬか、何にかに不足ありて、充分なる能はざるなり。

宙回へりの如きも、決心と踏切りの作用に在り。猶ほ、鳥は翼の作用に依て、翔飛すと雖も、地を離れんとする時は、必らず兩足を縮めて弾ねあがる、其の証には、鳥の足を離れば、地に羽鼓さする迄にて、飛び立つ能はず、飛魚も潑然として尾を曲けたるまゝ、飛び上るを以て知るへし。故に決心は、彈ねる、抛ける、と云ふ如き働らきを爲す、主動者たり。指揮官たり。

奈何なる精兵も、精兵のみにて、勝利は得へきものにあらす。必らず之を指揮する者の

決心に依て、始めて銳利なるへし。然らば、何等の機會に於けるも、之を行ふに決心乏しく、或は躊躇し、或は不純氣なる如きは、皆な其の利を鈍ふうし、其の機を失ふへし。此の故に始めを慎重することは、金翅の如くし、以て機益を、見切りたる時は、蕩而不容疑と云ふ、決心なくんはあらず。之を要するに、仕懸るも、仕懸けられ應し返へすも、決心最も克くして、決行速力最も瞬速なる者に、勝利は歸すへし。真劍は、勿論平生の試合ひと雖ども、勁敵に對しては、必らず已れの最も熟練したる、得手の技にあらざれば、克つ能はず。畢竟、我が得々たる得手の技は、極めて純氣に決心し、極めて瞬速に決行するか故に、敵に於て、之を防ぐに遑まあらざればなり。

術歌に氣や至る技や鋭とく身や迫る習ひし性を唯た克ちにけりと云ふ、即ち真劍は、平生に習熟して、心手自然の性を成せる者、獨り能く其功を奏するは、古來の格言なり。

第九章 矢富曳

夫れ、一聲以て決心を鋭とくし、以て敵膽を拉く。術歌に矢と懸る當とこたへつ曳と切る烈しき聲は敵を拉けりと、訓して、勁健なる活音を嘉獎し來れり。(矢は開口音にやあに響くいはやゝ又はやいな

とよひびく
なまへり)

凡そ、亂取試合の際に、審判上に於て、偶然、無意の僥倖か、抑々無念無想の所爲かを判断するに、掛け聲の有無を以てすることあり、猶は劍術試合に於けるが如し。然るに或流は、默然嘿々悠長の體を装ひ、靜かなる所ろに、何にかの意味ある如く、容體ぶると雖ども、熟察し來れば、其の流の創業者が、吃訥若しくは低聲なる等より、後進者は殊勝にも、斯の如くせざるへからざる如く、思ひなすこともあり、又た我が決心せし通りに、出來ぬ場合ひもあり、遂に禪家が、手を舉げて、月を指せば、人は其の月を見ずして、唯た其の手を見ると、嘆嗟せしど一般に、誤了亦多し。勿論初心は耻しがりて、聲出ぬ者なり。熟練すれば、精神沈着して、如何なる場合ひに處するも、敢て臆せず、迫らず、綽々として餘裕あり、故に事に臨みて、必らず活音を發す。之れに反して、膽奪はれ、氣吞まれたる者は、鈍ぶし。故に人の音聲は、心氣の脈なり、壁を隔て、之を聴診するも、其の人の精神氣力の、充分不充分、及び、技術の熟練不熟練は、分明なるものとす。

第十章 分任心妙

夫れ、分任とは、分業なり。一身の上に於て、一心は配り様にて、如何にも分割し得らる、道理を云ふ。彼の千手観音は、心を千手に、分ち配るか故に、千本が千本の働らきをなせり。若し一本の手に、心ろ行き切りになれば、九百九十九本は、遊手となつて、用をなす能はざるなり。故に手は手に任し、足は足に任して、而して一身總體の所ろは、一身總體に任すへし。斯の如く公平にして、我か心ろの明かに治り居る時は、天地神明、物と推し移りて、物に滯滞せず、夫れから、夫れど、心ろ廣く行き届きて、轉變自在なり。

演習中に、誤つて關節を脱臼することなきにあらず、一たび脱臼すれば、再たび之を脱臼せしめすと思ふ、一念其の局部に傾注するが故に、復た輒く脱臼す。之を矯るに、捻紙の類を患部へ約し置けば、患部防禦の注意は、枝隊其の者に、任するの道理あるを以て、全心は廣く行き渡りて、更に一局部に偏頗せざるなり、故に復た脱臼することなし。是れ符呪にはあらず、全く分任の道理ありて存す。畢竟内に顧みて疚しき所ろなく、外

に備へて缺くる所ろなく、無念無想なればなり。是を以て、分任心妙の深味を知るへし。

却説、分任心妙を約言すれば、睡眠中に痒き所ろに、手の届く如く、三度の食事に、箸を取て、何に心ろなく口に入れて、鼻などを突く者もなき如く、心手自然の働らきをなすもの、是れなり。

第十一章 名人慎事

夫れ、名人は、事を慎しむものなり。之れが裡面より云へば、事を荷しくもせざる所ろ、名人たる素養のある所ろなり。獅子は、氣猛き者なれども、冬蟲を取り喰ふに、尙ほ勁敵に向ふ如く、牙を噬み、身構へをなすと云ふ、人若し我れより小弱の者なりと、侮つて何程の事やあらんなど、呑み込み過て油斷すれば、忽ち意外の敗を取るへし。嗚に小兒を侮どる心ろある者は、鬼神を恐るゝ心ろある者なりと、云へり。尉繚子も、慎は小を恐るゝに在り、智は大を治るに在りと云ふ。今ま茲に、試合ひせんとするに際し、闘士凜然として、知らず識らず顛動するに至る者あり、之を武者の勇震ひと稱美せり。

畢竟、事を慎むの餘に出て、夏尙は寒さが如く、寒からざるに、慄する心ろ持なり。此の時は、必らず克勝を得へし。汗の出るに従ひ、氣舒ひて陽々とし、我れを忘れ、敵を忘れ、眞の無念無想となる、其の勝敗の如きは、頓と意に介せず、唯た壯に、唯た快に、是れ覺ふのみ。闘士登場の頃ろ、勇震する程にあらざれば、進歩せざるのみならず、常に人を侮どりて、常に敗すへし。莊子も曰く、巧を以て力を闘はす者は、陽に始り、常に陰に卒る、泰至るときは奇巧多しと。此に云ふ泰は、甚たしきの謂ひにして、至は過るの謂ひなり。奇巧は、失敗の基ひと知るへし。故に勇震ひする程にあらざれば、所謂奇巧多くして必敗すへし。

武者の勇震ひに次て、何度となく放尿したき心持ちあるへし。古來試合大會に於て、頓動放尿等は、名人の素ありと稱し來れり。

大岡越前守は、百を二つに割れば、何程になるやと、算家野田文藏に問はれしに、文藏は、算盤に二一天作と置き、五十にて候と答へしかば、越前守は、案を拍て感歎し、曰く、三歳の小兒も知りたる事を、算盤にて答へしは、事を堅くして、輕んせざる所ろ。

適れなる名人哉と。稱美せしと云ふ、何事に就ても、人に抽んする者は、人の及はざる所ろの、注意ある者なるを知るに足らん。

アルサルヘルブ曰く、人に教育を加んと欲せば、須らく先の主として、其の思想を緻密ならしむへし。思想苟しくも緻密ならば、其の他の教育方法如何を問はずと、旨ある哉。

人は、常に思想緻密にし、善く注意工夫せずんはあらざるなり。然れども試合ひは活機なり、餘り重念に失すへからず。是れ劍搏は、業を先にし、理を後にする所以なり。之を例せば、晴れなる試合ひに臨みて乙某に克ちを得さしめんと欲すれば、颯して甲は乙より強かるへしと、揚言する迄にて足れり。然るときは、乙某は必死になりて、必らず克ちを得へし。吳子の所謂生を欲すれば死す、死を必すれば生る、の道理あつて存す。

第十二章 九觀

古來やわらの道を學ぶ者は、早晚禪誦に通曉するを要せり。然れども禪門に入る如きは、一般諸士に望むべきものにあらず。茲に古師の意手に成る、九觀は、禪

味よ比して説き來れり。之を詳かにせんとすれば、大冊をなさるを得ず、之を省畧すれば、半解にして益なし。是を以てやわらの九観は、先づ斯の如きものなりと云ふ、初歩に於て摘記せんとす。

九観の初歩を摘記するに先たち、正成及び時宗の禪に通せしことを示さん。夫れ楠正成朝臣は、湊川に戦死するの前日に、廣嚴寺に入て明極楚俊禪師に見へ、問ふ生死交謝之時如何と。是れ生を謝して死に入る時如何用心すへきやと問へるなり。禪師曰く兩頭俱截斷一劍倚天寒と。是れ一劍閃電を振ふ時は、生も截斷し、死も截斷し、唯た一劍の電光のみ、蓋天蓋地なりとの答示なり。朝臣は此の答示に依りて、豁然悟る所ありしも、尙ほ語脉裡を撥轉する能はず。更に進て曰く、畢竟如何と。禪師震威喝一喝す。是に於て朝臣通身流汗す。禪師曰く汝徹せりと。是れ朝臣の生死に於て、決定する所あるを證明せるなり。朝臣曰く、若し來て和尚に見へすんば、安んそ向上の關捩を超出することを得んや。禪師曰く、公の問對は、百參の者に下らす、曾て他の禪匠に見へ來れることありやと。朝臣曰く

昔日南都に遊ぶ、途に一禪者に逢ふ、行くゆく語つて談論快活なり、仍て心要を聽かんと請ふ。禪者曰く名は何そと。曰く正成と。禪者さらに正成と呼ふ。予應諾す。禪者曰く是れ何そと。予時に脱然として契悟する所あり、招きて家に請し、慇懃に教を受く、爾來戰に臨み、兵を用ゆること、自在なるを覺ふと。又た北條時宗は、元寇の我が筑紫を襲ふや、軍裝して禪師に見へ、曰く大事到來如何用心と。禪師曰く鷲直進前而已矣と。時宗震威喝一喝す禪師曰く眞獅子兒能哮吼すと。時宗拜謝して出づ。是れ時宗の爲めに劈腹剌心の答示なればなり。凡そ事に處するもの、鷲直進前の氣概なかるへからず。況んや軍事の機要に於けるをや、大事に臨んで、生死に屈托すれば、鷲直進前にあらず。自他を回顧すれば、鷲直進前にあらず。念想分別に涉れば、鷲直進前にあらざるなり。(軍入語話 參照せよ)

一 儀 則

是れ、ノリと訓して行儀作法を云ふ。又た儀は、威儀の儀にて、行儀のヌイを云ふ。

凡そ、心氣を修練するには、先づ已れが肢體骨節行儀作法の正しく、法則の立つ所

より、其の外の形ちに連れて、自ら内も整ふことは、天地自然の道理なり。所謂
 儀則は、儒にては、清座と云ひ。佛にては、結跏趺座と云ふ。結跏趺座は、右の
 足甲を左股の上に揚げ、左の足甲を右股の上に揚げ、蟻の戸波りを疊に附着せし
 むる是れなり。

我かやわらの儀則は、本朝の行儀の通りにして、兩足の大趾指の爪と爪とを突き
 合せる位ひに座し。尻を足の裏にて抱く心ろ持なれば、蟻の戸波り疊に附着す。
 其の兩膝は、一盃に披らさ。兩手は、臍の下へ印を結び。頂骨より尾骶骨に至る、
 二十六個の椎骨少しも歪かます、ひつます、すつと胸を張り、鼻より下疊して臍
 と同じ通りになる如くし、觀すれば、自然に心氣備はれり。

我かやわら服を、附け帯ひにし褌襟フクロを綴り閉つるは、儀則の體勢に慣習せしむる
 か爲のなり。若し之を窮屈なりとする者は、未だ儀則の要領を得ざるものなり。
 但し町道場などにては、亂取服とて、裾寬博にして蠻衣に似たり、蠻衣を着すれ
 は、心意も蠻人に似ると云ふ。故に我かやわらの儀則は、外部より整頓して、中

必至高の觀念を發揮せしむるに在り。凡そ達觀すれば、尊むべきものは、形而上
 に屬する心術の存養のみ。氣韻の保持のみ。形而下に於ける、又た何にかあらん。
 然れども普通其の瞻仰敬服の觀念を、惹く所以のものは、先づ有形的容儀言語の
 如何に據て、之を決す。豈に思はざるへけんや。

二 實 腹

是れ、氣を練り出す大本にして、老子亦實其腹虛其心と云へり。
 禪にては、息きをフウと吐けは、自然と腹下に力を覺ゆ、其の力を次第に修用し
 て、充實ならしむれば無念無想となる。然るにやわらの道は、活氣發勢を根本とす
 るの道なれば、禪とは少しく表裏にして、一息一盃に、臍下に呑み込み、氣海丹
 田を充實ならしむ。是れ息を吹き出すと、吸ひ込むの差はあれども、其の腹を實
 にし、其の心を虚にし、無念無想なるに至ては、其の櫻必らず一なり。但し投げ
 られて、腹の鳴る如きは、腹力の脱けたる證とす。

三 融 和

是れ、はぐれやわらくと云ふ義にて、何事にも不馴染の業には、
 凝り硬むり出て、少しも手に入らず、其の凝り硬むりの爲めに、天生の器用を

閉塞して、得手不得手判然相隔つるなり。然るに儀則の正しく素直なる所より善く實腹虚心なるときは、聊かも不馴染なることなし。武藝に達したる者が、萬藝に涉つて、何處にか微妙イロイロき所あるは、本業に立歸て、肢體心氣の融和を應用すべなり。

四

盈 滿

是れ、盈ち滿つるにて、肢體の融和を得たる以上は、毛髮より、爪先きに至りて活氣盈滿して、天地一盃に充塞す。故に自ら精神沈着して、心氣を純にす。併しなから、耳にて聞き、目にて見るやうにては、未だ心意轉々するか故に、缺ける所あるへし。

五

識 心

是れ、吾か心にて、吾か心を識るの謂なり。禪は、さとりを尊ひ、智識とは稱せり。然り道義内に積めば、英華外に顯はれ。徳性内に修むれば、氣韵外に高し。道士の風骨自ら俗を抜く所以茲に在り。

六

無 住

是れ、其の觀想を住止すれば、本來の妙用を閉塞するに依り、幾千萬の中に往くも、晴れなる大試合に臨むも、念慮に涉らず。勝負に臨めば、先々

之先と心ろ掛け、左右へ開くも、後へ退くにも、氣を覆ひ懸けて、住まると云ふ義なり。歌にとまるなど思ふ心ろはとまるなれどまるとまるとまるとまるとまると云ひ無念無想を謂へり。

七

眞 空

是れ、晴れたる空を見て合點すへし。一旦雲霧に蔽はるゝに及んては、人間忽ち暗黒界に迷ふと雖ども、之を凌ぎ通して見れば、日月は、毎も晴朗として吾人を照らせり。左れば世人か物の曲折に依り、瑣末の事より不平を起し、生涯の榮譽を自棄する等は、忍耐力の乏しきのみならず、慾情の域を脱出して、哀樂生死の上に超然たる能はざるの致す所なり。歌に雲霧は唯た宙空の轉變を上げ常住澄める日月と、云ふ真空を味ふへし。又た、晴れてよし曇りてもよし不二の山元の姿はかわらざりけりとも云へり。

八

妙 用

是れ、たへなる所ろにして、其の應用は、吾れも知らず、人も知らず、心手自然の自然なる所ろを云ふ。熟練して茲に達すれば、復た元は歸つて聊か念が入り、情が起りても、妙用を害せず。是を以て徳は得なり。已れに得ず

んは、徳と稱すへからず。妙も亦た已れに得すんは、妙ならず。故に修業錬磨して、之を得れば爲す所ろ妙ならざるはなし。歌に嗜と功上手と三つくらぶれば嗜きこそ物の妙に上手と、と云ふ以て妙を知れ。

九 圓相

是れ、圓滿自在の地位なり。之を云へを言葉に惰し、之を書けを文字に溢し、盈滿迄は、言語文字も届くに似たれども、誠心以上は、胸と胸とに於て許可をなす所ろなり、敢て言語文字の及ぶ所ろにあらす。歌に關みの夜に鳴ぬ鳥、聲聞かは生れぬ先のちの懸しさ、と云ふ立は立なり、言語文字の及ぶ所ろにあらざるも、亦た諒了して可なり。

古賢アリストートルは、眞理の爲めには、肉を殺け、血を濺げ、吾輩の職分なり。故に親友は、愛せざるにあらすと雖ども、此の眞理を愛するは、親友を愛するより甚たしと云へり。

又た昔し亞典國の演武場は、國民の少年絶へす出入せる所ろにして、實に又た哲學と美術との本國なりし。角力せし者は、浴湯して其の體力を恢復するの後ち、行き

てソクラット及びデモステースの尊尙なる教を學へり。故に希臘の歴史は、滿卷悉く赫々たる武勳、及び不朽なる勝利を以て、滿たされたりと云ふ。我が尙武國の少年即ち天下有爲の學生は、必らず膺れを勉むへし。圓相の觀念も、亦た其の中に在り。但し體驗に當て、本體を認めず。徒らに枝葉上に奔るを、古人は空館を煮ると戒む。孟子も學問の道は他なし、放心を求るのみと云へり。自己の良知反省を猛にせずんはあらざるなり。

第十三章 天道不爭而勝

凡そ、九觀を會得し來れば、目に見るの早きにもあらず、耳に聞くの速かなるにもあらず、靈魂疾く之を感得す。故に變を見て而して防ぎ、隙さを見て而して搏つ如き、迂をなさず、無形無聲の間に勝を制す。隨て我が心を以て、敵の心を塞き。我が氣を以て、敵の氣を覆ふ。故に敵は、先を越す能はずして、釣り出され。敵は、平地を行く能はずして、高きに向はされ。常に疑惑生して、早く呼吸迫り、早く氣力盡きるに至る。是れ、天道の争ふへからざる所ろなりとす。

天道は争はずして而して勝つとは、是れ直なれば、勝つと云ふ義なり。蓋し天道は、萬物の自然を云ふ。即ち我れに數懸けたる修業自然の功あれば、我れに必らず自然の勝あり。我れに修業不足の過あれば、我れに必らず自然の負けあり。是れ優勝劣敗とも云ふへき、自然の數にして、俄かに如何とも、爲し難き所なりとす。

又た、我れに數懸けたる修業自然の功あれば、逸して而して勞を待つ徳あり、逸して而して勞を待つとは、兵語に聞き慣れて、左迄の深味なきか如しと雖ども、實際試合の上に於て、逸して而して勞を待つとは、鍊磨の功を積むにあらざれば、善く之を爲す能はざる所なり。

夫れ、鍊磨の功を積みたる者は、愈々争ひの長きに涉り、愈々奮ひ。益々戦ひの激するに隨ひ、益々技倆を顯はす。是れ逸して而して勞を待つに、餘裕あれをあり。若し未だ鍊磨に、不足ある者は、持久對抗する能はざるなり。乃ち初心若しくは中絶せし者の癖として、當初は銳氣頗ぶる風發して、其の勢ひ猛烈なるも、二三回賺されるれば、氣魂忽ち衰へ、呼吸忽ち盡き、汗は引き込み、聲は出です、逸せんと欲して、逸する能はず、

強ひて逸せんとすれば忽ち敗す。

要するに、我れに數懸けたる修業自然の功ある者は、優勢の地位を占めて、精神を沈着し。以て敵の來鏡を避け、或は披らきて之を賺し、或は曳くに付けて之を脱け、意中窺かに、敵を弄ひする心を持ちにし、好機は茲と見切て、捨身に彈ね、當流特得の技倆を顯はし、其の他は之を補ひ、之を導く迄にし。若し亦た敵に先んせらるれば、後之先にて勝を制す。然るときは、敵は、自ら氣張り合ひも失ひ、屈托も生し、遂に何程迫るも駄目なりと惰歸になる。是に於て、更らに復た眞横捨身なり、大小く字なり、意表に出て、技倆を逞ふす。敵は、惰歸を回復せんと欲して、故ちに勇を鼓し氣を張り、回復を謀れば、謀る程に、故意に涉つて、我か待つ所ろの術中に陥るへし。嗚呼、天道不爭而勝とは旨ある哉矣。

第十四章 増信保信

凡そ、威力を逞ふするは、威信を増す所以の手段なり。然れども敵をして心服せしむるには、未だし。故に飽迄も技倆を闘はし、七擒七縱して、眞心服従せしめすんはあらさ

るなり。

併しなから、増信の要領は簡單なり。夫れ事を容易にせず、又た半途にせず、一たひ我れより仕懸けたる事は、頑固一徹何處迄も、必貫するを要するのみ。此慣習を固有すれば、威信の餘光として、未だ充分に懸けざるも、早や既に敵は驚倒するに至るへし。夫れ、保信は前項に反して、稍々繁雜に渉るも、亦た約言すれば、負を譲つて威信を保つに在り。是れ他なし、敵に仕懸けられ、到底避け得へからずと思慮せば、早く見切つて、負け審みがましく争はず、冷淡至極に見せて、敢て爲さるの風を装ひ、吾れ好んで反動を取るか爲めに抛けられたる如く、美事に反動を取り、活音に降参りと叫ひ、却て敵を褒めて遣るへし。然るときには、敵に於て眞に勝らなからず、却て眞に勝らたりと思はず、何にか爲めにする所あるへしと、種々の妄想を起し、狐疑を抱くとも、結局眞に勝ちたりとは自信せざるなり。

却説、術語に期を知るを要すと題して、早き期を知り、遅き期を知り、逃るゝ期を知り、逃れざる期を知り、其の期に處するは、武士道に於ける練體柔術の、主眼たりと云へり。

日新齋の詠歌にのがるまじ所ろを兼て思ひ切れ時を至りて涼しかるへし、と云ふ。實に楠廷尉の湊川に於けるは、全く、のがるまじ所ろを兼て思ひ切りし、故に大節に臨み從容として義に就けり。我々が、學問するも、武藝するも、皆な之れか爲めなり。所謂期を知るには、のかれる期を知りて、逃れる場合ひあるへし。のがれざる期を知て、逃れざる所ろ、大節なり。曾子も曰く、大節に臨み而して奪ふへからず、君子人乎君子人也。君子は、法を行ひ、命を俟つのみ。造次顛沛の間も、茲に於てす。武士道に於ける練體柔術の本領は、既に立ちたりと謂ふへし。若し大節に奪はれ、最期に未練ありては、武士道に於ける練體柔術の本領は、決して立たざるなり。然らば、之を立るものは、何を曰く信是れなり。勝敗は運に在り、生死は命に在り、丈夫信なくんを、亦た何をか爲さむ。

夫れ、此れ等の高尚なる要領を、平生に研窮し、以て試合ひに應用するは、吾れ柔道を以て、天下を治むと云へる、類の牽強附會にあらずして、最も嘉獎すべき所ろなり。隨て他流試合を禁絶し、俗流亂取を擯斥し、以て一流一派立て、貫く所ろなくんはあら

す。開口澁川諸流も技に見る所ありて、他流試合を禁せしものなりしが、澁季の今日
 は、俗流亂取に化し去りしか如し、當流は、徹頭徹尾必貫する所る武士道に於ける練體
 柔術の、本領を發揮するに在り。故に他流人は、他用を以て、出入するさへも拒絶せり。
 但し、技に保信の手段として、昔日回國武者修行に出る者の、秘訣を述ふるは、無用の
 業にあらざるへし。取て以て、同流試合の上用ひて可なり。先づ何れの道場と雖ども、
 回國武者修行の到るときは、其の技倆を見届ん爲めに、目録約束位ひの者を、棄物とし
 て試合ひせしむへし。此の時に、回國武者修行其の者は、偽つて目録約束位ひに見せて、
 危ふくも僅か一本丈け勝ち残る。滿場之を見て、是れでも回國者歎と、笑はん計りに侮
 どり。目録の者出て、試合ひす、又た幸ふして漸く一本丈け勝ち残る。滿場之を見て、
 回國者の僥倖となし、尙は乗り氣になつて、吾も吾もと競ひ出つ、回國者は、相手相應の
 手心ろを以て、皆な一二本つ、勝ち残り、次第々々に上級に向ふに隨ひ、盤龍奮飛捨身
 に弾ね、慄悍悲憤く字に掛け、勢ひ天を震はし、地を動かすが如し、而して汗は滿身に
 溢れて、拭ふに遠まわらずと雖ども、呼吸は平然たり、心氣は泰然たり。是に至ては、

滿場唯た肅として聲なく、當初の意氣は頗ふる挫折し、當初輕侮せし反對に、鬼神視す
 るに至る。世に名人と稱せらるゝ者は、概ね斯の如き、手段を逞ふし得たるものと知る
 へし。若し、始めより強きは、強しと云ふ迄にて、人の感歎を惹くに足らずと雖ども、
 始めは處女の如く、終りは脱兎の如く、意表に出る時は、恰も敵は、兜の纒の緩みたる
 を、打たるゝ心地すへし。

第十五章 審判

審判定義は、第一篇に掲げたり、左に其の表を示す。

一 捨身	我身を捨て、敵を制するもの 腹斜極端等纏へて捨身の類	十點	全上稍々不充分	九點
二 く字	我腰を利せて敵を制するもの 大腰背肩縮縮見裏内股の類	八點	全上稍々不充分	七點
三 掬足	我足にて敵を制するもの ひ拂ひ掛け掛ひ戻しの類	六點	全上稍々不充分	五點
四 雜技	前三項外の種々なる手を云ふ 又は他流の輕佻なる技風の類	四點	全上稍々不充分	三點
五 組打	袈裟肩胸脇坊主門咽喉のための類 又は組敷がれて一分許を過ぐる者	二點	全上彈丸返へす毎に	一點

凡そ、勝つも勝つへき、理由あるにあらざれば、虚譽なり。負くるも負くるの、止むを得ざるに出れば、耻辱にあらず。勝敗は兵家の常なり、試合ひは日々の稽古なり、勝つて誇らず、負けて悔ひす、人の技は、軽くも重く受け、己れの技は、重くも軽く卑下して、中心には勇猛人を呑む、是れ丈夫の所爲たり。抑々丈夫たる者、一勝誇慢し、一敗落膽する如き、卑劣の者ならんや。術歌に負けてこそ眞の克もさどりなん勝ちて誇るな負けて耻るなど、訓せり。負けてこそ眞の克ちもさどりなんとは、負ければ更らに一層の熱心を以て、工夫を凝らすへきを云ふ。

夫れ、機會の仕懸くへきに、仕懸るは、假令へ結果を得ざるにもせよ、技倆は既に備はりたるものなり。之れに反して、機會の仕懸くへからざるに、仕懸るは、假令へ結果を得たるにもせよ、無理なり。又た保信の手段を取て、負を譲るへきに、譲らざるは、假令へ抗拒し得たるにもせよ、譚觀は未たなり。是れ等を見て、以て技倆の優劣は、判然たるものなり。但た勝つた負けたと云ふ如きは、僅かに獎勵の一助たるに過ぎざるものなり。

却説、試合ひは抛けを専らにすへし。昔は甲冑の敵を組み敷き十々滅を刺す、最後の必要に依り、盛んに組打を行ひしが、今は生理上より、之を減却せざるへからざるに至れり。何となれば、組打は、互ひに上へを下へと揉み合ひ、腹にて彈ねつ彈ねられつ、腹力を激張するか故に、或は腸管を害し。又は烈しく咽喉を締めて、窒息を致し、尤も袈裟かためを脱げんとして、耳痛を生ずる等の憂ひあり。耳痛は、矮小なる者に腫し易しとす。彼の相撲取りも、比較的矮小なる者に耳痛は多しとす。要するに、我々が武士道に於ける練體柔術は、抛けのみにて足れり、是れ組打を貳點とする所以なり。平生は、組打を行はず、遇々縫れ、搦み、倒れたるとき組打を命することあり。而して組打は、組み敷かれて、六十秒を経過すると、思惟するときは、認定法に依て、勝敗を決すへし。之を詳言すれば、時間の経過より、寧ろ氣力の如何を見て、決するに在り。

一 何種の技たるを問はず、抛けられたる者善く猫回へりし起るときは、之を抛けたる者へは、稍々不充分なる點數を與ふ。又た應し返しは捨身と同一の點數を與へて嘉獎す。

一 抛けは、縁を切て投げ放つを第一とし。縁を切らず投げ送るを次とす。而して投げ送ると、投げ送るにあらすして、敵に曳き付けらるゝとを、分ち。充分不充分の點數を與ふ。

二 横捨身を掛けしにあらすして共倒れし、又た力餘りて倒れる者等は、無意の所爲なるを以て無効とす。此れ等の場合ひに「組み打ち」と命令するを例とす。

四 決勝點數を拾五點と定め決勝點數に先登したる者を優勝とす

五 源平試合ひの勝残り法も此の決勝點數法を以てす又た總得點を以て兩軍の優劣を決す

六 點數は、點數表に規定すと雖ども、地位及び年輩等に關して斟酌せざるへからず。即ち此の人にして、此の功をなす奇特なりと、感賞する場合ひ。例せば壯者が幼者を抛けたりとて、左迄に喝采を得ざるのみならず、或は無理なるを咎められんとす、然るに幼者が壯者を抛けたらんには、大喝采を得へし。故に甲と丙との差ある者にして、丙か甲を抛けたるときは、乙が甲を抛けたる手際と、同一なるも、丙に充分の點數を

與ふことあり。之れに反して、甲か丙を抛けたるときは、乙が丙を抛けたる手際も同一なるも、甲には稍々不充分の點を與ふことありとす。

七 大試験は、先進五人に勝殘るを以て、大試験及第者とす。尤も受験者は、其の先進者に依りては、碁の目を置く如くし、平均を得さしむへし。例せば、受験者へ、先進者肩章二十一條乃至二十四條なれば、貳點を置き。全二十五條乃至二十七條なれば、四點を置き。全二十八條乃至二十九條なれば、六點を置き。而して決勝點數十五點に、先登するを以て、勝敗を決す。

第十六章 振氣流練體柔術基本

夫れ、當流は形を以て主とす。而して制勝の氣、進退の度、奇正の變、應用の術、一に皆な、收めて形の中に在り、體意に云ひし如く、然り。故に形より學ひし者は、其の圓轉自在なるや、彼の亂取より習ひし者の比にあらす。但た、書は以て馬を御すへからず、之を活用するの功は、熟練に在て、之を運用するの妙は、人に存す。此の故に基本より學ぶは、正則なり。亂取より習ふは、變則なり。其の上達期に至て、得失大差違あり。之

を例せば、甲乙兩名相約して、同時に甲は正則に入り、乙は變則に入り、各均しく修業して、一ヶ年目に比較せんに、甲は乙に劣るへし。之を二ヶ年目に於てするも、尙ほ甲は乙に及ばざるへし。之を三ヶ年目に於て試合ひせば、甲は、少なくとも乙の五年以上、修業したる技倆に均としき、技倆を備へ。乙は、漸く三ヶ年丈けの働らきに過ぎずして、いつも生々敷く、未だ甲の如く圓滿自在なる能はざるなり。是に於て、甲は、乙に對し、所謂、天道不爭而勝の上位を占む。是れより加倍法に依り、四ヶ年目に至れば、六七年の技倆を備へ、五ヶ年目に至れば、十年餘の技倆を備ふ、乙の企て及ふ所ろにあらざるなり。是れ即ち雷流は、形を以て技を教へ、技を以て體を練り、體を以て氣を修め、氣を以て勇を養ふ所以なり。

但し、傍ら亂取を交へるは、正變一變兩得の便法のみ。故に、形を措て、亂取のみ、演習するを禁す。且つ、白帯生は、黒帯位の敵手たるべきにあらざれば、亂取の稽古を許さず。亂取は江戸に行れ始めしもの、如し。舊武藩の間にては組打のみなりき。

亂取は、黒帯位に於て、大小強弱の取扱ひ、臨機應變の練り廻はしに、誤り贖つこと

なき様に、油断を戒しめ、且つ、白帯生をして少しく趾指に力を入れ、中心點に注意させて、押しつ曳きつする機會に、眞捨身の入り込みと、耻骨を弾ね、曳くと、三呼吸一致の具合ひを會得せしむる様に、之を反復し。次に、く字と揃ひ足は、敵手より仕懸けて、武士に際疾く應し返へす、技に熟せしむる様に、夫れ夫れ説明を與へて、注意を促かし、稽古せしむへし。

問ふ、正變兩則の差違は、知了せり。茲に長大の人と、矮小の人と、同日に入門して、以て三四年後の勝負は、如何や。答ふ、長大は、多幸なり。然れども、力を待み、技に鈍ふき、短所なきにあらす、故に意外の敗も多しとす。矮小は、不幸なり。然れども、機智敏捷に虚實表裏の技を逞ふし、滑脱奇變に、鋭鋒を避けて惰歸を搏つ、故に意表の勝も少なしとせす。畢竟得失は、機敏と熟練どに在り。尤も長大にして、機敏と熟練どを併有せば、是れを鬼に鐵槌を與ふる如くなるへし。今茲に小説に似たるも、一讀の價值あるを以て、抄して参考に供す。

彼の海我東蔵どなん呼へる人は、秋月の藩士にて、柔らの達人ありしとぞ。其の軀

幹は、短にして之を見れば、衣にだも勝へざるもの、如く、哀れ男一匹の數に入るへくは覺へざりけり。或る時東藏が用事ありて田舎に往き、夜ふけて歸りしよ。但或る森林を過る折りしも、一人の大男躍り出て、立竊り、金を渡せど、脅嚇しけるに、東藏は、呵々と打笑ひ、好しや泥中に抛棄つへき、金ありども、汝等に施すへき金はなしと云ひければ、彼の大男は、赫として口の横に裂けるまゝ、言へば言はる、廣言哉、好し其の儀ならば、先づ汝の命ちより取り得さすへしとて、東藏の帯際を取るより、早く輕々と目よりも、高く差上げり。東藏は、尙ほ悠然として差上げられなから、咄此の城下に在りて、海我東藏を知らざるかと叫ひければ、盜人は、斯くと聞きて驚き一方ならずと雖ども、奈何せん、東藏は、睨みて放ては蹴るぞ、卸ろさは當身アツキするぞと云へるに依り、放つことも卸ろすこともならず、到々、其のまゝ、東藏を城下まで、擲き往き、芝生の上にとつと置き、後をも見すして逃げ去りしどかや。又た東藏か、家に兼て出入りの、相撲取りありけるか、或るとき東藏に向ひ、如何に主公か、柔らの術を極まめおはせむとて、若し不意に出て、背後よ

り抱きすくめば、詮術アツキなかるへしと言ひけるに、東藏は、之れに答へて、柔術てよものは、さむかり淺蕙なるものにあらず。然れども汝若し虚言と思はへ、論より証據。今まより後ち、一ヶ月餘りの間は、吾れ夜な夜な出歩くへきに、汝ち如何にもして見よと言ひ聞け置きたり。然れど相撲取りは、遂に來らず、左れば、一時の戯言にてやありしならんとて、其のまゝに止みぬ。然るに、東藏が、太く酒に酔ひ、火鉢に憑りて、うとうと、眠を催し居たる所へ、彼の相撲取りは、不意に出て、背後より力の限り抱き締めければ、東藏は、悠然として、今ま一と締めと、叫ひしよと見へしが、相撲取りは、二三間彼方に投げ飛ばされ居たり。是れには、力ら自慢の相撲取も、閉口し、如何なれば、斯く神速なるものにやと、問ひければ、東藏は、打笑ひつゝ、是れと云ふ譯けはなけれども、今ま一と締めと、叫ひしとき、故の手に少しく緩みの出來しかは、其れを利用せし迄なり。武藝の奥意は、纏へて斯の如きものをがしと語りしに、相撲取りは、心外に堪へずやありけん、更らに此の度は、正面より神妙に立合はんと乞へり。東藏は、それこそ易きことなり、いさ來

れど立向ひしかば、相撲取は例の金剛力に全力を籠めて、東藏の胸倉を押し来る、東藏は、又々聲を放ちて、今ま一と押しと叫ぶに、相撲取りは、勃として何に小癩など押し懸る、東藏は、得たりと、眞捨身に弾ねて、五六間彼方へ逆脊打ちに抛け棄たり云云。又た昔し或る人は、小天狗を以て、自ら居る。一夕途中に悍馬を見て、其の馬尾に接して過く、危ふくも馬蹄に蹴殺せられたりと、見るまに八九歩先きにひらりと飛び避けたり。高弟等は、之を見て大に歎賞し、師に告ぐるは事實を以てし、以て皆傳わらんことを請へり。師は以ての外に怒り、曰く斯の如き不心得の者には許し難し、畜生と肥桶は、避けて近つかさるべきものなるに、之を避けざるは私勇なりと、痛く斥けたりと云ふ。

東藏が、相撲取りに於ける、或人が悍馬に於ける、皆な以て角技者流の事なり。角技者流の事は、又た何を堂々たる武夫に取る所ろそ。徒らに此れ等を以て激賞するは、却て堂々たる武道を侮蔑するものたるを斥せずんばあらざるなり。昔し源信齊は、或問に對へて、曰く、武藏は名人なりと、傳心齊は、末席より進み

出て、唯た今の御答へは、不審に存するなり。門人の暗らさを明らめさるるを名人と云ひ、誘引して達人ならしむるを上手と云ふ。然るに、武藏は左にてはなく、手頃ろの者を打掛き、投げ倒し、云ひ倒し、力の剛強に恃む癖あり、中々以て上手名人の位ひにあらず、一體武藏は、巖柳か慢損に比すれば、遙かに謙益あれども、心底を叩けを、覇者なり、郷原なりと云ふ。源信齊、殊の外に、此の言を稱美し、斯の如く、武道の本領を得たる人に譲ること本意なれど、極意及び印綬を授け、五百の門人も譲り、自身は伊豆の奥山に引籠り、仙境に入りしと云ふ。極意は、求めて得べきもの乎と、疑問の起るも屢々聞く所ろなり。是に於てか、先師は、吾人をして憤悱啓發の精神を喚起するが爲めに、術歌の秘を示し給へり、曰く、極意とて外そに求めな明け暮れに學ひつ習ふ數の積果と、睡て、之を銘肝し、以て、朝な、夕な、數懸けて、千返萬返して、復習の功を積めば、極意は自得すべきなり。

振氣流練體柔術初段之形

凡そ初習は先入主となる正邪の岐路なるを以て其の邪癖を矯め正道に導き以て他日の

大成を期すへし故に初段に限りて先進も初心同様に豫行せしむ豫行は聲も掛けず力も入れず極柔らに前へ後ろへ猫回へりする是れなり終つて入り替るへし
尤も入り替る時は總へて互に後ろ向きせざる様に轉回しつゝ跡退りし形は必らず眼を眼に着して正視し亂取りは先づ敵の足に注目するものとす

夫れ熟練するに従ひ階級を逐ふて相應に抗爭し利不利を研窮して以て一段演練し終れば汗滴珠を流す迄に精神一到せずんばあらず但し一本左右の終る毎に元の地位に引分るゝは早技と混せざるか爲め且つ態度を沈着ならしむるか爲めなりとす最後に目禮を行ひ挨拶して席に復するも尚ほ口を結び徐ろに鼻息して態度を亂さず須らく九觀儀則を準守して従容たるへし漢江武科の受験者が巧みに拳法を演し満場の人を驚かしたるも其の終るや否や忙かはしく汗を拭ひ扇を使ひしかは試験官大喝し曰く汝は用に中らず汝が従容の態度なきは武冕の一大缺典なり萬藝足つて一心足らすとは汝の謂ひなりと痛く擯斥せしと云ふ克己復禮以て武士道に於ける練體柔術の特色を發揮すへし

一 右片手矢筈

二 左右の違ひ

武士進み往く敵手は待て武士の近づきたるとき右手を矢筈にし(矢)武士の喉を張り押し立る武士は(當)踏止つて反りなから左手にて敵手の右手の寸口を握り右手にて敵手の右腕の尺澤を握り敵手より尙ほ強く押し来るを利用し敵手の右腋下を潜り脱け兩足を入れ替へる敵手は力餘りて上體を前へ傾ける武士は之を羽伏せに押へ付る如くして(曳)引き付けなから兩手を放つ敵手は(當)右肩にて猫回へりす

右肩猫回へりは右足を踏出し右臂を疊に接し頭を左方へ向け右肩にて回へり左手にて疊を拍ちて反動を取るへし但し踵にて武士の頬を拍つ憂ひあるを以て互に注意を要す初心へは教官先づ徐かに前の如くし其の右腕を羽伏せに押し付けて右肩猫回へりせしむへし尤も一回轉して左手にて疊を拍ち反動を取り復た後回へりす以下準之

三 兩手彈ね右羽伏せ

四 左右の違ひ

敵手武士互に進達ひ敵手より兩手の掌にて(矢)武士の兩乳の上を彈ね掛けて押す武士は(當)前の右片手矢筈の如く踏止つて反り敵手より充分に押し来る迄は抗して其充分に押し来る敵手の力を借りて利用する事前の右片手矢筈の如くす敵手亦右肩猫回へり

す

五 右拳突き

敵手武士互に進達ひ敵手(矢)右拳にて武士の鳩尾へ突き懸る武士(當)右足を引披らきつゝ右手を矢筈の如くし敵手の突き来る右拳を己れの右方へ打拂ひつゝ其手首を握りて己れの右腰へ引付け左肩にて敵手の右腕へ(曳)當りて體勢を崩し左手を敵手の右腋下より入れて敵手の首に掛け其左手は向ふへ押し右手は引き多少兩足共引退り敵手を引付けんとし(曳)引放つ敵手(當)右肩猫回へりす

六 左右の違ひ

初心をして敵手たらしむる時は教官は初本の右片手矢筈の如く稍々初心の右手を疊に付けて左手を押して初心の頭を向ふへ捻り徐ろに右肩猫回へりせしむる等如前

七 右後抱き

八 左右の違ひ

互に進出つ武士は素早く敵手の右側より後へ回はり(矢)敵手を抱く敵手(當)腰を割る武士は抱きたる兩手を敵手の兩肩へ掛け右足を引披らきつゝ右方へ(曳)引倒す敵手(當)仰倒猫回へりし立つ武士は復た直に抱き付き左後抱きに移るへし

九 右後抱き返し

十 左右の違ひ

初心をして敵手たらしむる時は教官手を添へて反動を取らしめて後に其手を放つへし互に進出づ敵手は武士の右側より後へ廻はり(矢)抱付く武士(當)腰を割り身を沈め兩肘を張る(敵手の抱付きたる兩腕の緩みたる時)武士は右肘尖を敵手の心部へ向け(曳)突く擬勢をなしなから飛達へる敵手(當)兩足の趾蹠のみにて小歩に跡退りし仰倒猫回へりし立つ敵手は復た直に抱付くへし但初心敵手たる時は臀部を疊につき右手は伸ばして疊を拍ちたるまゝ頭を左肩の方へ傾け後ろへ回へり起るべし

十一 右拳突き逆倒し

十二 左右の違ひ

互に進出つ敵手右拳にて(矢)武士の鳩尾へ突き懸る武士(當)飛達へに左足を敵手の右足の外側へ踏込み左手にて搦股を其右手の寸口へあてる様に逆に握りて其右拳を敵手の右耳の邊へ押し上げつゝ右足を敵手の右踵に引掛る様に其右足の外側へ踏込み右手を敵手の右腋下より入れて敵手の右拳を蔽ひ握り(曳)向ふ下へ引放し倒す敵手(當)仰倒猫回へりし立つ初心敵手たる時は教官は其右拳を握りたるまゝ疊にまで送り遣る初

心は教官にもたれて左手にて反動を取り前の右後抱き返しの如く後ろ回へりし起るへし

十三 両手取り右拳突き上げ 十四 左右の違ひ

敵手は進て兩手にて(矢)武士の兩手首を握る武士(當)腰を割り殊に眼を眼に對して右肘を下け右拳を上へ向け(曳)突き離すと同時に右膝を上げて又其右腕を敵手の右手首の上へ卸ろし載せて下へ(曳)押し離すと同時に右足を踏卸ろす敵手は更に右手にて(矢)武士の真向へ打込む武士右腕にて(當)受けつゝ其右手にて敵手の右手首を握り左手は敵手の右腋下より入れて逆に敵手の左襟を握り右足を引披らき敵手を引寄せ更に敵手に向ふへ(曳)押し放つ敵手(當)右足を脱きつゝ跡退り仰倒猫回へりし立つ
初心敵手たる時は前の逆倒しの如く叮嚀に疊にまで送り遣るへし

十五 爪返し 十六 左右の違ひ

敵手は進て兩手にて(矢)武士の兩手の四指を強く握りて高く折り掛る武士(當)右足を踏込み右肩を低くして諸指を柔らかかにし楊柳の心持にて右肘尖を敵手の兩腕の中間よ

り顔の方へ右肩共に押し上げ四指を脱き更に左肘尖にて敵手の胸部に突き當る様に(曳)飛び違へ當身せんとす敵手(當)趾蹠のみにて小歩に跡退りしつゝ仰倒猫回へりし立つ

初心敵手たる時は右後抱き返しの如くすべし

振氣流練體柔術第二段之形

一 右下手羽伏せ 二 左右の違ひ

互に進逢ひ敵手(矢)武士(當)右下手四つに組み稍々張り合ふ武士は右肩を落し低くなり敵手の左の二の腕を擔ぐ如くし兩手を敵手の左肩上に交叉して右足を引披らく敵手は左手の尺澤を上へ向る様に右肩の車骨を廻はしつゝ稍々上体を前へ傾け右手を左腋下へ添へて蹴らるゝ防ぎをなす武士は(曳)右足の蹠にて敵手の右手の甲を蹴り復た左足の蹠にて敵手の頭を(曳)蹴る敵手(當)素早く左肩猫回へりす
初心敵手たる時は教官先づ右足にて軽く蹴り左足を上げて蹴る擬勢をなしたるまゝ左足の踵を疊に踏延をし初心の左肩を疊に柔らかかに押付け初心をして左肩猫回へりせし

じ

三 右下手肘當り

四 左右の違ひ

互に前の如く右下手四ツに組み稍々張り合ふ武士は右手を脱きて矢筈にし敵手の左手首を下へ(曳)押し放し左肘尖を敵手の肋部へ當る様に飛び違へて左足を敵手の右側外へ踏込ひと同時に左肘尖を當る(曳)擬勢をなす敵手(當)跡退りつゝ仰倒猫回へりし立つ

初心敵手たる時は右後抱き返しの如くすべし

五 右下手首捲き

六 左右の違ひ

武士は進て(矢)敵手(當)右下手四ツに組み張り合ふ敵手は左手の尺澤にて武士の首を捲き込みつゝ左足を武士の兩足の間に踏移す武士は身を沈めながら左足を曲けて敵手の股へ蹴り込みつゝ右手にて敵手の後帯を引き左手は敵手の腹部を(曳)押し放ち遣る敵手左肩猫回へりす武士亦右肩にて小形に右後ろ回へりし起りつゝ左足を敵手へ向け蹴り延ばす

七 胸倉取り右脇打ち

八 左右の違ひ

武士進む敵手右手にて(矢)武士の左襟を掴む武士(當)左手にて敵手の右手首を取り右手を伸して敵手の右手の尺澤を握る敵手左手にて(矢)武士の右膝脘みを拍つ武士は(當)拍打せられぬ様に右足の踵を敵手の右足の趾前へ移しつゝ右膝を疊につき敵手を脊負ひ前面へ(曳)抛ける敵手(當)右肩猫回へりす

初心敵手たる時は教官先づ初心を脊負ひたる體にし上體を疊に接する位ひに低くなる初心は右足を敵手の右膝の側にまで踏出し徐ろに右肩猫回へりを習ふべし

九 右腕止己が首捲き

十 左右の違ひ

武士進む敵手右拳にて(矢)武士の真向へ打込む武士(當)右腕にて受止め直ちに其右手にて敵手の右手首を握り其敵手の右手の尺澤を己れが後ろ首へ捲きつける様に己れの首を敵手の右腋下へ差込み左腕を横に敵手の前帯通り沿ひに添へて右足を曲げ敵手の股へ(曳)蹴り込む敵手(當)右肩猫回へりす武士亦小形に左肩後ろ回へりし右足を蹴り延ばす

初心敵手たる時は教官に於て之を辱し激に頭頂を疊に打付けさる様に注意すへし

十一 右手す口

十一 左右の違ひ

互に進み敵手右拳にて(矢)打掛る武士(當)右腕にて受止め兩手の拇指にて敵手の右手首の脈所ろを押へ握りて右足を後方へ引き伸はし右の方へ半は猫回へりしつゝ右足を縮めて敵手の右腕に沿ひ(曳)蹴り伸はす敵手は武士の蹴り掛る迄は上體を傾けなから立ち居る武士の蹴り掛けたる時蹴られぬ様に遠くへ狐飛び右肩猫回へりし去る尤も右手の拳を固めて振り廻はす心持にすれば武士の握りたる兩手は離し得るものとす

初心武士たる時は右足を充分に後方へ引き其右膝を疊につき半は猫回へりし又初心敵手たる時は徐ろに右肩猫回へりし一舉一動を確實にすへし

十二 右押し潰され返し

十四 左右の違ひ

武士進む敵手右手にて(矢)武士の胸倉を掴み左手にて武士の後帯を握り左足を武士の右側外へ踏込みつゝ押し潰す武士は(當)左手にて敵手の右手首を握り右手の尺澤にて敵手の右の二の腕へ鎌に掛け敵手に押し潰されなから(曳)鎌を利せて^{チカ}投げ遣る敵手は

狐飛び右肩猫回へりす武士は小形に右後ろ肩回へりし左足を蹴り延はす

初心武士たる時は教官に於て注意し己が首捲きと同しく頭頂を打付けさる様に送るへし又初心敵手たる時は徐ろに右肩を疊につけ猫回へりせしむへし

十五 右より込み蹴り上げ

十六 左右の違ひ

武士進む敵手兩手にて(矢)武士の兩腕の上より抱きつく武士は(當)身を沈め兩手を敵手の兩腰へ添へ敵手の股倉へ兩足共に入り込み脱けて右手の掌を敵手の左脚に押しあてゝ頭足を反對に向け右足を縮めて敵手の臀部を(曳)蹴り上る敵手は充分に狐飛び右肩猫回へりす初心敵手たる時は兩足を廣く踏跨かりて臀部を蹴られんとする頃ろ右肩猫回へりせしむ

振氣流練體柔術第三段之形

一 頭胴打ち

二 左右の違ひ

武士進む敵手右拳にて(矢)武士の頭を打つ武士右腕にて(當)受止め其手首を握る敵手左拳にて(矢)武士の右腕を打つ武士左手を矢筈にし(當)握り止め敵手の右手の尺澤を

已れが後首ろに引掛け右足を敵手の股間へ蹴り込み後ろ猫回へりせんとす敵手振離し
右肩猫回へりす武士亦小形に後ろ左肩猫回へりし起り右足を蹴り延ばす
初心武士たる時は教官に於て徐ろに送りて頭頂を打付けざる様にし又初心敵手たる時
は右肩を疊につけて猫回へりせしむべし

三 壁副へ

四 左右の違ひ

敵手右拳にて(矢)打込む武士(當)右腕にて受止め直に其右腕を敵手の右の腕へ捲き込
み敵手の後ろへ廻はり左手にて敵手の左肩より敵手の右の前襟を掴み左足を引披らさ
ながら(曳)引倒す敵手(當)仰倒猫回へりし立つ
初心敵手たる時は教官手を添へて仰倒せしむ

五 意表

六 左右の違ひ

互に進遙ひ右足を踏出したる時武士(矢)右手にて敵手の左襟を握る敵手(當)兩手を武
士の右腕上に変又し右足を引くと同時に武士の右手首を下へ(曳)押し離す武士は直に
左肩にて敵手の左脛へ(曳)當り兩手にて其足を掬ひ上げ倒さんとす敵手は(當)左足を

脱きながら跡退りしつゝ仰倒猫回へりし立つ

七 鎌掛

八 左右の違ひ

武士進み敵手右拳にて(矢)打込む武士(當)左腕にて受止め直に其右手首を握り右足を
敵手の右側へ踏込むと同時に右手の尺澤を鎌掛けに敵手の右の二の腕へ引掛け其鎌掛
を利せながら後ろへ反り倒れつゝ(曳)弾ぬ放つ敵手(當)狐飛び右肩猫回へりす武士亦
小形に右肩後ろ猫回へりし起りて左足を蹴り延ばす

九 釣鐘

十 左右の違ひ

敵手進み右手にて(矢)武士の陰部を掴まんとす武士(當)右足を引披らさ左手にて内へ
敵手の右手を拂ひ直に其手首を握り右手にて敵手の右手の尺澤を握り(曳)寸口の如く
す

十一 膝掴

十二 左右の違ひ

敵手進み右拳にて(矢)打込む武士(當)右腕にて受止め直に其右手首を握り左足を敵手
の右足の外側へ踏み込みつゝ敵手を敵手の右腋下より入れて逆に敵手の左襟を掴み一

且敵手を引寄せて體勢を崩し左足の跡にて敵手の右膝脇を搦ひ(曳)突き飛をせ遣る敵手(當)右足を脱ぎ趾蹠のみにて小歩に跡退りしつゝ、仰倒猫回へりし立つ

十二 引落

十四 左右の違ひ

武士進み敵手右拳にて(矢)打込み武士(當)右腕にて受止め外より内へ捲きつけて其手首を握り左手を敵手の右の二の腕へ添へると同時に左足にて敵手の右腰を踏張り敵手の體勢を崩し左足を外すと同時に右足を引披らさつゝ、敵手を(曳)引つけ放つ敵手(當)狐飛び右肩猫回へりす

十五 脚當

十六 左右の違ひ

互に進み武士は敵手の右側より後方へ廻はり四ツ通りしつゝ、右肩にて敵手の左脚へ(曳)當る敵手(當)兩膝を疊につく武士は更に敵手の左側へ飛込み左手にて敵手の左手首を握り右手にて敵手の左の二の腕を握り(曳)羽代せに押つけんとす敵手(當)左肩猫回へりし去る

振氣流練體柔術第四段之形

此第四段は初段より第三段迄の形に捨身と掬ひ倒しを前後に加へて所謂五十二ノマ手の早業ハヤウヂとなる早業は起り頭ら起頭らに早業ハヤウヂにし一氣連續舉止敏捷にすへし

一 片手取り捨身

一一 左右の違ひ

武士進み敵手右足を踏出し右手にて(矢)武士の兩襟を掴んどし押し出る武士は(當)其押し出て来るを利用し兩手にて其右手を握り右足を敵手の股へ入り込み左足を縮めて敵手の耻骨にあて(曳)弾ね遣る敵手(當)爲し得る丈け狐飛び右肩猫回へりす○三四片手矢筈○五六兩手弾ね羽伏せ○七八拳突き○九十後抱き○十一十二後抱き返し○十三十四拳突き逆倒し○十五十六兩手取り拳突き上げ○十七十八爪返し○十九二十下手羽伏せ○二十一二十二下手肘當り○二十三二十四下手首捲き○二十五二十六胸倉取り脇打ち○二十七二十八腕止め己が首捲き○二十九三十寸口○三十一三十二押し潰され返し○三十三三十四入り込み蹴上げ○三十五三十六頭胴打ち○三十七三十八壁副へ○三十九四十意表○四十一四十二鎌掛○四十三四十四釣鐘○四十五四十六膝脇○四十七四十八引落○四十九五十脚當り○五十一五十二掬ひ倒し此掬ひ倒しは武士敵手の後方より

両手にて敵手の咽喉を捲き締めて敵手の浮きたる兩脛を搦ひ上げ(曳)片側へ倒す敵手(當)仰向す最後の五十二、手目には武士左脛を枕らさせ右手にて敵手の右腕を搦み握り左手にて敵手の左襟を握り咽喉をかたむ敵手は必らず右足を高擧し居りて疊を拍ちて降参りの記號をなすへし

注意 咽喉を締めらるゝ者は決して物を云ふ可らず是れ片足を高擧し居りて疊を拍ちて降参りの記號をなす所以なり

振氣流練體柔術第五段之形

此第五段は總尺壹尺六寸にして柄四寸刀身壹尺貳寸の小太刀を持し長柄竹刀を取拉く目的の使用法なり劍術の道具を着用すれば入り身して撃ッなり突くなり自在にす敵精眼に構へは其刀尖に手變りして電入す是に於て敵は兵字若くは斜に構へざるを得ざるへし武士は挑みて打出さしめ又は虚を見て電入する等互格試合なれば七三の克ちを得るものとす然も亦氣の作用甚々大事なり昔し杉木某兵法の奥義を極めんと欲し回國修行の途次或る谷川に行き掛り、渡り兼て居りしに盲人來り杖にてチヨツ

と其橋を撈索よと見る間にヌラリと渡りしに感發し以爲らく人の物に恐るゝも氣なり物に恐れざるも氣なり恐れざるの氣を以て恐るゝの氣を制せば世に恐るゝものなけんど乃ち神夢に托して圓橋之形を作りしと云ふ今日より之を見れば神を引て信を求んより寧ろ理を推して信を求むべきなり何となれば闔は目を瞑して奔るも棟は手足、震ふて渡る能はず是れ皆な恐れざるの氣を以て恐るゝの氣を制するど否との理由に外ならされはなり

問ふ夢に柔術を見るは如何なる理由乎管子亦之を思ひ之を思ひ又之を思ひ通せされは鬼神之を通すと云へり或は爲めに自得の念を強ふするに足らん未た之を以て神夢とは謂ふ可らざるなり又問ふ夜間安眠する能はざる時あり理由如何答ふ運動不足なる徵候なりとす運動不足なるに加へて茶の如きを以てせば必らず精神恍惚として多夢譚語し或は無益架空の事を案し煩ひ曉きに至り漸く熟眠せんとす此時務めて柔術の初段より段々と追想し考へ往く間には必らず安眠すへしサテ是れ等は題外に渉るも安眠は安眠の方法あると一般に物に恐れざるの氣を以て恐るゝの氣を制する

も亦手段なくんはあらず其手段の一として壹尺六寸の小太刀使用法に熟達すへし着
着自得する所あらん王陽明亦曰山中の賊を破るは易し心中の賊を破るは難しと物に
恐るゝの氣あるは心中の賊なり心中の賊を打破て而して幾萬人の中と雖往て敵する
の勇なくんはあらず

此第五段以上は掛け聲を略すと雖總へて(矢)當(曳)初段の如くすへし

一 胸倉隼表

(總へて太刀の技は左右あることなしと知れ)

武士は小太刀を右片手精眼に構へ敵手は太刀を兵字に構ゆ武士ヌラリと進む敵手は太
刀を武士の眞向へ打込む武士は十字形に受止め直に左手にて敵手の左の頸の襟を掴み
敵手の右側へ敵手を引寄せて突く氣勢をなす

二 胸倉隼裏

武士敵手共に前の如くし武士は左手を逆にして其胸倉を掴み押し立て、左膝を疊にの
き小太刀と右足とを敵手の股間へ入れ敵手を兩肩の上へ擔き負ひ左側へ抛け落して仰
向せしめ左手にて左膝の側へ引寄せて突く氣勢をなす

三 右腕隼表

互に前の如くし武士の打込む太刀を受止め直に左足を深く踏込み左手の尺澤にて敵手
の右の二の腕を下より捲き上げ小太刀を右腰へ扣へ引寄せて突く氣勢をなす

四 右腕隼裏

互に前の如くし武士より突んとする時敵手は左手にて武士の右手首を握り止む武士は
腰を削り稍々引退きて刀尖を敵手の腹部より向け左手の尺澤を利せながら右足を敵手の
股間へ入り入れる敵手は刀尖に觸れさる様に回轉し仰向す武士は敵手の回轉するに連
れて回へり起き敵手の腹上に跨かりて突く氣勢をなす但平生は刀尖を腹部へ向く可
す

五 左腕隼表

互に前の如くし武士は敵手の太刀を受止め直に敵手の左側へ飛込み左手の尺澤にて敵
手の左の二の腕を上へより入れて捲き締め稍々敵手を引寄せて突く氣勢をなす

六 左腕隼裏

互に前の如くし武士は一旦左手の尺澤にて敵手の左の二の腕を捲き其腕を小太刀の傍際にて押へつゝ左手にて敵手の左手首を握り傍際にて押し付けると同時に右踵を敵手の左足へ引掛け倒して突く氣勢をなす

七 臍帯集表

武士に進んで敵手の精眼より突き掛けたる刀尖を吾が右方へ小太刀にて打拂ふや否や電入して臍帯を下より取り敵手を引寄せて突く氣勢をなす

八 臍帯集裏

互に前の如くし武士より突んとする時敵手は左足を踏込み左手にて武士の突んとする其右手首を握る武士は腰を割り右拳を下へ向け右小指の右手首に接する様に曲げて己れの右足の方へ突き延ぶると同時に右足を引披らき更に右足の蹠裏にて敵手の左外踝を拂ひ倒し稍々馬乗りにて敵手の腹部に跨がりて突く氣勢をなす

九 奪刀集表

互に前の表の如くし武士は己れの左方へ敵手の刀尖を打拂ひ右足を敵手の左足の外側

へ踏込み左手を逆にし敵手の太刀の中柄を握り吾が小太刀の傍際にて敵手の左手首を摺り捻ぢ離すと同時に敵手の太刀を己れの左大腿の外側を経て後方へ放棄ると又同時に右足を軸にし左足を引き稍々敵手の左側の後に移る

十 奪刀集裏

互に前の如くし武士は敵手の左側後へ移る敵手は其背面より左手を武士の左肩へ右手を武士の右の内股へ掛け武士を抱き上んとす武士は小太刀を逆に左手へ移し刃を外へ向け握りて右手の尺澤にて敵手の首を捲き込み敵手は武士を抱き上げて徐ろに卸ろす武士は左肘をく字にし疊に卸ろされんとする時稍々四ッ這りし穹窿の下へ敵手を捲き廻はし込み右腋の下へ敵手を組み敷き左手の逆に持ちたる小太刀にて突く氣勢をなす

十一 鞍下掬ひ投げ

武士は敵手の兵字構へより打込む太刀を十字形に受け直に左手にて敵手の帯廻はりを捲き締め左膝を屈め左臑骨を敵手の股へ入れ左臑骨にて掬ひ上げ己れの右足の前へ投る

十二 受け返し引き胴足搦み

武士は敵手の精眼より頭上へ摺り込み打つ太刀を逆十字形に稍々小太刀の切先きは敵手の左耳へ注ぎ小太刀の柄は己れの左肩の方へ小太刀を斜めにし敵手の摺り込み打來る太刀を弾ね上る心持にて受止め直に其右拳を轉回し小太刀を敵手の右腋より左腋へ掛け太窩を引き切ると同時に右足を敵手の左足の外側へ踏移し脱けて其引き切り脱きたる小刀は右腰へ取り左足は右足へ引寄せ復た直に其左足を敵手の左足の後へ深く踏込み左手を矢筈にし敵手の腮を張りつゝ左大腿を利せて倒す敵手仰倒し後ろ猫回へりし立つ

十三 夢見要領

武士は小太刀を稍々右腰の前へ精眼に取り體を左向きにせず唯た平生に歩む心持にて小太刀尖を長圓形に上下にうねり往きつゝ吾が小太刀を吾が左の方より敵手の精眼に構へ居る太刀の裏らへ極柔らかに合せつゝ其太刀を何の心なき體にて敵手の左肩の方へ押し上げつゝ右足も摺り込み敵手の左拳を敵手の右肘の外へ出る様にし其左拳の右

腕の外に出たる時武士は力を刀尖に入れ左手を柄頭へ添へ敵手の太刀を輪形に右へ下へ捲き込みつゝ左足を左外へ踏移しつゝ吾が小太刀の峯にて敵手の太刀の中心を弾ねて吾が右方の天井と壁の隅へ飛ばし遣り武士は更に左手にて逆に敵手の右襟を掴み以下第四段の初本右片手取り捨身の如くす(劍術の際互に精眼に取らば必ず之を不意に應用すべし刀尖をうねり何心なく兩足を摺り込み捲き込むべし若し外ツるれば振り返して左横面等を打つべし)

振氣流練體柔術第六段之形

此第六段乃至第八段の形の表は他流の技にして其裏は當振氣流の技なり

一 荒木片手胸取り表

二 左右の違ひ

敵手左手にて武士の右襟を掴み稍々押し掛る武士左手にて敵手の左拳を覆ひ握る即ち拇指を敵手の左拳の甲にあてる様にす敵手より強く押し來る時武士は右足を引き兩拇指を利せて家根板割りにし左足を引きつゝ左膝を疊につき押へる敵手片四ツ這りす

三 當振氣流其裏

四 左右の違ひ

互に前の反對に取組み敵手が左膝を疊につきたる時武士は右へ半を猫回へりし蹴り起

て羽伏せにかたむ敵手片四ツ這りす

五 起倒流腕止め表

敵手右拳にて打掛る武士右足を引き左腕にて受止め直に敵手の打込たる右手首を取り左腰へ引付けて右手の手刀を敵手の右肩へあて、右足を敵手の右足外へ踏込み敵手の右足を後へ拂ふと同時に右の手刀を押し左手を利せて敵手を倒す敵手仰向

七 當振氣流其裏

互に前の反對に取組み敵手が右手の手刀にて押し來る途端に武士は體の重みを左足へ托しチョンチョンと釣り合ひを取りつゝ身を替はし左手にて敵手の右腕を押し遣りて右手は引き離す敵手四ツ這りす

八 左右の違ひ

九 關口流襟投げ表

武士右手にて敵手の左襟を取り右足を踏出し押し掛り右膝を疊につく敵手は左手にて武士の右手首を握り右拳にて武士を打んとす武士は際疾く己れの右腕の下を潜り敵手を脊負ひ前方へ抛け遣る敵手右肩猫回へりす

十 左右の違ひ

